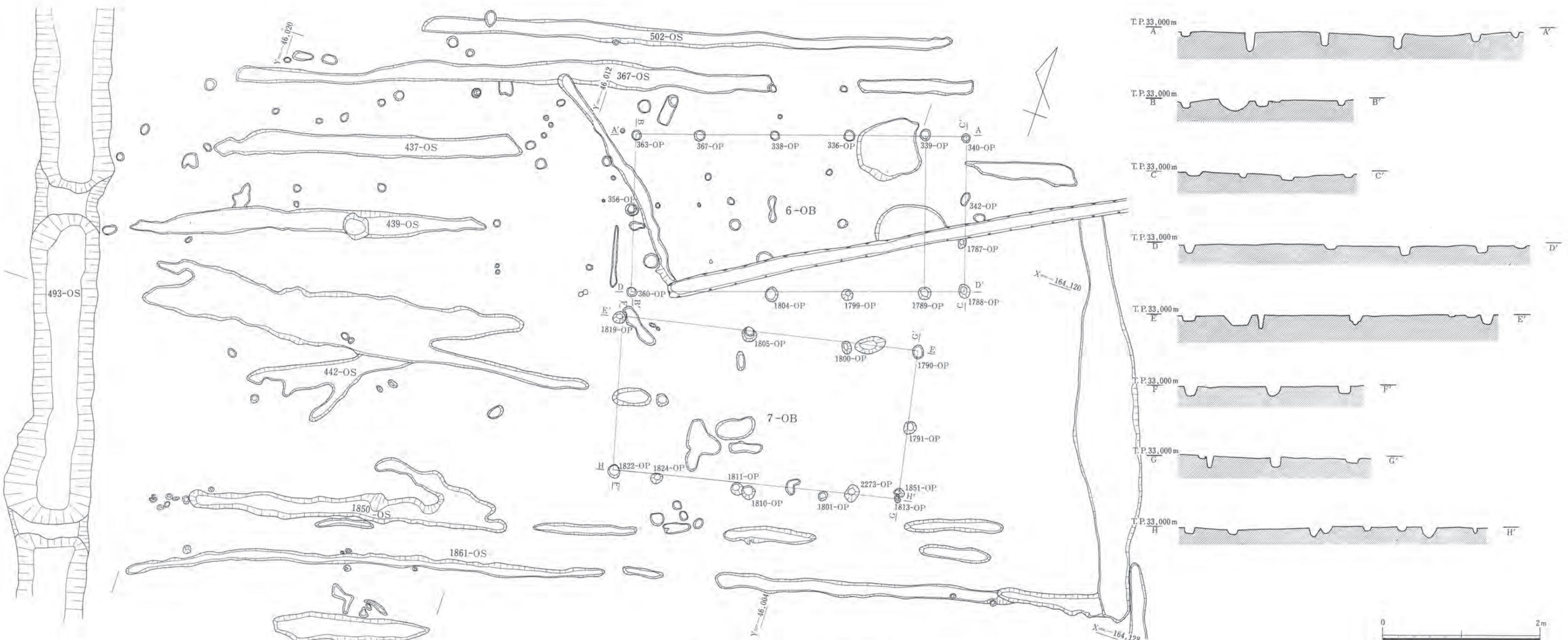




第30図 B地区 遺構配置図



第31图 B地区 3、4、5-OB平、断面图



第32图 B地区 6、7-OB平面、断面图

東西4.5mを測る。柱穴間隔は不規則で1.6~2.0m、柱穴は直径20~30cmの不整円形もしくは、楕円形で、深さ12~28cmを測る。柱穴埋土は黄褐色粘質土である。出土遺物はB-273・282・288-O Pから瓦器碗の小片が出土している。

B-6-O B (第32図)

B地区ほぼ中央、北寄りで検出した掘立柱建物である。B-2-O Bとは約1mの間隔をあげ、南東に位置する。B-339・336・338・367・363・356・360・1804・1799・1789-O Pによって構成され、4間×2間の建物で、方位はN-107°-Wである。寸法は南北4.3m、東西7.5mを測り、柱穴間隔は1.6~1.8m、柱穴は直径25~30cmの円形で、深さ12~44cmを測る。柱穴内埋土は黄灰色粘質土である。B-339・1789-O Pの東側約80cmの所にB-340・1788-O Pが存在し、342・1789-O PとともにB-6-O Bの庇であると考えられる。出土遺物は1799-O Pから瓦器碗の小片が出土した。

B-7-O B (第32図)

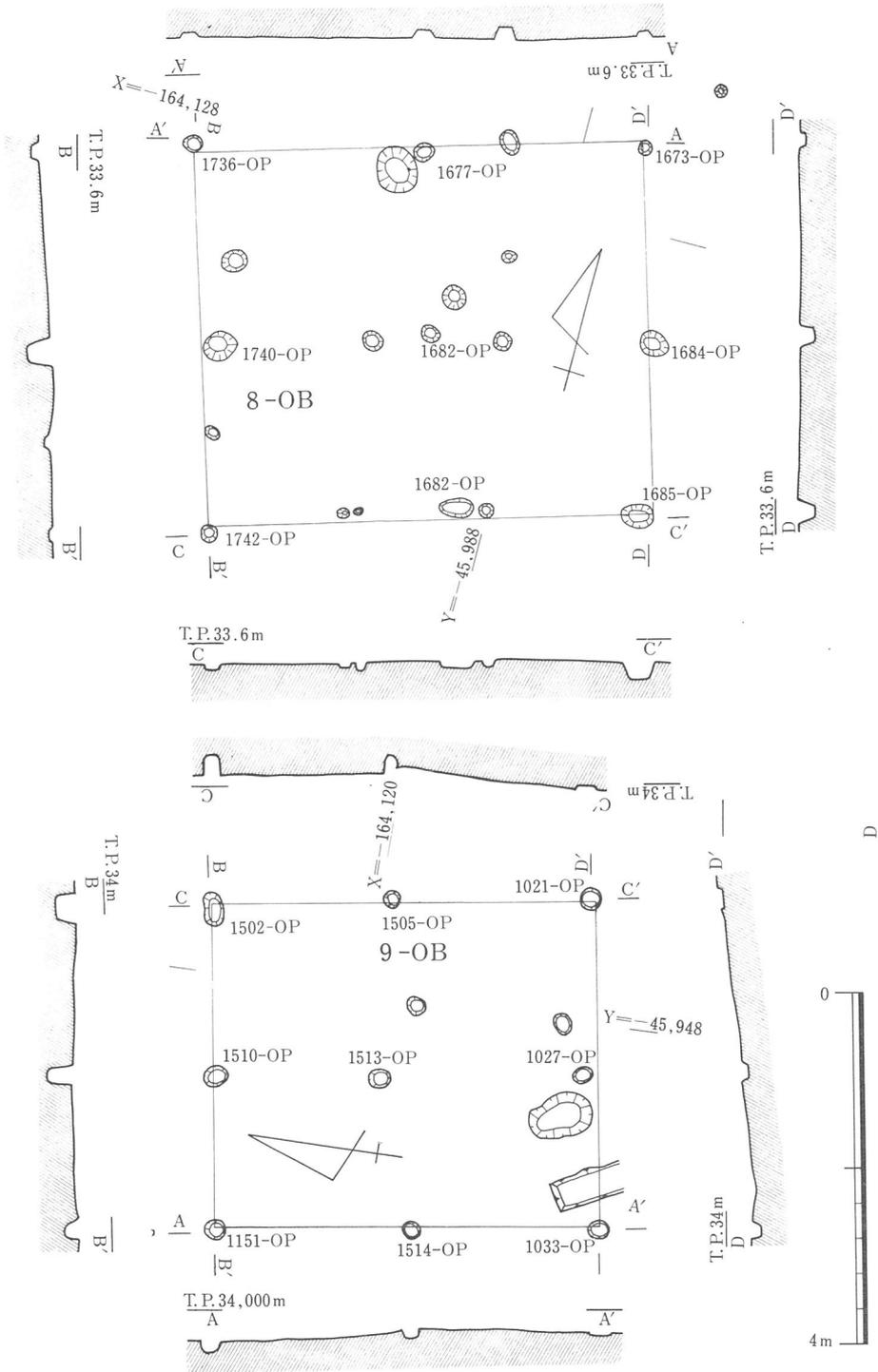
B地区ほぼ中央、北寄りで検出した掘立柱建物である。B-6-O Bとは約0.7mの間隔をあげ、南に位置する。B-1790・1800・1805・1824・1811・1801・1813-O Pによって構成され、北西端の柱穴は確認できなかったものの3間×2間の建物と推定される。方位はN-103°-Wである。寸法は東西6.2m、南北3.8mを測り、柱穴間隔は2.0~2.2m、1824-O Pからさらに西側1.2m、1805-O Pからさらに西側3.3mの所に1822・1819-O Pが存在する。柱穴は25~37cmの円形で、深さ8~24cmである。柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。遺物は1822-O Pから瓦器碗、土師器皿、羽釜の小片が出土した。

B-8-O B (第33図)

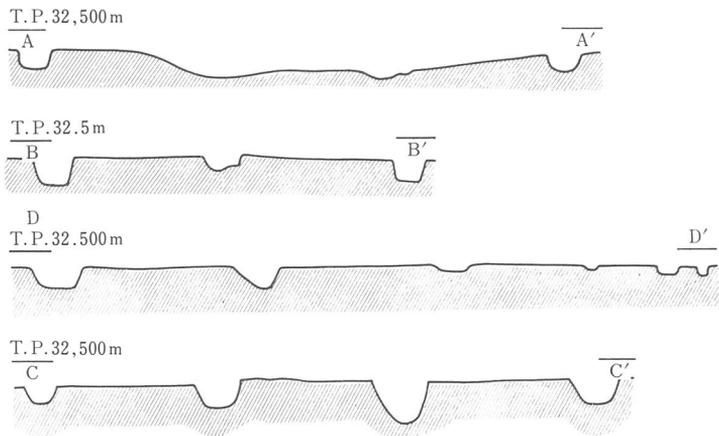
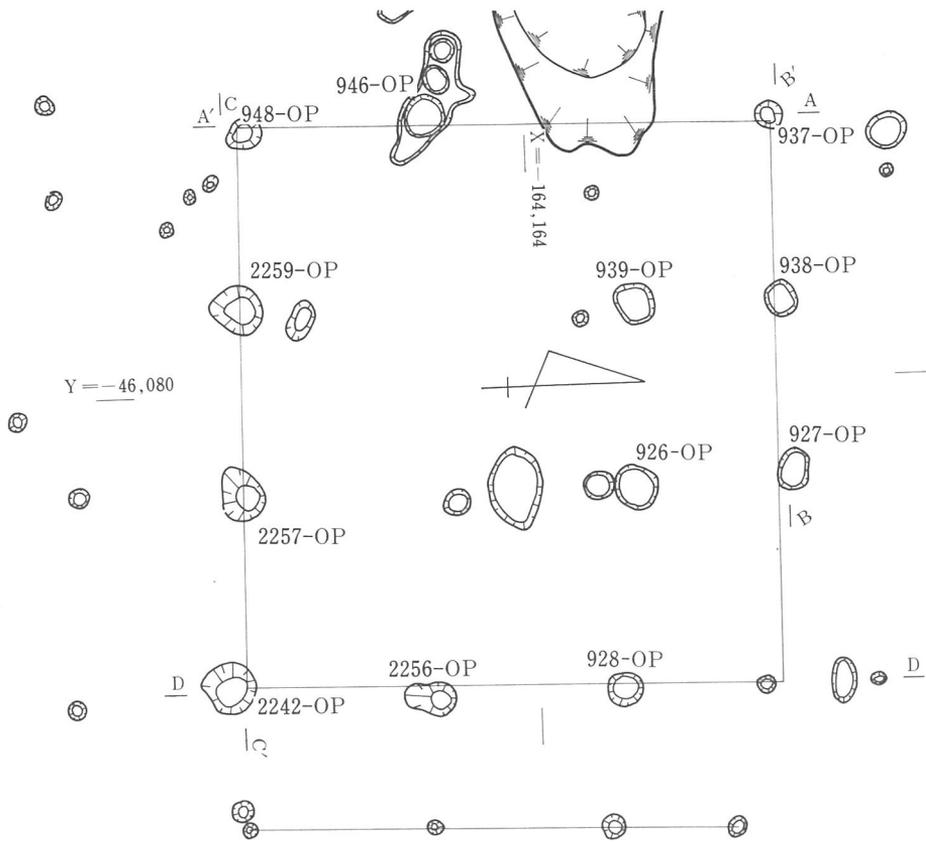
B地区ほぼ中央で検出した掘立柱建物が推定できる遺構である。B-7-O Bとは18mの間隔をあげ、南東に位置する。B-1673・1684・1685・1677・1736・1740・1742・1682-O Pによって構成され、南側柱中央の柱穴は確認できなかったが、2間×2間の建物が推定される。方位はN-14°-Wである。寸法は南北4.3m、東西4.8mを測り、柱穴間隔は2.0~2.6m、柱穴は20~40cmの円形もしくは楕円形で、深さ6~20cmである。柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。出土遺物はB-1684・1685・1740-O Pから瓦器碗、土師器皿、羽釜が出土した。

B-9-O B (第33図)

B地区西南で検出した掘立柱建物である。B-1028-O Oとは1.2mの間隔をあげ、北側に位置する。B-1502・1505・1021・1066・1514・1511・1510-O Pによって構成され、



第33图 B地区 8、9-OB平面、断面图



第34图 B地区 10-O B平面、断面图

2間×2間の建物である。方位はN-9°-Wである。寸法は南北4.3m、東西3.8mを測り、柱穴間隔は1.8~2.2m、柱穴は20~25cmの円形で、深さ20cmである。柱穴内埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は、B-1510-OPから瓦器碗、瓦質小皿、土師質大皿、羽釜が出土し、地鎮の可能性が考えられる柱穴である。

B-10-OB (第34図)

B地区北西で検出した掘立柱建物である。B-927・938・937・946・948・926・2256・2242・2257・2259・928・939-OPによって構成され、北東端の柱穴は確認できなかったものの3間×3間の建物が推定できる。方位はN-3°-Wである。寸法は南北5.9m、東西6.4mを測り、柱穴間隔は2.0~2.3m、柱穴は直径35~60cm、深さ16~30cmである。柱穴内埋土は黄灰色粘質土である。B-10-OBの東側、西側には直径16~28cm、深さ12~15cmのピットが不規則に4ヶ所あり、柵列の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

B-11-OB (第35図)

B地区南西で検出した掘立柱建物である。B-1213・1245・1246・1250・1258・1256・1225・1219・1253-OPによって構成され、2間×2間の建物である。方位はN-3°-Wである。寸法は南北4.2m、東西3.3mを測り、柱穴間隔は1.5~2.0m、柱穴は直径15~20cm、深さ4~16cm、柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ピット群1 (第30図)

B地区北東、3-OBの東約8m付近には直径10~30m、深さ10~35cm程度のピット群がある。遺物は出土しなかった。

ピット群2 (第30図)

B地区北東、3・4・5-OB付近には、これらの建物の柱穴以外に直径10~35cm、深さ8~30cm程度のピットがある。出土遺物は、156・165・182~184・203・222・254-OPから土師質羽釜、小皿、瓦器碗の小破片が出土した。

ピット群3 (第30図)

調査区中央、1・2・6・7-OB付近には直径10~30cm、深さ10~30cm程度のピットがある。出土遺物は403・410・334・337・388・384-OPから黒色土器、土師質羽釜、小皿、瓦器碗が出土した。ピット群3のピットの中には平安時代になるものも含まれる。410-OPは、土師質の小皿が13枚乱雑に重なった状態で出土し、地鎮の可能性が考えられるピットである。

ピット群5 (第30図)

B地区西側、9-O B付近には直径15~30cm、深さ20cm程度のピットがある。出土遺物は、1013・1014・1015・1017・1022-O Pから瓦器碗の小破片が出土した。

ピット群6 (第30図)

B地区東寄り、9-O Bの南には直径10~40cm、深さ10~20cm程度のピットがある。出土遺物は、1073・1693・1760-O Pから瓦器碗の小破片が出土した。

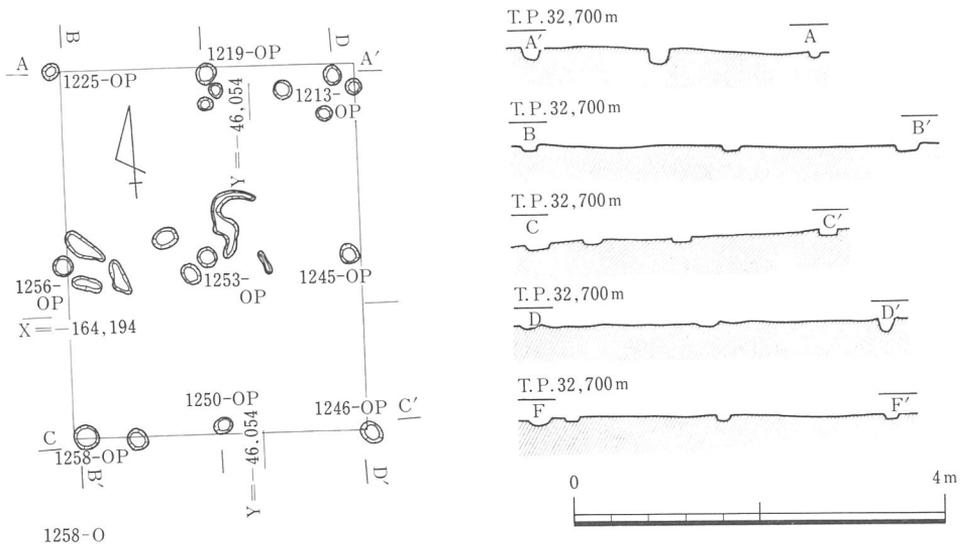
b. 土壌

B-229-O O (第37図)

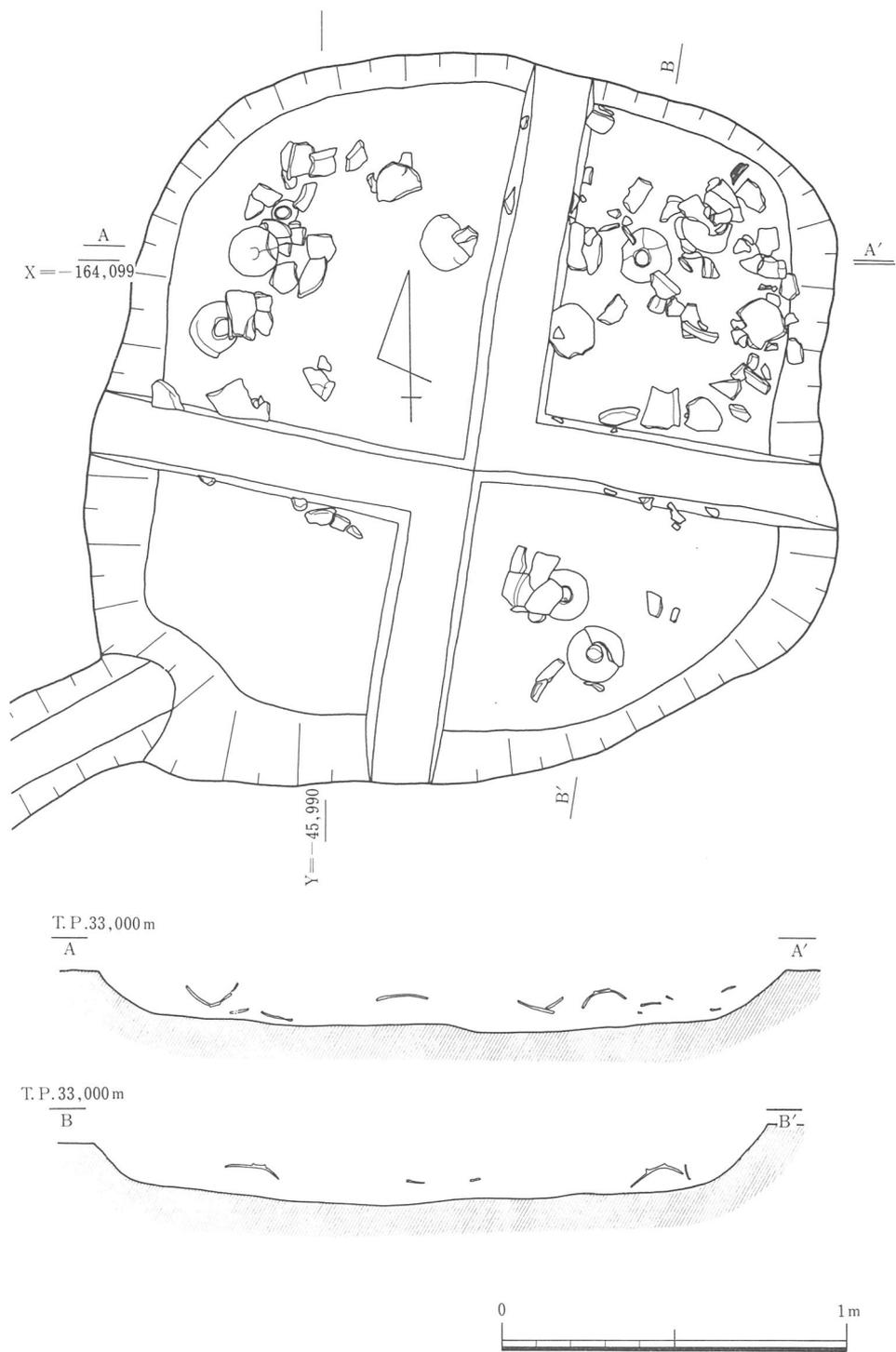
B地区北東で検出した土壌である。長径2.9m、短径2.5m、深さ29cmを測り、不整形なプランを呈す。土壌内埋土は6層に分層でき、最下部には木炭層が薄く堆積していた。土壌内出土遺物は、瓦器碗、土師質の大皿、小皿、羽釜が出土した。

B-296-O O (第36図)

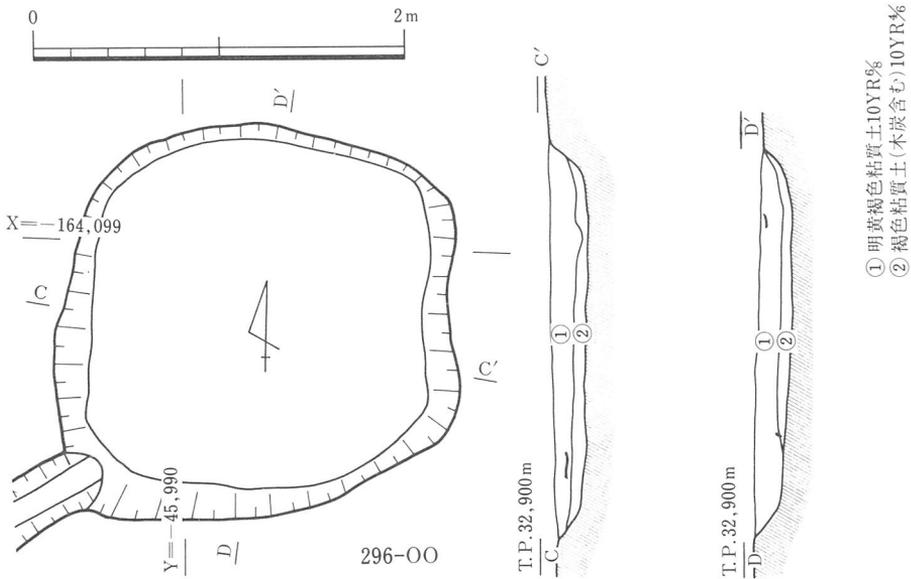
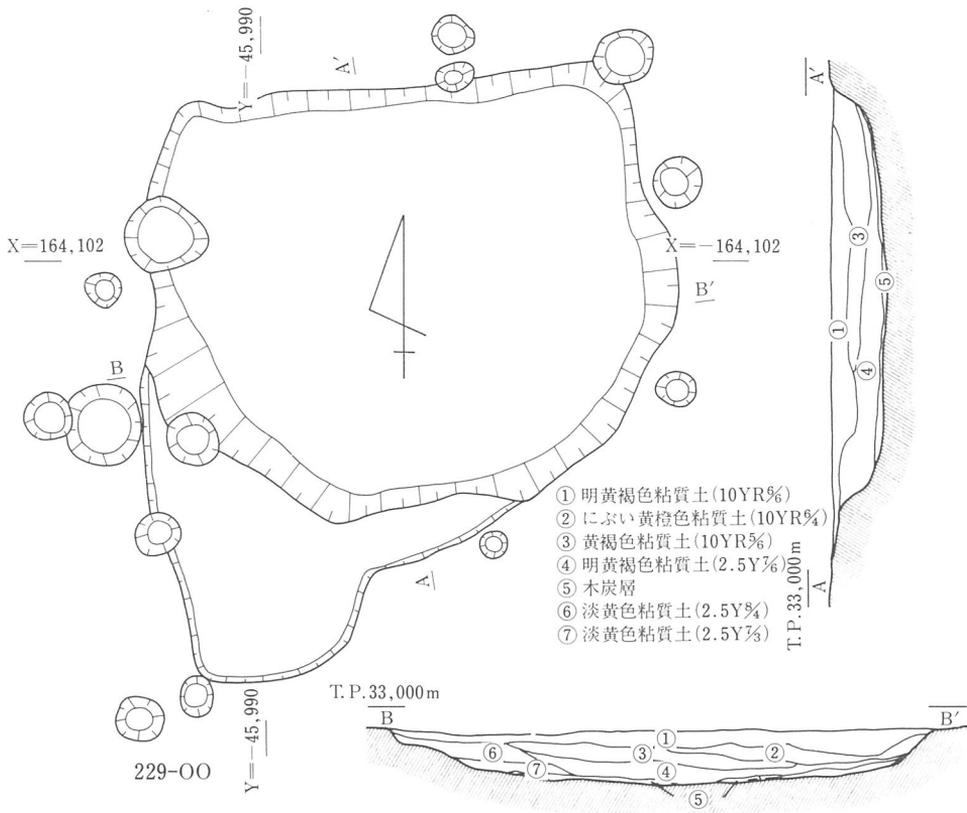
B地区北東で検出した土壌である。B-229-O Oとは約0.5mの間隔をあげ、北側に位置する。長径2.2m、短径2.1m、深さ18cmを測り、不整形なプランを呈す。土壌内埋土は2層に分層できる。この土壌は、南西部でB-251-O Sと接するが切り合いは確認できなかった。土壌内出土遺物は、瓦器碗が完形のまま出土しており、その他に土師質の大皿、小皿、羽釜が出土した。



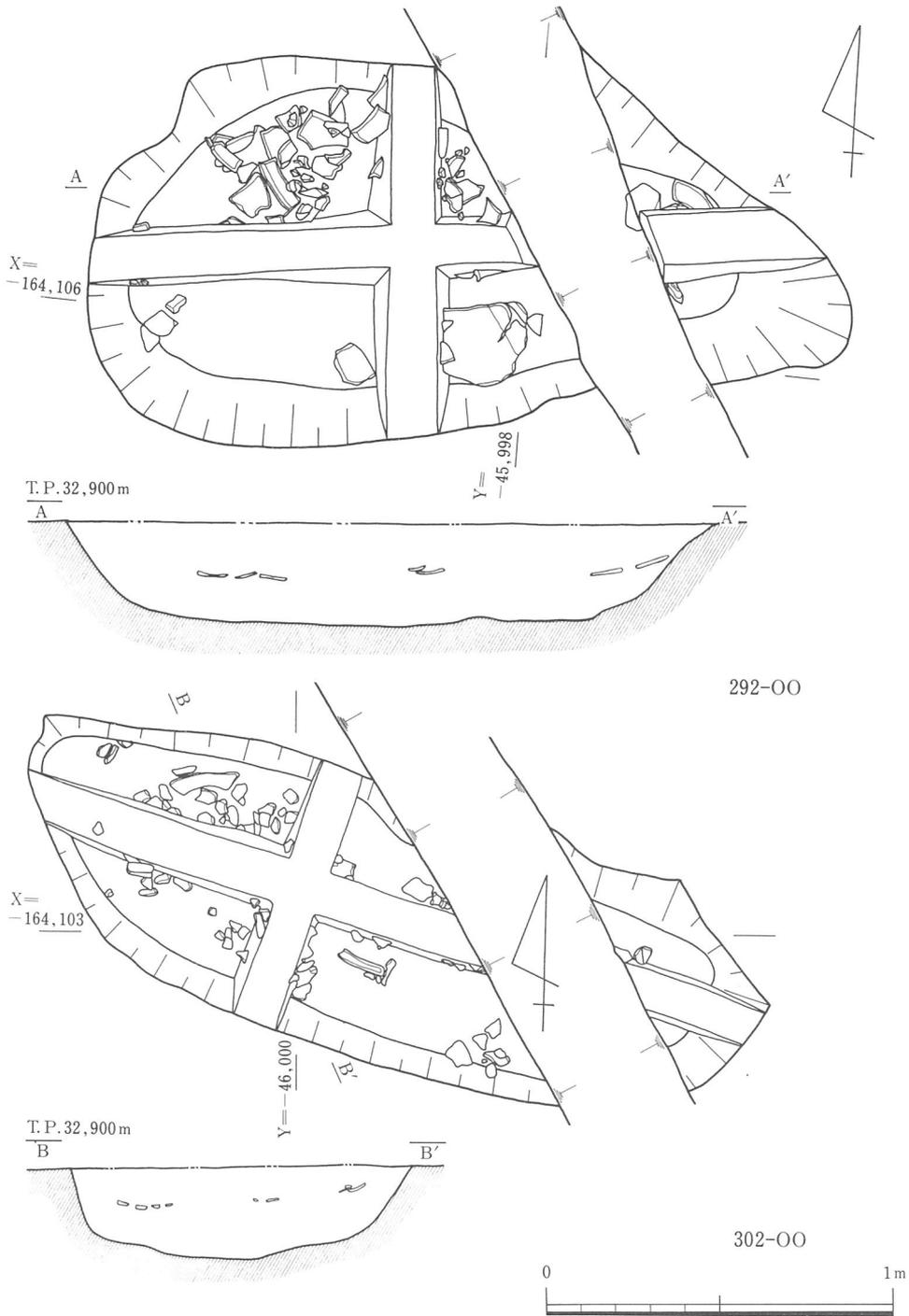
第35図 B地区11-O B平面・断面図



第36图 B地区 296-OO遺物出土狀況、平面、断面図



第37図 B地区 229, 296-00平面、断面図



第38図 B地区 292, 302-00遺物出土状況、平面、断面図

B-265-00 (第30図)

B地区北東で検出した土壌である。長辺1.1m、短辺1.0m、深さ20cmを測り、台形のプランを呈す。土壌内埋土は3層に分層でき、最下層には木炭層が薄く堆積していた。南壁を除くすべての壁は地山が赤色化しており、底部は赤色化していなかった。遺物は出土しなかった。

B-292-00 (第30図)

B地区北東で検出した土壌である。B-265-00とは約1mの間隔をあげ西側に位置する。長径2.2m、短径1.1m、深さ30cmを測り、舟底状を呈する。土壌内埋土は3層に分層でき、焼土塊がブロック状に混入していたが、壁の焼けた痕跡は確認できなかった。出土遺物は、主に土師質の羽釜が多数出土する。この羽釜の外面には、煤が付着していないため、未使用と考えられる。他に瓦器碗、土師質の小皿が出土した。

B-302-00 (第38図)

B地区北東で検出した土壌で、B-292-00とは約2mの間隔をあげ北側に位置する。長径2.3m、短径0.8m、深さ26cmを測り、舟底状を呈する。土壌内埋土は4層に分層でき、2層・4層には焼土塊がブロック状に混入していたが、壁の焼けた痕跡は確認できなかった。出土遺物は、土師質の羽釜が多量に出土する。その羽釜は、B-292-00同様未使用のものが多数ある。他に瓦器碗が出土した。

B-304-00 (第41図)

B地区北東で検出した土壌で、B-302-00とは約0.7mの間隔をあげ西側に位置する。長径1.8m、短径0.8m、深さ8cmの不定形なプランを呈す。土壌内埋土は1層である。出土遺物は、瓦器碗がある。

B-1610-00 (第42図)

3-OBの南約4mの位置で検出した不整形を呈する土壌である。長径1.52m、短径1.18m、深さ8cmを測る。土壌内埋土は1層である。出土遺物は、瓦器碗の小破片が出土した。

B-1746-00 (第41図)

ピット群6付近に位置し、隔丸長方形を呈する土壌である。長径3.1m、短径2.8m、深さ12cmを測る。土壌内埋土は1層である。ピット群6のピットを切る。出土遺物は瓦器碗、土師質羽釜、大皿、小皿が出土した。

B-1028-00 (第39、40図)

B地区南東で検出した瓦器焼成窯が想定できる遺構である。長径1.4m、短径1.15m、

深さ15cmを測り、平面は楕円形を呈する土壌である。東壁、南東壁の一部には、熱を受け赤色化した粘土が張りつけられており、南東壁では粘土の中に笹が混っているのを確認した。この粘土は、舟底状を呈する底部から10cm前後上にあがった位置の壁面から張りつけられ、約45度内側に傾斜しながら立ち上がる。底部、西側壁は、肉眼では焼けた痕跡は確認できなかった。西側壁には若干のくぼみがみられる。遺構内埋土は大きく3層に分層できる。最下層に木炭焼土が多量につまった遺物を少量含む層、中層は西側が炭層で、東側は遺物を多量に含むにぶい橙色粘質土が堆積する。上層は木炭、焼土をあまり含まない淡黄色粘質土が堆積していた。堆積状況からして、最下層と中層は瓦器窯使用時に堆積したもので、上層は廃棄されて以降堆積したものと考えられる。出土遺物は、瓦器碗が主で、破片数にして1765片出土した。瓦器碗以外には瓦器小皿50片、土師器大皿33片、小皿19片、羽釜72片、鍋25片、鉢12片が出土した。大多数の瓦器碗は、既に炭素が付着した状態のものが出土しており一部のみ生焼けの瓦器碗も出土している。瓦器碗以外の土師器羽釜、大、小皿は、炭素が付着したものやしないものが出土した。遺物出土状況は、遺構内全体に遺物が散乱した状態で検出したが、上部の小破片を除去した段階で完形の瓦器碗が表向きで数枚重なった単位が6単位東側寄り確認できた。一単位は4～6枚程度重なっていた。西側寄りでは遺物も少なく小破片ばかりで、炭層が堆積していた。表向きで数枚重なった単位は、最下層より上で出土し、最下層の遺物は表向き、裏向き様々で大半は小破片である。瓦器碗以外の遺物は、中心よりも壁ぎわに多く出土する傾向がみられ、鉢、羽釜、鍋の内面に瓦器碗の高台の痕跡が確認できるものがある。

以上のことから本遺構は西側に焚口をもち、燃焼部、焼成部の構造上区別のない瓦器焼成窯と考えられる。

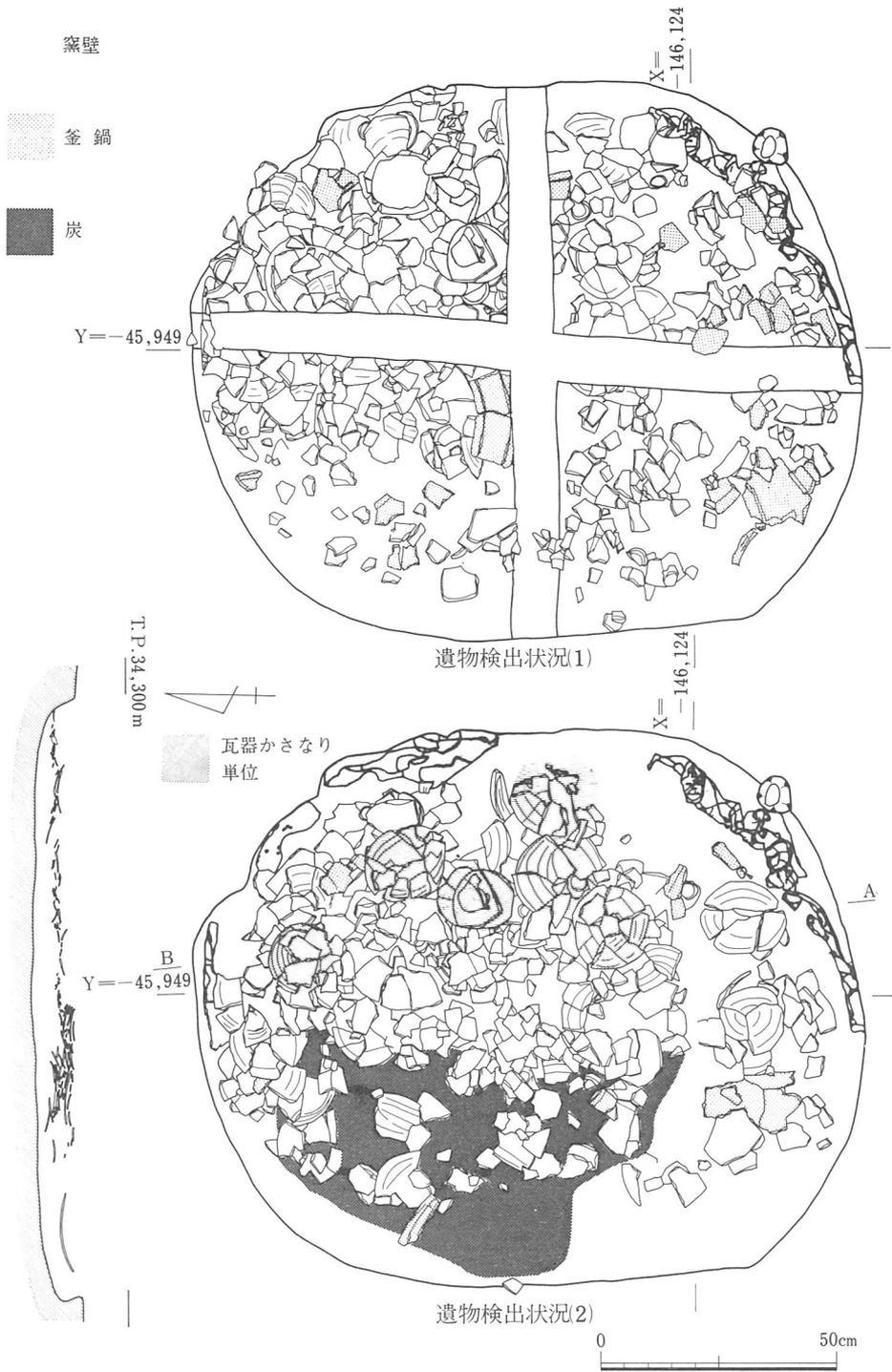
c. 溝

B-102-O S (第30、44図)

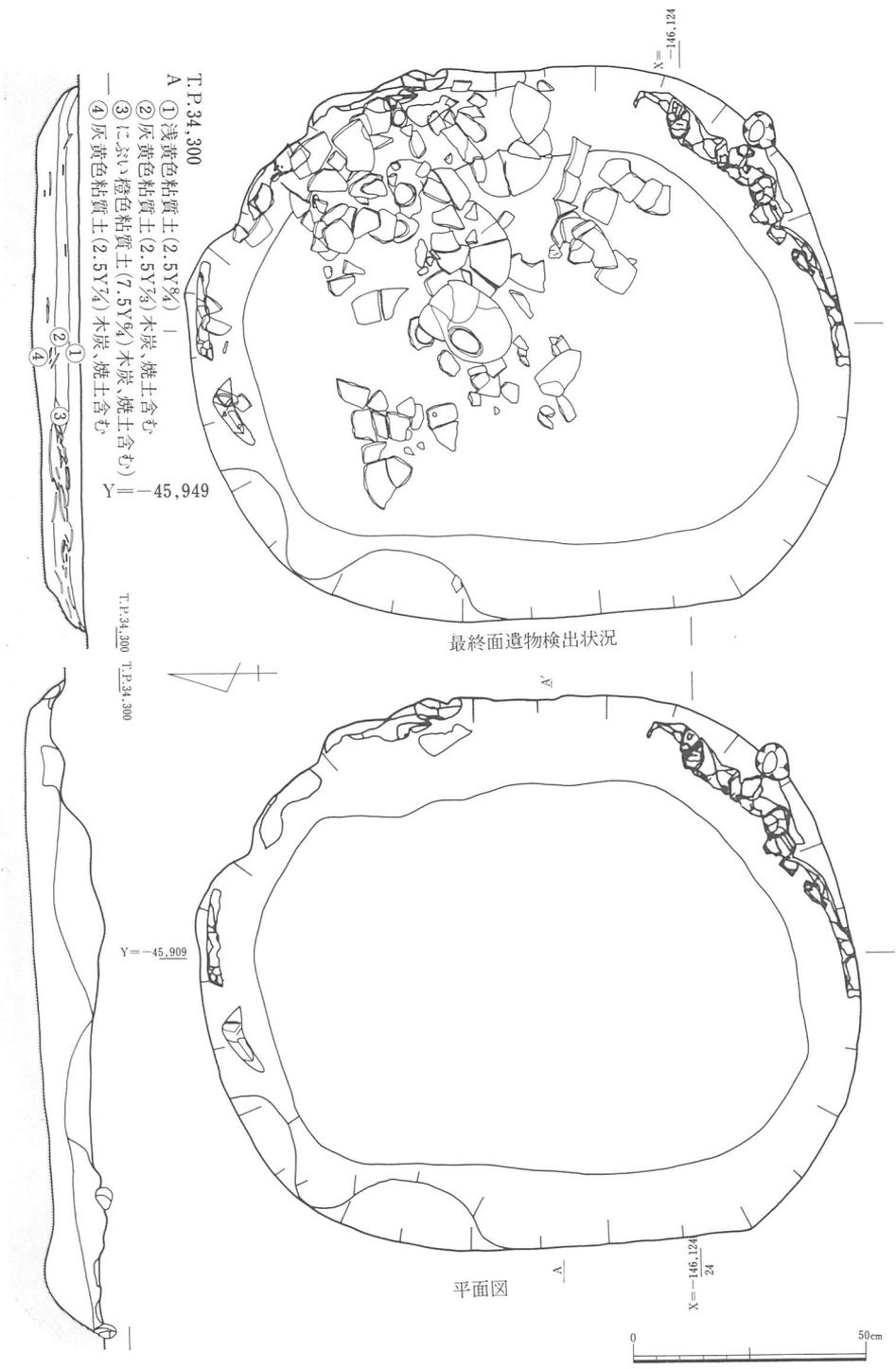
B地区北東で検出した溝である。周囲には多数のピットが存在する。検出長6m、幅22～50cm、深さ10cmを測る。B-127-O Sを切り東西方向にのびる。溝内埋土は浅黄色粘質土である。

B-127-O S (第30、44図)

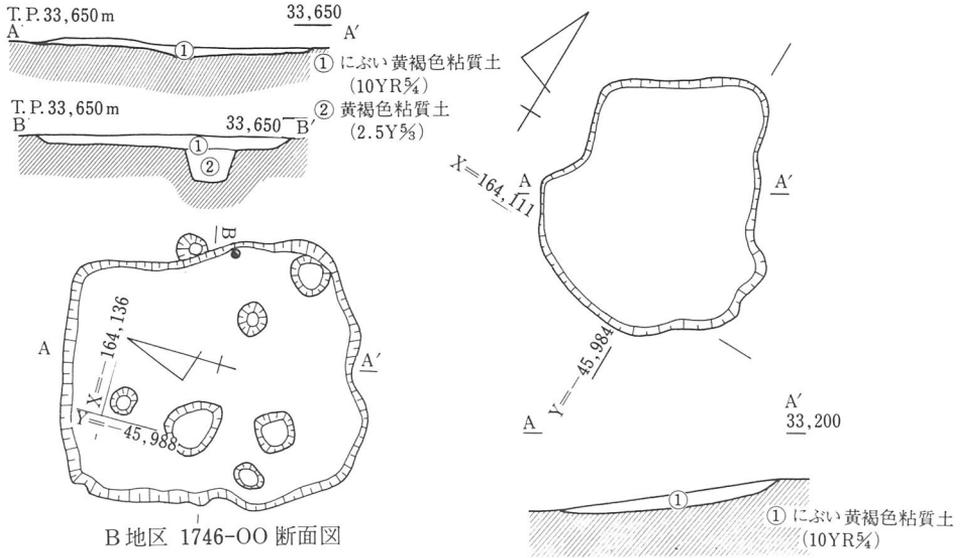
B地区北東で検出した溝である。東に2.5mのびたのち北に方向を変え2.0mのびる。幅は12～60cm、深さ5cmを測る。溝内埋土は明黄褐色粘質土である。出土遺物は瓦器碗の小破片が出土した。



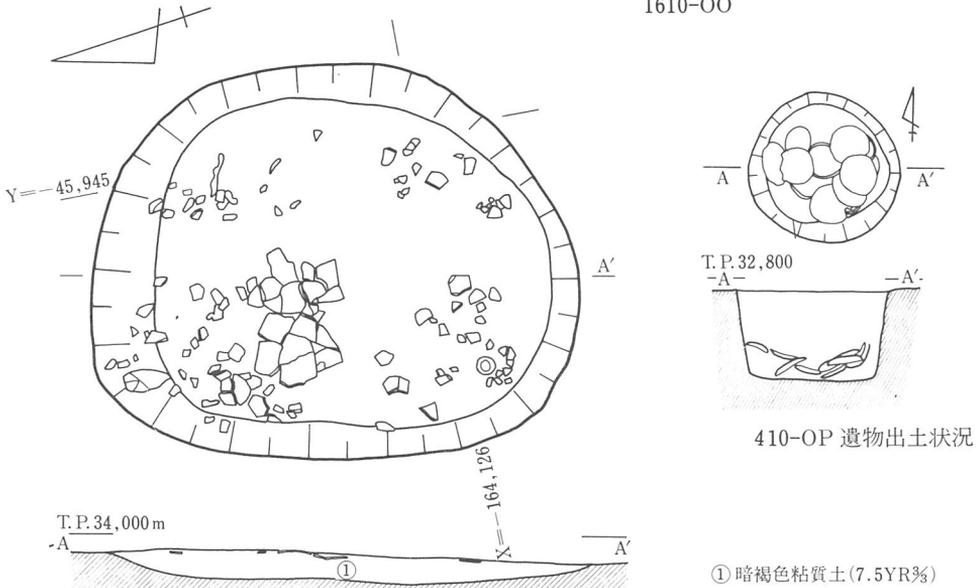
第39図 B地区瓦器窯 1028-〇〇平面、断面図(1)



第40図 B地区瓦器窯 1028-〇〇平面、断面図(2)



1610-OO



1029-OO 遺物出土状況図



第42図 B地区 410-OP、1746・1029、1610-OO平面、断面図

B-145-O S (第30、44図)

B地区北東で検出した南北方向にのびる溝である。B-3-O Bとは約1.3mの間隔をあけ、東に位置する。検出長7.7m、幅18cm、深さ5cmを測る。溝内埋土は、明赤褐色粘質土1層である。遺物は出土しなかった。

B-193-O S (第30、44図)

B地区北東で検出した東西方向にのびる溝である。B-3-O Bとは、約2mの間隔をあけ、南に位置する。検出長6.5m、幅55cm、深さ10cmを測る。溝内埋土は、明赤褐色粘質土1層である。遺物は出土しなかった。

B-251-O S (第30、44図)

B地区北東で検出した。南北方向にのびた後、東西方向に分岐する溝である。B-3-O Bとは約1mの間隔をあけ、西に位置する。検出長は南北5m、東西7.6mで、東はB-296-O Oと接する。幅は12cm前後、深さ5cmを測る。溝内埋土は、明黄褐色粘質土1層である。出土遺物は瓦器碗、土師質の小皿、羽釜が出土した。B-145・193・251-O SはB-3-O Bを「コ」字形に囲み、埋土、遺物からも時期的に差がないもので、B-3-O Bに関係する溝であると考えられる。

B-285-O S (第30、44図)

B地区北東で検出した南北方向にのびる溝である。B-5-O Bとは約0.7mの間隔をあけ西に位置する。検出長9.1m、幅15～70cm、深さ3cmを測る。溝内埋土は黄褐色粘質土1層である。北側をB-291-O Sにより切られている。出土遺物は、土師質の台付皿が出土した。B-5-O Bに関係する溝の可能性が考えられる。

B-291-O S (第43図)

B地区北東で検出した溝である。東西にのびたのち南北に方向を変え調査区外にのびる。検出長は東西10.2m、南北5.2m、幅0.3～1.0m、深さ5～20cmを測る。溝内埋土は南で1層、北で2層に分層できる。埋土中には笹を含む焼成塊が多量に混り、B-291-O S付近のB-292・302-O Oと埋土は同様である。B-292・302-O Oとの切り合い関係は、明瞭に確認できず、同時併存の可能性が考えられる。出土遺物は瓦器碗、小皿、土師器の大皿、小皿、羽釜、須恵器の甕、壺、鉢が出土した。羽釜には外面に煤が付着していない未使用と考えられるものも多量に出土した。

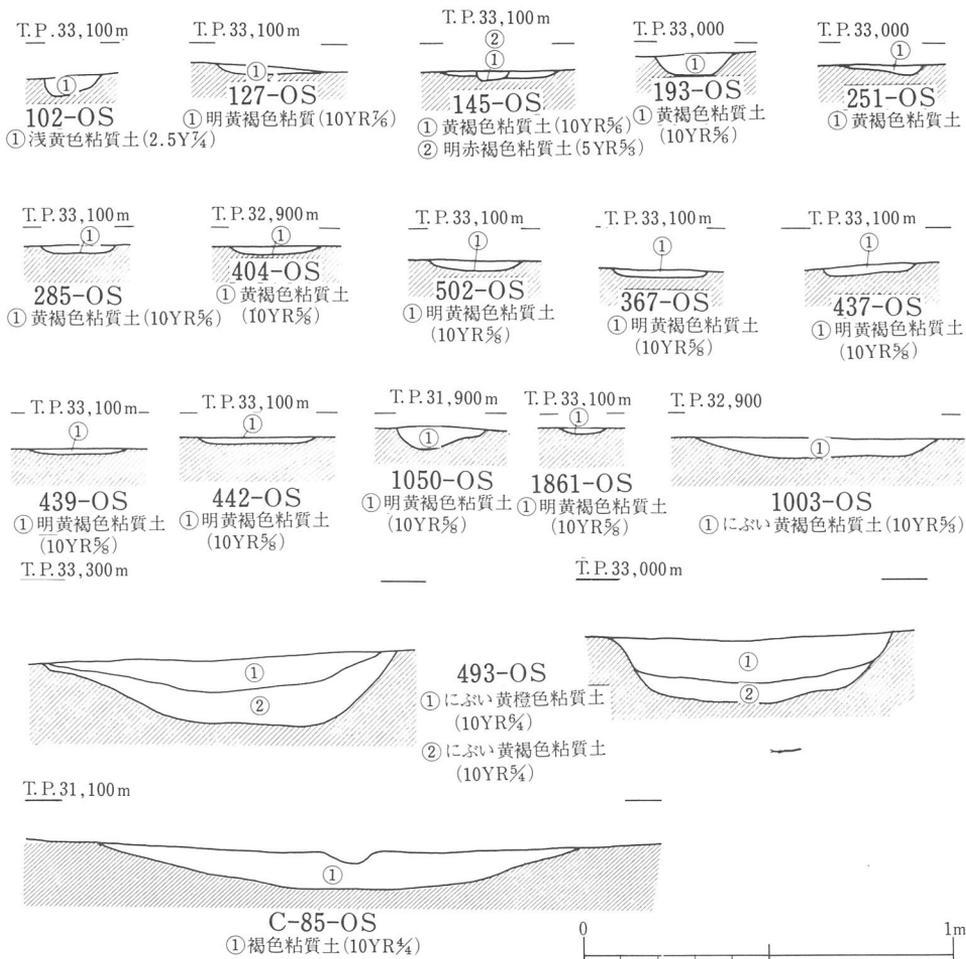
小溝群 (第32、44図)

B地区はほぼ中央、北寄り、B-6・7-O B付近で検出した小溝群である。B-502、

367、437、439、442、1850、1861—OSにより構成され、方向は東西方向である。検出長は、3.9~11m、幅15~33cm、深さ2~5cmを測る。溝内埋土は明黄褐色粘質土(10YR5/8)である。出土遺物は瓦器、土師器の小破片が出土した。これら一連の小溝群はB-6、7-OBと方向は、ほぼ一致しており、437・690・442-OSは6・7-OBまでのびていない。遺物もほぼ同時期であると考えられる。これら一連の小溝群は6・7-OBに係する遺構であると考えられる。

B-493-OS (第30、44図)

B地区中央を南北に縦断する形で検出した溝である。検出長59m、幅1.3~2.3m、深さ34~36cmを測る。溝内埋土は2層に分層できる。検出範囲の北側半部で2ヶ所、南半部で



第44図 B・C地区溝断面図

1ヶ所堰状の高まりがある。出土遺物は瓦器碗、土師器の羽釜の小破片が出土した。

B-1003-O S (第30、44図)

B地区西側で検出した溝である。検出長約11.8m、幅1.2~1.8m、深さ10cmである。溝内埋土は1層である。ピット5を切る。溝内出土遺物は、瓦器碗の小破片が出土した。

小溝群 (第44図)

B地区ほぼ中央、北寄りで検出した溝で、東西方向に7条の小溝がほぼ平行にのびる。B-6-O Bの北側にはB-502・367-O Sがあり、検出長は、502-O Sが13.5m、367-O Sが西から7.8mでいったんと切れて3mを測る。幅は30~70cm、深さは4cmを各々測る。B-437・439・442-O Sは、B-6・7-O Bの西に位置し、検出長4.2~9.0mを測り、幅30~60cm、深さ2~5cmを測る。B-7-O Bの南に位するB-1850・1861-O Sは、検出長20.5~22.5m、幅23~41cm、深さ2~10cmを測る。これらの小溝群の溝内埋土は、黄褐色粘質土である。出土遺物は、502-O Sから瓦器碗、土師器の小皿、367-O Sからは瓦器碗、土師器の羽釜が出土した。これらの小溝群の方向と、建物の方向は一致する。 (小谷)

3. C地区

C地区は、鎌倉時代に属する遺構は極端に少なく、溝一条のみである。

a. 溝

C-85-O S (第20、30図)

C地区西側で検出した南北方向にのびる溝である。検出長約22.5m、幅3.4~6.8m、深さ20cmを測る。溝内埋土は褐色粘質土(10YR5/4)である。出土遺物は、瓦器碗の小破片がある。 (小谷)

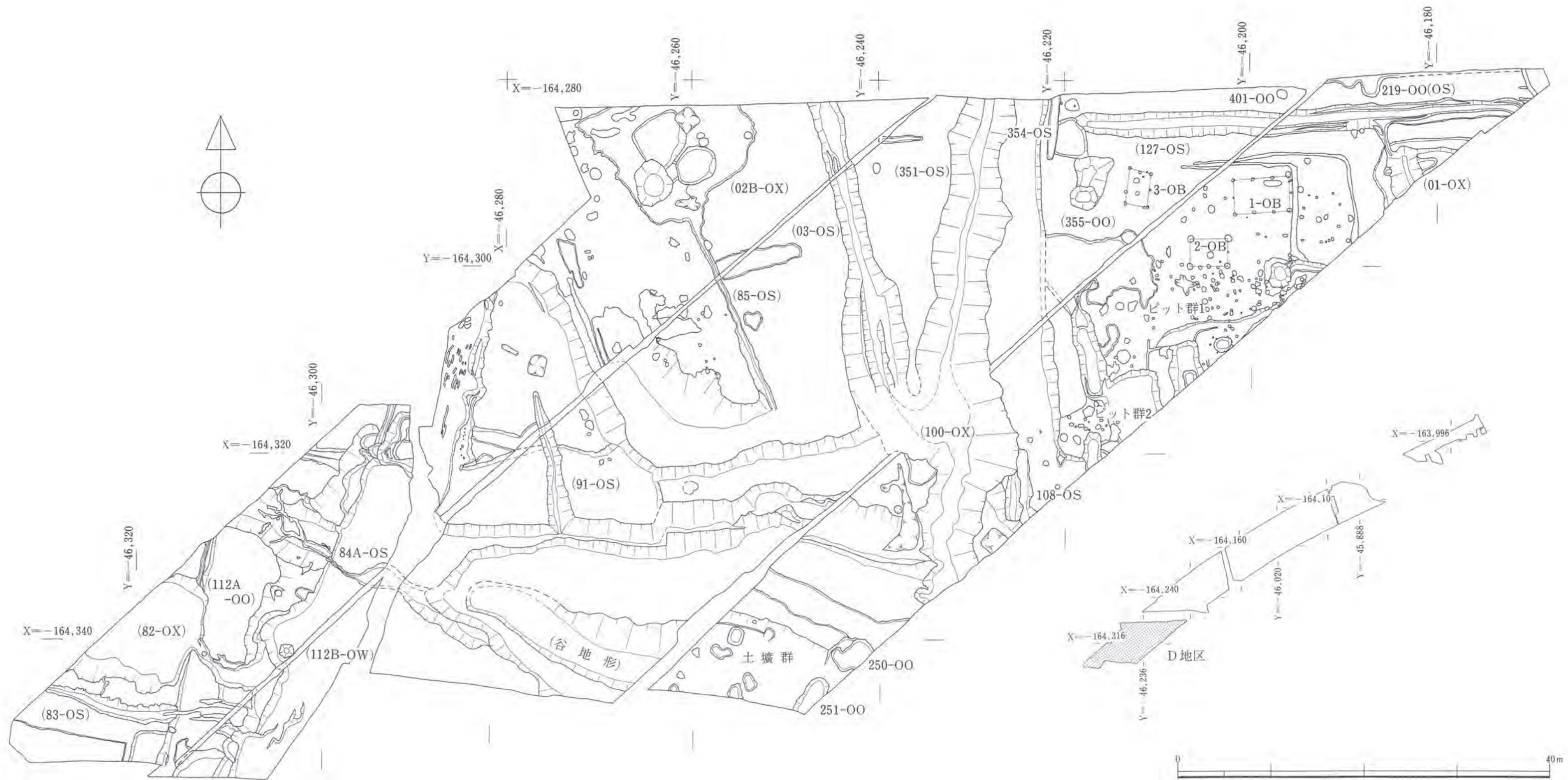
4. D地区

a. 掘立柱建物、ピット群

D-01-O B (第46・47図)

D-02-O Bの北東に位置し、座標北方向より、6°西に振る。3間×2間、桁行間隔1.8~2m、梁行間隔1.9mの東西棟建物である。柱掘方は、方形や楕円形を呈し、0.2~0.65m、深さは浅いもので0.1m、深いもので0.3m前後を測る。柱の大きさは15cm前後を測る。

D-02-O B (第46・47図)



第45図 D地区 遺構平面図2 (最終検出状況)

D-01-O Bの西南に位置し、ほぼ座標北方向に方位をもつ。2間×2間、桁行間隔2.1m、梁行間隔1.45mの東西棟建物である。柱掘方は円形を呈す。四方隅の柱掘方は、径60～70cmと大きく、深さ80～90cmと深い。この建物は、規模、掘方の大きさ、深さ、柱の太さなどが周囲の建物とは異なっており、特殊な建物だったとおもわれる。他の柱掘方は、15～45cm前後で小さく、深さも10cm前後と極めて浅い。柱の直径が、25cm前後を測る166-O Pには柱根が残っていた。

D-03-O B（第48図）

D-01-O Bの西方に位置し、N-9°-Eの主軸方向をもつ2×2間の南北棟建物である。桁行間隔1.3～2.5m、梁行間隔1.1～1.3mを測る。柱掘方は、楕円形を呈し、深さは、10cm前後である。出土遺物はないが、埋土は、01・02-O Bと同一である。

D-ピット群1（第46図）

D地区のD-01-O Bや02-O Bの周辺部より、多数の柱穴を検出した。ピット群1は、02-O Bの南側部分一帯に分布する柱穴群を一括して総称したものである。掘方は、円形や楕円形或いは不整形を呈する。埋土中には、13世紀代の遺物を含むものや遺物のないものなどある。位置、規模、形状などからみて、掘立柱建物や掘立柱建物にともなう土壌などの可能性をもつ。

D-ピット群2（第49図）

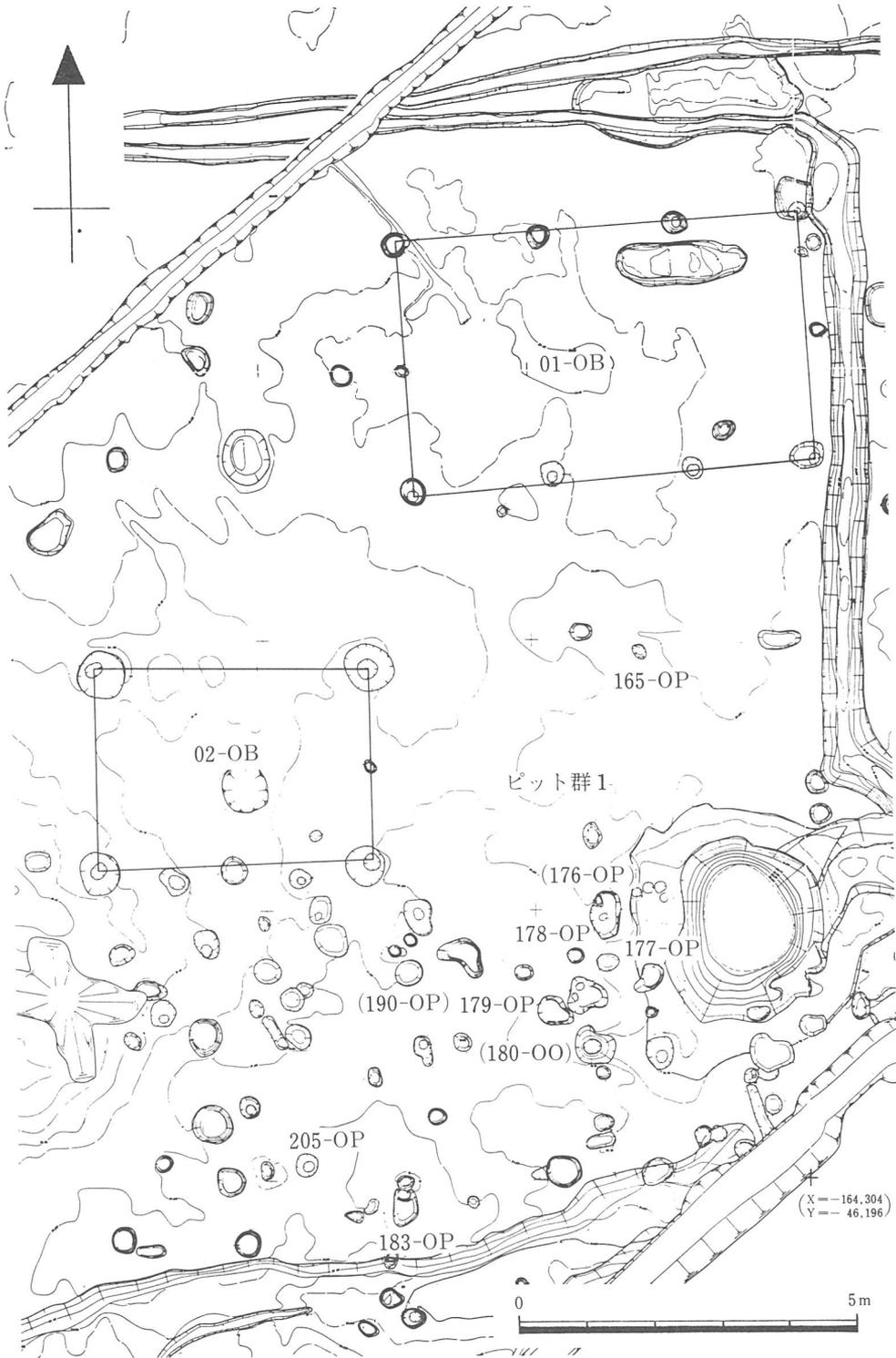
D地区平井面I区で各掘立柱建物やピット群1などを検出したが、D-ピット群2は、I区の最も南方隅、後述するD-117B-O Xの基底で検出された平面円形、楕円形或いは不整形な一群の遺構である。深さも一様ではなく、いろいろ存在する。埋土中からは、13世紀前半代の遺物が出土する。位置、規模、形状などからみて掘立柱建物の可能性は少なく、01・02・03各掘立柱建物に関連する土壌などの遺構と考えられる。（渋谷）

b. 溝

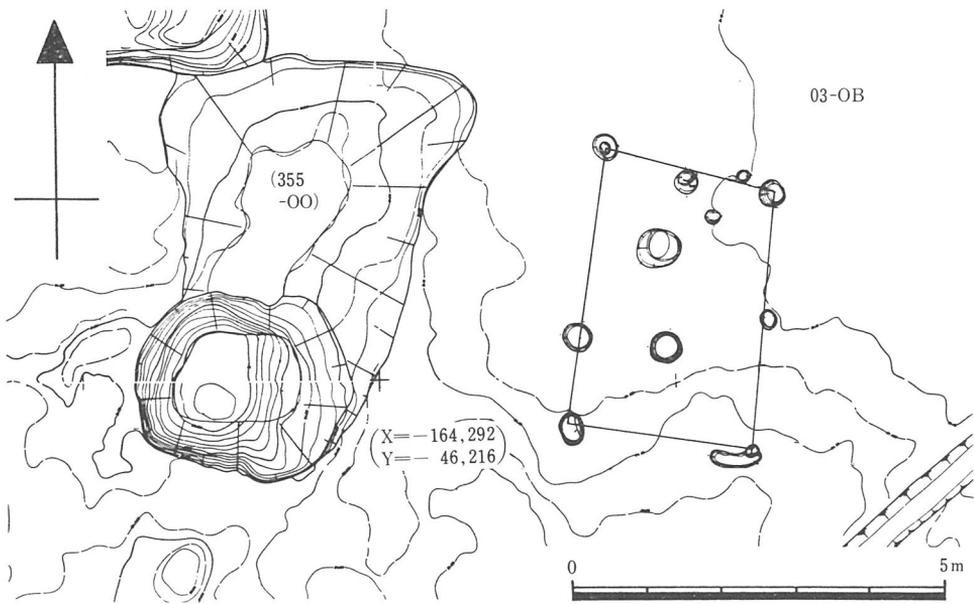
D-108-O S（第45・50・63図）

II区東端で検出された南北方向の溝状遺構である。幅1.0～1.9m、深さ0.5m+で南傾斜し、断面U字形を呈する。検出長は5mであり、北端をD-100-O X（後述）、南端をII/III区間斜面に削られる。

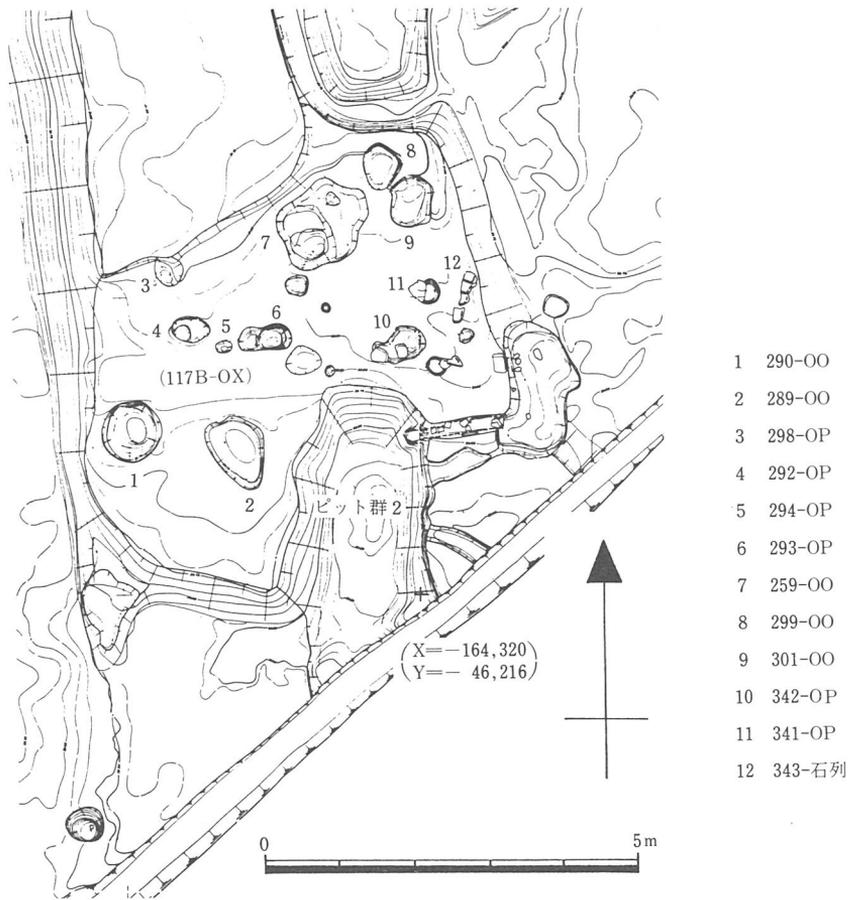
埋土は底面にそって薄く粘土質シルトが覆い、その上位を砂質シルトが埋める。遺物は上部層から鎌倉時代に比定され得る土師器、瓦器の小片が出土した。埋土の成因は確定し難いが、遺物の埋積状況からみて、流水の作用が想定され得る（第50図）。



第46図 D地区 建物、ピット群1平面図
 (等高線5cm間隔、補助線2.5cm間隔、計曲線25cm、以下同様)

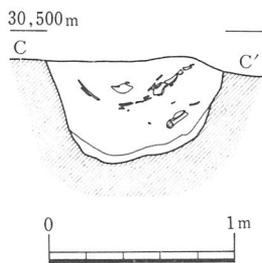


第48図 D地区03-OB、355-OO平面図



- 1 290-OO
- 2 289-OO
- 3 298-OP
- 4 292-OP
- 5 294-OP
- 6 293-OP
- 7 259-OO
- 8 299-OO
- 9 301-OO
- 10 342-OP
- 11 341-OP
- 12 343-石列

第49図 D地区ピット群2平面図



D-84A-O S (第45・68・69図)

IV区およびV区の平井面第6層基底面でD-84B-O X (前出)に重なって検出された溝状遺構である。検出長は15mであるが、上位の第6層に削剝されているため、本来の遺構形態は著しく損われている。検出状況は下流のIV区では0.3~2.0m、V区では0.5~1.0mで数条の溝に枝分れし、上流側で尖滅する。

第50図 D地区108-OS 断面図 深さは0.3~0.7mで、下底には凹凸があるが、相対的に両区の下流側で深い。埋土の平井面第7層は基底部に第9層に由来する

偽礫を含み、粗粒砂・細礫・炭化物の薄層を挟む極細粒砂~細粒砂層であり、両側方シルトへ移化する。水成のラミナが認められる。

本遺構の検出状況からは、雨水等によって斜面に削まれた小流路のようにみえるが、埋土基底部に第9層に由来する偽礫が含まれ、第9層分布深度以下の溝下底に不規則な凹凸があることから、人為的に掘削され、土砂に埋もれた遺構である可能性もある。

D-219-O O (O S) (第45・71図)

I区北壁沿いの平井面第3層基底面で検出された土壌状のふくらみをもつ溝状遺構である。

土壌部分は2つの凹地からなり、ひとつは1.8m×2.4m+、もうひとつは1.5m×1.1mの広がりをもつ。深さはともに5~30cm前後で北壁に向かって深くなる。

溝部分は、調査時の排水溝掘削のために肩部が検出できず、また大部分が調査地外北側に広がることから、遺構形態を復元できないが、北壁断面(第12図)の観察からは、北壁に沿って東西方向に分布する溝が推定される。

本遺構の埋土は、下部が暗紫色シルト質粘土層(層厚15cm以下)、上部が黄灰色砂質シルト層(層厚40cm以下)からなり、灰色シルト薄層を挟む。水成のラミナが認められる。ほぼ完形に復元される瓦器碗が上部層から出土したのをはじめとして、上・下部層から鎌倉時代に比定され得る瓦器、土師器等の破片が多く出土した。平井面第7層に対比される。

(趙)

c. 原池低地k層上面検出遺構

D-250-O O

原池低地k層上面で検出された浅い土壌である(第45・51図)。長径4.3m、短径2.5m+、深さ0.3mで鍋底状の遺構である。埋土はk層と同質の黒褐色砂・粘土質シルト層で

あり、下部に水成のラミナが認められる。遺物はほぼ完形の瓦器碗、皿が数点底面に散在していた。

D-251-00 (第45・51図)

上述のD-250-00と同様の遺構である。長径4.5m+、短径2.3m+、深さ0.4mで、断面が浅い台形を呈する。埋土もD-250-00と同様であり、瓦器碗の破片のほか木片を含んでいる。

その他の土壌、溝

k層上面には、上記の遺構より小型で、埋土の異なる土壌が数ヶ所で検出された(第45、51図)。いずれも偽礫層であるj層下部によって埋積されている。D-250-00、251-00が埋積された上をj層下部が覆うことから、小型の土壌はD-250-00、251-00埋積後に形成されたと判断できる。

k層上面では、さらに、D-250-00と埋土が類似する幅0.1~0.2mでごく浅い溝が一条検出されている。

小結

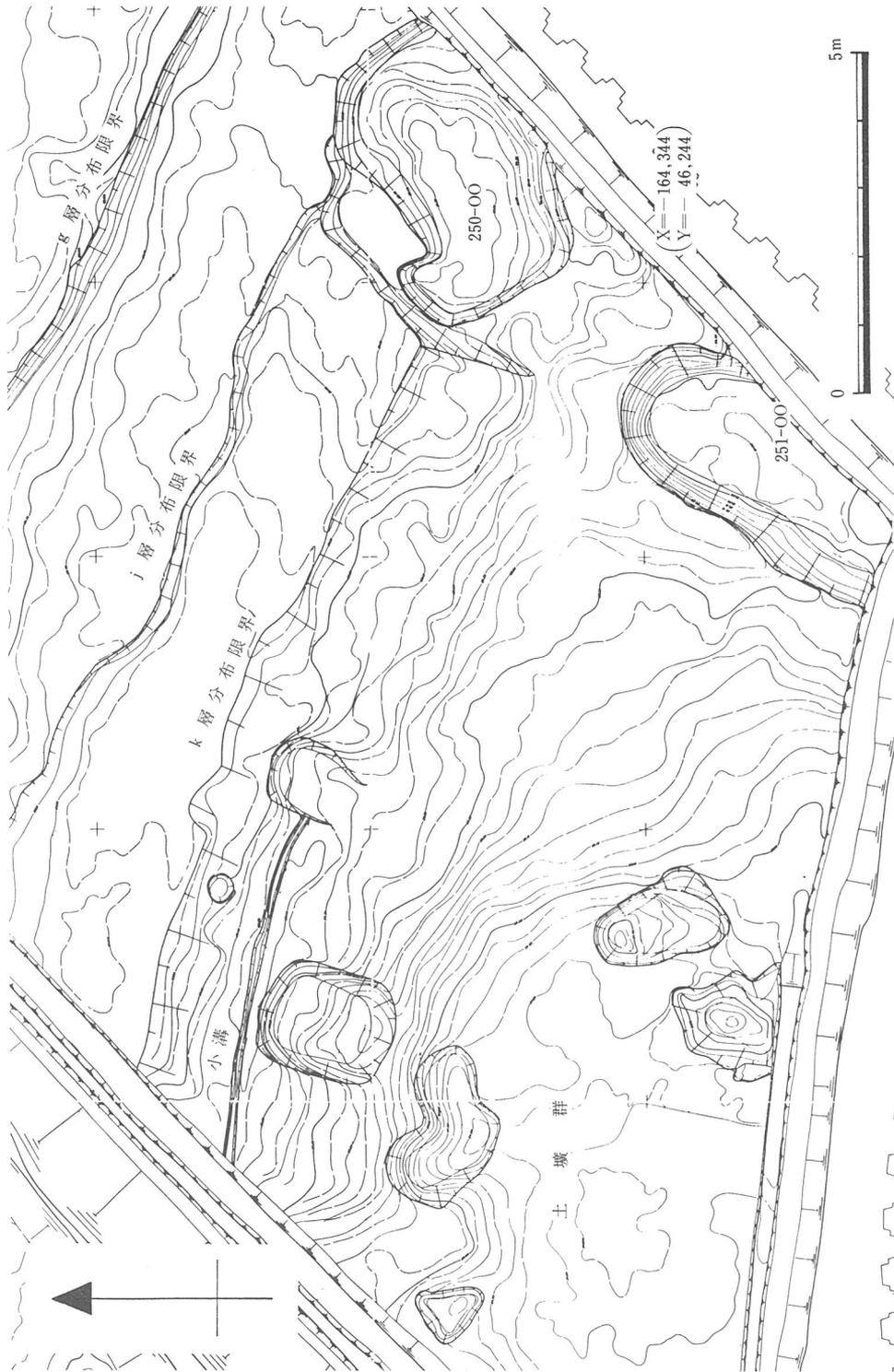
D-250-00をはじめとするk層上面の土壌群の性格を明確にはし得ないが、いずれの土壌底面もk層内に留まり、k/l層以下の地層には達していないこと、土壌掘削中に生じるはずのk層に由来する偽礫が、いずれの土壌埋土にも、その周辺にも、ほとんど認められないこと、土壌は自然に埋まる(D-250-00、251-00)か、j層下部の埋積まで放置されていること、などの状況から、これらの土壌が土取りを目的とした穴であった可能性を指摘することができよう。(趙)

d. 原池低地k層・j層の遺構としての側面

前述したように、k層は非水成の地層であり、下半部には下位のl層に由来する偽礫が大量に含まれるとともに、下面は断面で波状に著しく変形している(第17図)。この変形は平面的には長径数~30cm程度の不定形な凹みとして検出される。

このような不定形な凹み群は、沖積地における低湿地などの泥質な堆積物が分布する地域の発掘で散見することができる。趙(1983)⁽¹⁾は、長原遺跡の水田土壌の下面で検出された多数の凹みを、生痕としての遺構であると判定し、踏込み跡と呼んだ。k層下面の凹み群も同様の状況であり、踏込み跡と考えられる。したがって、k層が耕作にかかわって形成された地層であった可能性が指摘される。

k層が仮に水田土壌であったとすると、k層の層厚が最大で80cmあり、比較的細粒の物



第51図 原池低地 k 層上面平面図

質からなり、粘質をもっていること、また、不定形な偽礫が不規則に分布する状況からは、泥田状の湿田土壌が想定され得る。ただし、多種の用途の木器や多時期にまたがる遺物の出土理由、上面の土壌との関係など、検討すべき課題は少なくない。

j 層下部は偽礫層である。偽礫間を埋める基質は砂礫であるが、水成のラミナ構造は認められないため、寺川ほか(1980)⁽²⁾が亀井遺跡で検出した偽礫層とは異なる。亀井遺跡の偽礫層は砂層を挟み、また砂層・植物遺物層・粘土層に漸移すると報告され、洪水に対処した作業だと考えられている。これに対して、j 層下部は、k 層上面の土壌や低地を埋めていると、偽礫が比較的平坦な j 層上部基底面下の段丘構成層に由来すると考えられること、およびその層相から、j 層形成期初期に行われた客土⁽³⁾と考えられる。

j 層上部は非水成であり、直線的な分布限界をもつ(第51図)。また、層厚は5~45mと変化に富むものの、その上半部5~10cmは不明瞭な境界によって下半部とは区別できる。本層は非水成層である i 層に覆われるため、上面で遺構は検出されていないが、少なくとも上半部の層相、層厚、分布のし方は、作土層である f 層、平井面第5層、d 層~第1層等の特徴と矛盾しない。

したがって、j 層全体の形成を、k 層上面の土壌掘削後に行われた耕地の拡大として捉えることが可能である。すなわち、1) 段丘構成層の削剝と平坦化、2) その土砂による低地部の埋め立て(j 層下部)、3) その後の耕作(j 層上部)、という経過を、大筋では推論し得るものと考えられる。この推論からは、さらに、当時の段丘崖斜面下端が j 層の分布限界付近にあったこと、j 層形成前は段丘崖斜面下端が k 層分布限界(第51図)付近にあったことを予想させる。(趙)

註

1. 趙 哲济(1983)「踏込み跡」大阪市文化財協会編、『大阪市平野区长原遺跡発掘調査報告』、III、92 p.
2. 寺川史郎・尾谷雅彦・那須孝悌・樽野博幸(1980)「亀井遺跡の変遷」大阪文化財センター編、『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書、444-454 p.
3. 土壌学では「客土」という用語は、土壌改良や床土づくりといった耕作に関わる作業を前提としているが、本報告書では、外部から人為的に運ばれてきたと判定される土砂を総称して客土(層)と呼ぶことにする。これには、埋立て土、盛土、積み土、いわゆる整地層、狭義の床土、等の概念を含む。なお、「客土」という用語の採用の是非については、稿を改めて検討したい。

第5節 室町～江戸時代

1. A東地区

A東地区の遺構検出は、17世紀頃の畑部分を除いて基本的に地山上面で行った。この地区の東西二ヶ所で検出したこの畑（A東-04・05-OZ）は厚さ10～40cmの盛土に覆われ、畑の形状、耕作土と盛土の観察等から平井周辺の丘陵部の開発の時期、池の改修時期の検討に重要な手掛りをもたらしている。

この地区の地山面は、基本的に現在の畦畔や水路の区画と同じ形に区切られる6段のテラスからなり、東から西へ、さらに池（谷）の方向に低くなっている。記載の便宜上ここでは、第52図のように東Ⅰ～東Ⅵと呼び分けることにする。

東Ⅰは礫層主体の地山で標高36m前後、鴨坂池に向かって傾斜し、低い部分ではA東-04-OZの耕作土が遺存する。地山の高い北寄りには現代の耕作土が直上を覆っている。井戸（A東-85・86-OW）、不定形の土壌、pitを検出している。東Ⅱ寄りのA東-04-OZ下で検出したpit群には建物址の可能性を考えたが、まとまりを認めることはできなかった。

東Ⅱは東Ⅰよりも5～10cm削平を受けて低くなったテラスでA東-04-OZの耕作土もここでは残っていない。礫層優位の地山で東Ⅰ寄りに3基の井戸（A東-101・102・103-0W）を検出した他、不定形の土壌、pitを検出している。

東ⅢはA東-03-OZのテラスにあたる。東Ⅱと約40cmの落差がある。現在の畦畔、鴨坂池の堤の方向等、現地形に全く痕跡をとどめないテラスである。礫優位の地層から、細粒砂～シルト層に暫移し、東Ⅳ境ではシルト優位となる。A東-03-OZ下面には地山を削り込んだ細長い溝状の土壌等がわずかに認められた。

東Ⅳと東Ⅲは落差が1.5mを越える崖によって区分されている。この段差は鴨坂池と芦池の境の土手に始まり、調査区の北側へもほぼ同じ落差をもって続いている。第8図の該当部のコンターラインはその形を示している。本来の地形、地質の性状に由来する段の可能性が残されている。現在の崖面自体は、人為的に整形され、掘削時の工具の痕あるいは作業単位の痕と思われる小さなテラス、窪みが崖面に何箇所か認められた。また、シルト主体のこの地点の地山は土取り目的の掘削が行われていたらしく、作業単位を示すと考えられる径1m前後の窪みが重なりあって、全体として大きな土取り痕を形成している（第52図上）。土取り穴の埋土はA東区第3層で、燻瓦を含んでいる。この地点では他に東Ⅲ

境の崖際に井戸（A東-02-OW）が検出されている。

東Ⅴは東Ⅳより高い位置にあるテラスで、東Ⅳとは15～16世紀の溝（A東-06-OS）等によって区分される。シルト主体の地山で、南西に向って傾斜し、削剝の少ない芦池寄りの地山は赤色化が著しい。この直上に火山ガラスを顕著に含む第8層が分布する。東Ⅴではこの上位層から石鏃（第83図9）以外に、旧石器時代に属するサヌカイト製の石核（第82・7図）や剥片が認められたため、とくにこの地層に対して精査を行った結果、サヌカイト片1点を得た。このサヌカイトおよび火山ガラスを含む層は地山の削剝を受けていない凹地に薄く遺存していたいわゆる地山の風化層ないし表土層にあたるもので、火山ガラスはこれより下位の赤色化の少ない地山層には含まれない。火山ガラスは分析の結果平安神宮火山灰に相当する火山ガラスと、量的には少ないながら横大路火山灰に相当する火山ガラスが含まれている。横大路火山灰はアカホヤ広域火山灰に対比されるもので、二つの時期の火山ガラスが含まれている意味については、しばらく評価を保留したい。

東Ⅴでは、畑（A東-05-OZ）およびその下位の畑（A東-09-OZ）、四基の井戸（A東-10・12・74・158-OW）の他、畑の下の主として地山の高い部分で、溝状に平行する数多くの土壌、土取り痕らしい不整形の土壌（A東-62-OX、70-OO等）等を検出した。

東Ⅵは東Ⅳと東Ⅴの間にできた浅い谷地形にあたり、標高33m前後を測る。シルト主体の地山で東ⅣとはA東-06-OSで区分され、東Ⅴとは2～3段の段差で区分される。このうち最上位の段はA東-05-OZを覆う盛土上面から削り込まれている。東Ⅵの堆積土は平坦な堆積面をもち、水田耕土の可能性を考えているが、現耕土直下の1層を除いて、稲科プラント・オパールを検出量は少なく、分析結果からは耕作土の可能性は保留されている。（藤田）

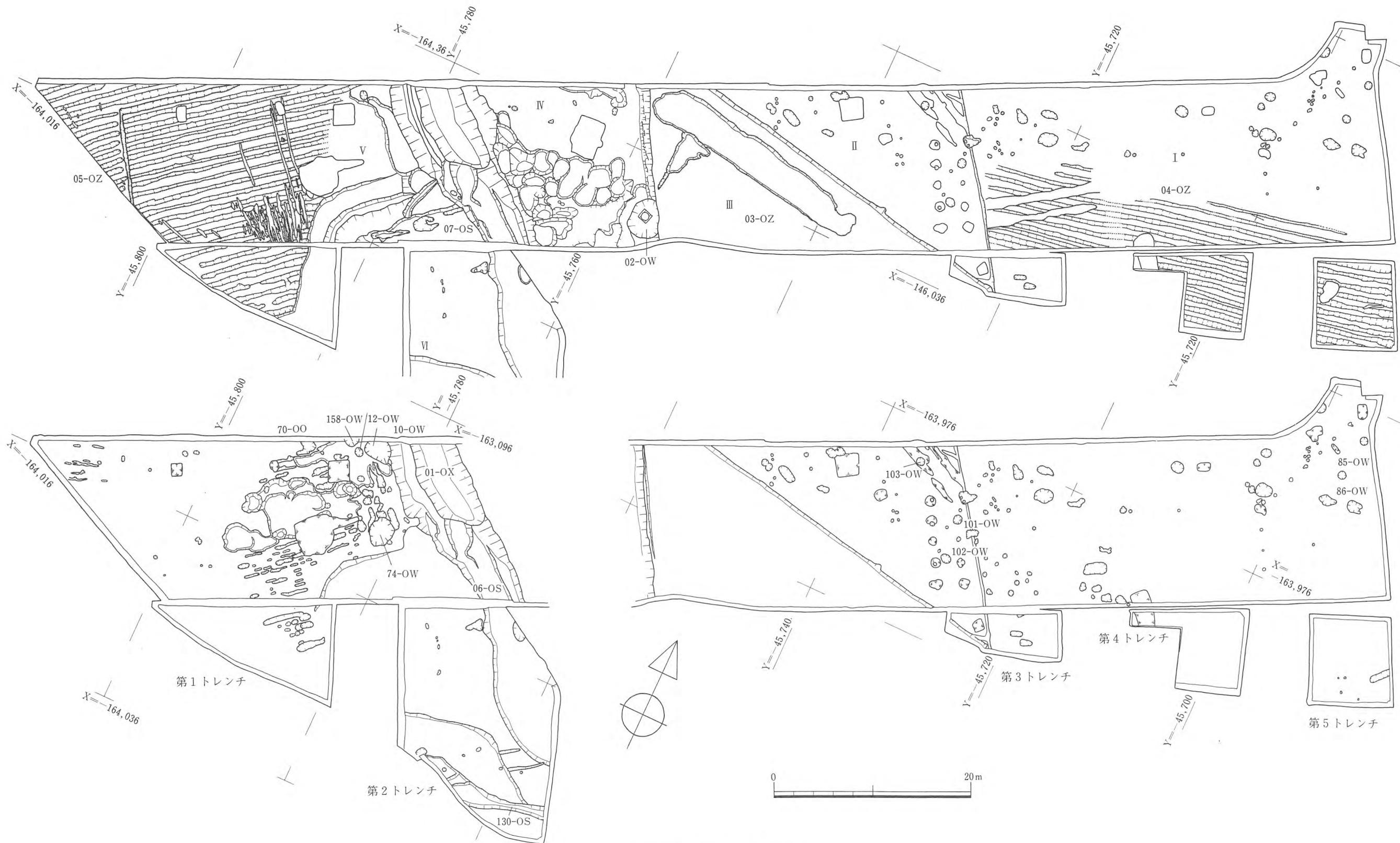
a. 溝

A東-130-OS（第52図）

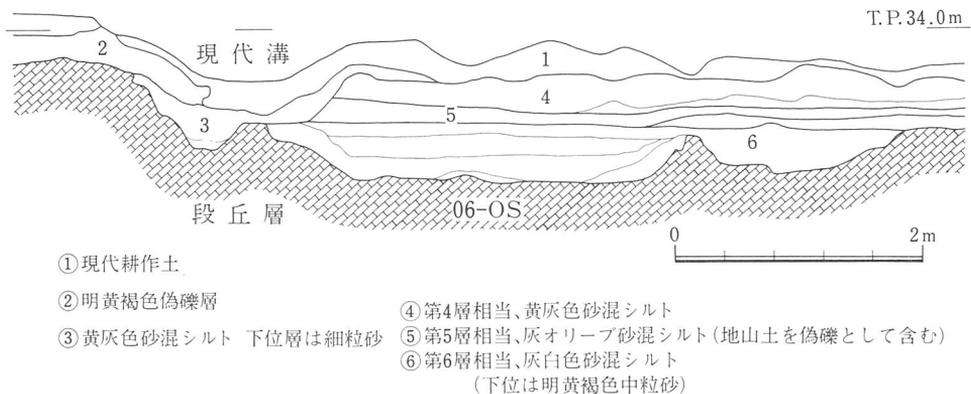
第2トレンチ南寄りで検出した東西方向の溝である。両端は調査区外にのびるが、鴨坂池と芦池の堤によって切られていることから、両溜池より古いことは確実である。幅は東側で1.3m、西側で2.0mを測り、断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、14世紀末の土器片が少量出土する。（岡本）

A東-06-OS（第52・53図）

東Ⅳと東Ⅴ・Ⅵを二分するように、芦池の上手から北に流れる溝。南寄りでは溝の西肩



第52図 A東区 遺構全体図



第53図 A東地区06-O S断面図

部が低地のために東肩部ほど顕著でなく、溝の北端部はA東-01-O Xの土壌によって形状を損っている。溝の形が最もはっきりしている中央付近で、幅3.7m、深さ0.5mを測る。この溝の埋土は、通常の流路堆積物と異った均質な堆積物からなり、これをベースにして、新たに溝が作られ（この溝は断面観察では認めることができたが、平面的には検出することができなかった）、さらにこの埋没後に現代の水路が流れている（第53図）。A東-06-O S以後、規模こそ違おうが、同じ位置で、同じ方向に流れる水路が機能していたのであろう。A東-06-O S内には15~16世紀代の瓦質土器、土師器（第157~159図）が、A東-07-O Sとの合流点付近を中心に認められ、これ以降に埋没したと思われる。（藤田）

b. 田畑

A東-03-O Z（第52図）

調査区中央にある東Ⅲのテラスおよび北側の段をA東-03-O Zとする。北側の段の方向は、現在の地割はもとより鴨坂池の土手の方向とも、A東-04・05-O Zの畝や地割とも一致しない。またA東-04・05-O Zのような明瞭な耕作土も検出できなかったが、Ⅲのテラスの地山直上には、薄く耕作土が貼りついているのが観察されたこと、その一部に鋤先をたてたような痕跡が見られたこと、このテラスを盛土した堆積層中にも耕作土が偽礫として、かなり含まれていること等から畑の跡と判断した。

A東-04・05-O Zの盛土との違いは、地割の方向や耕作土の有無の他に、畑を覆う盛土に認められる。A東-04・05-O Zの盛土は地山主体の偽礫層からなり、層中の遺物も少ないのに比べ、A東-03-O Zでは、地山のブロックの他に、耕作土、表土層を顕著に

含み、須恵器、土師器、瓦質土器等の他、骨片の付着した無釉陶器片や燻瓦片も含まれていて、むしろ東Ⅳの土取り跡の埋土に近似している。

畑が埋められる時期は特定し難いが、燻瓦の出土や盛土の方法等からみて、A東-04・05-OZの時期と異なり、東Ⅳ検出の井戸（A東-02-OW）の時期に近いと考えられる。

（藤田）

A東-04-OZ（第52図）

東Ⅰの南半部分で検出された。地山面の高い北側と東Ⅱ側では、畑部分が削剝を受けているため、畑の区画規模は不明であるが、検出状況から、少なくとも東西45m、南北15m以上の規模をもつ。畑の上面は、地山の礫層・シルト層を用いた盛土が5～20cmの厚さで覆っていたため、耕作土が圧密を受けながらもほぼ旧状のまま残っていた。

このため、畑の検出はこの耕作土の有無を手掛かりとして行った。耕作土は地山が鴨坂池に向って低くなっている部分にのみ残っていた。東西に走る畝筋が検出され、この畝筋は現在の鴨坂池の土手の方向と一致している。今回の調査範囲の中では、この畝が途切れて小区画があるような形跡は認められなかった。図上で畝が途切れている部分は全て後世の攪乱に起因するものである。畝間隔は平均80cm、畝間の溝底が地山まで達している部分はほとんどなかった。

耕作土中に含まれる遺物は須恵器、土師器、瓦器をはじめ、各種の土器片が磨耗した細片となって含まれている。畑を使用していた年代を窺わせるものはほとんどなく、わずかに16世紀頃の土師器、瓦質土器片を加工した面子と上位の盛土中に混入した陶磁器片細片があるだけである。盛土の様子、面子等を含む遺物の様子からA東-05-OZと同じ江戸時代始めと考えておきたい。この耕作土中からは多量の稲科のプラント・オパールが検出されている。

（藤田）

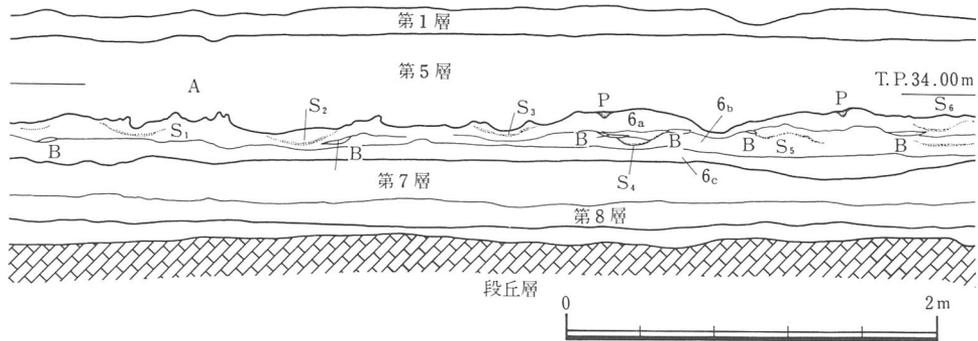
A東-05-OZ（第54図）

東Ⅴのほぼ全域、東西約30mの範囲に検出された。畑の東側は、東Ⅵの低位地造成のために削剝を受けているが、A東-07・08-OSの形状と位置からみて、本来の地形は、A東-05-OZの輪郭に近いものであったと思われる。

北東から南西方向に続く畝筋をもち、その西寄りで、この畝筋と直交する、畑の区画施設と目される溝が検出されている。この溝はL字に折れて、畝筋と平行する溝となるが、この溝より北側の畝は、南の畝よりも高い位置に検出されて、文字通り区画溝の意味をもっている。この区画溝には現在の芦池の形状や土手の方向と関連する要素を認め難い。



第54図 A東区 05-O Z 平面図



第1層	暗灰黄色現代耕土	第7層	黄褐色砂混シルト	A	踏み荒し痕
第5層	灰黄褐色偽礫(盛土)	第8層	明黄褐色礫混シルト	S	にぶい黄、細粒砂
第6 _a 層	黄褐色砂混シルト	段丘層	明黄褐色シルト	B	シルト・粘土の偽礫
第6 _c 層	黄褐色砂混シルト			P	にぶい黄細粒砂

第55図 A東地区05-OZ断面図

畑の直上は30～40cmの厚さの盛土がされており、盛土は近縁の地山の粘土・シルトを主体に行われている。畑の形状と池の形状の不自然さから、芦池の修築に関連して、A東-05-OZの放棄・盛土が行われたと解すべきであろう。

盛土の粘土・シルトとA東-05-OZの耕作土は容易に区別され、簡単に肌別れするため、畑が埋められる直前の畝の乱れ、踏み荒された様子を検出することができた(第54図、図版第3図)。踏み荒しの跡や畝の乱れ方に粗密があるのは、この畑に盛土する際の作業痕跡である可能性を窺わせる。

この畑の耕作土は、断面観察の結果、耕作土内に封入された明黄色系の細粒砂、微粒砂の薄層の痕跡によって、a～cに3細分し得る(第55図6)。このうちa・bとcは、各部ではほぼ連続的に分層し得るが、aとbの分層はしばしば不連続、錯綜する。とくに、a上面の畝、畝溝とズレた位置にある三日月状の細粒砂の帯(第55図S)、あるいは爪形状に封入された地山土(同B)は、解釈的にみれば、耕作の度の畝作りの一過性的な痕跡(細粒砂は雨水によって洗い出された畝溝内の堆積物と解される)と考えられるのである。また、部分的ではあったが、畝の中央付近に幅3cm、厚さ5～10mmの半円状の明黄色系の細粒砂の帯状の溜りが観察されている(第55図P)。この細粒砂の溜りも雨水の淘汰による堆積物と思われるが、播種の際の痕跡の可能性も考えられる。

耕作土a・bとcとの間は砂の堆積の様子・乱れ方に違いがあって、断面観察では十分

区別できたが、平面的には十分行えた訳ではない。わずかに c の下位で小溝を検出し、これを A 東-09-0 Z としたが、規模等明確なものではない。

耕作土に含まれる遺物には、サヌカイト剥片の他、須恵器、土師器等各種の磨耗した土器細片がある。a・b と c とを時間的に区別できる遺物は認められなかった。畑の年代を示す遺物は少なく、面子 9 点と陶磁器小片があり、c 層に対応する耕作土下端の A 東-09-0 Z から火舎（第160図）が出土しているだけである。この火舎と畑の下層で検出された土壌群中の遺物も 15・16 世紀の遺物であることを考慮して、江戸時代初頭期の畑と考えておきたい。（藤田）

c. 井戸

井戸は東 I の東端で 2 基（A 東-85・86）、東 II の東端で 3 基（A 東-101・102・103）、東 IV 東端で 1 基（A 東-02）、東 V で 4 基（A 東-10・12・74・158）の計 10 基が検出されている。

このうち東 I・II の 5 基は形状・規模・埋土の様子が近似し、时期的にも接すると思われる。直径約 80 cm、素掘の井戸で、いずれも地表下 2 m まで掘り下げ、さらに 1 m 強をボーリング等で検討したが、底はいずれも確認できなかった。井戸の埋土は大半が人為的に行われたと思われ、その上位に A 東-04-0 Z の耕作土が堆積し、地山の礫層も中位に含まれている。下位には粘土・シルトが堆積しているが、壁面が崩れて断面が袋状を呈し、その礫とシルトが充満しているものもあった。井戸底を完全に検出できなかったためか、出土遺物は少なく、A 東-85-OW で羽釜（第160図394）が出土した程度である。畑の耕作のための井戸と考えておきたい。

東 V の井戸のうち A 東-12-OW は畑耕作面から認められていたもので東 V の中では形状も異なり若干新しい時期のものかと思われる。他の 3 基は直接 A 東-05-0 Z と競合していないので先後関係については断定できないが、A 東-05-0 Z より古い下層の土壌群と区別し難かった 74 はやや古く、A 東-10・158-OW は埋土に A 東-05-0 Z ・土壌の埋土等を偽礫として含んでいた。いずれにしても、12 を除いて、A 東-05-0 Z と近い時期のものである。これも地表下 3 m を越えても井戸底は確認できなかった。

A 東-02-0 Z は大きな掘り方に木の井戸枠を組んだもので（図版第 4）掘り方内に東 IV 土取跡埋土内出土瓦、A 東-03-0 Z 内出土と同じ燻瓦を含む。（藤田）

2. A西地区

A地区西では、前節にも述べたように鎌倉時代前半（13世紀前半）に成立した掘立柱建物群が、やや規模を縮小しながらも、室町時代の初め（14世紀中葉～後葉）まで存続している。しかし、それ以後は建物等の居住に関係した遺構は認められず、建物群の存在する遺構面を覆う包含層を造成して水田や畑が作られるようになっている。近世・近代を経て現代に至る地域景観の出現である。居住域から生産域への転換と言う意味で、本時期は重要な時期と言える。

本地区における当核期の遺構としては、畑、水田址、土壙、溝がある。とくに、畑は盛土によって埋没していたため、畝の部分を良好な状態で検出することができた。

（宮野・岡本）

a. 土壙

A西-13-00（第57図）

調査区西南付近くで検出した土壙である。平面規模1.23m×1.26mを測る正円形に近いプランを有し、深度は30cm。壁は傾斜をもつが底面は水平な平坦面となっている。埋土は自然堆積の状況を示しているが、中位に多量の遺物が集中して包含されており、人為的に埋められた可能性もある。

遺物は中世（15世紀代）から近世までのものを含んでおり、量的には中世遺物の方が多くなっている。本遺構周辺には包含層（第8層）は存在せず、本遺構も地山面において検出している。近接して営まれている02-0Z耕作土においても中世遺物を確認しているが、このことは第8層が本来は広範囲に存在していたことを示している。

（宮野）

A西-375-00（第52図）

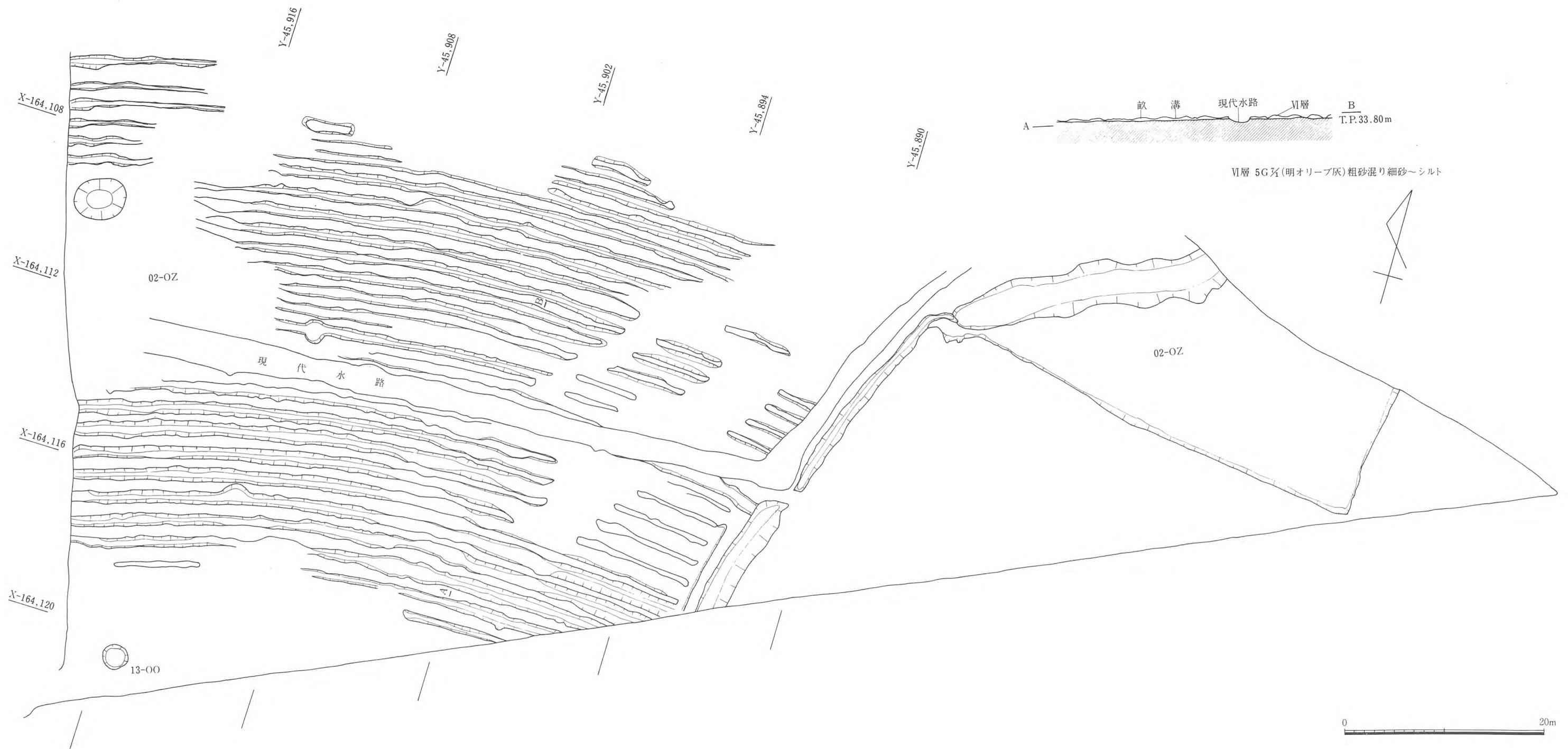
中央部西端、第8層上面で検出した平面楕円形の土坑である。長径2.5m、短径2.0m、深さ1.0mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は人為的に埋められたもので、近世の陶磁器片が出土する。A西-02-0Zと同一面で検出されていることから、同遺構に伴う水利施設と考えられる。

（岡本）

b. 畑

A西-02-0Z（第56図）

調査区中央から南側にかけて検出した畑址である。本来は広範囲に広がっていたものと考えられ、今回検出したものはその一部にすぎない。しかし、平坦面を造成するために盛



第56図 A西地区 02-OZ 平面図

られた土（第5層）が全体を覆っており、畝と溝を良好な状態で確認することができた。

畝は幅70cm～80cm、高さ10～15cmで、西北西から東南東にわずかに弧を描いて平行に存在する。畝の延長は、検出した範囲においては約30mを測る。

畑一筆の区画は、N-18°-Eの方向に伸びる段とそれに付設する溝によって区切られ、段の高さは約35cmである。この区画より東側にも耕作土層が残存し、301-OZと同じような矩形の段によって区画されている。この部分には畝は存在しておらず、西側に畑に関連する幅の広い溝が遺存するのみである。土層的には畑を構成する土と同じ土であるが、水田の可能性も考えられる。耕作土は5GY7/1(明オリープ灰)粗砂混細砂～シルトである。

なお、本遺構を覆う第5層は芦池の改修、浚渫のさいの土である。また、遺構図で畝の途切れている部分は、人間の踏荒しによるものである。

本耕作址の時期であるが、耕作土中の遺物からすると江戸時代であり、調査区外に拡がる現在の畑と全く同一の方向を有することを含めて考えると、江戸時代後半が想定される。

また、第5層を覆う第4層も耕作土になっているが、第5層によって平坦にならされ、ひき続いて第4層が堆積しているとみると第4層の時期も江戸時代後半以降に求められよう。
(宮野)

A地区西における本時期の遺構としては、畑・水田址、土壙、溝がある。とくに、畑は盛土によって埋没していたため、畝の部分を良好な状態で検出することができた。

A西-301-OZ（第25図）

調査区の東端、芦池に面した部分で検出した水田址である。大部分は後の畑（02-OZ）によって削平されており、調査で確認できたものは区画と考えられる段である。

段は残存高30～40cmで、区画はほぼ東西方向の走向である。全体として矩形を想定すれば南側の辺にあたる。地山直上の包含層（第8層）および地山を削っているため、段の底面は地山層となっている。その基底面上に約10cmの厚さで2.5YR6/1黄・細砂～シルト層（第7層）が堆積するが、これが耕作土層にあたる。また、その下半に鉄分の集積が認められることから水田址と判断したものである。

本遺構は盛土（第6.5層）によって埋められ、平坦に復した後、再び02-OZが営まれている。開発・改変とも大規模な事業であったことがうかがえる。開発の時期は、耕作土中に遺物が含まれていないため確定できないが、第8層を切り込んでいることからすると15世紀以降と判断できる。また、東端は芦池によって削られているが、池の改修や池床の

拡大は当然考えられるところであり、本遺構と芦池の普請の時間的前後関係を決定することはできない。(宮野)

c. 井戸

A西-721-OW (第25図)

中央部西寄りで検出した平面円形の素掘りの井戸である。直径0.9m、深さ0.8m以上を測る。埋土は、後の整地のため人為的に埋められたもので、遺物は出土しないが、整地の時期から近世以降の所産と考えられる。なお、本井戸は耕作に伴う野井戸であろう。

(岡本)

A西-725-OW (第25図)

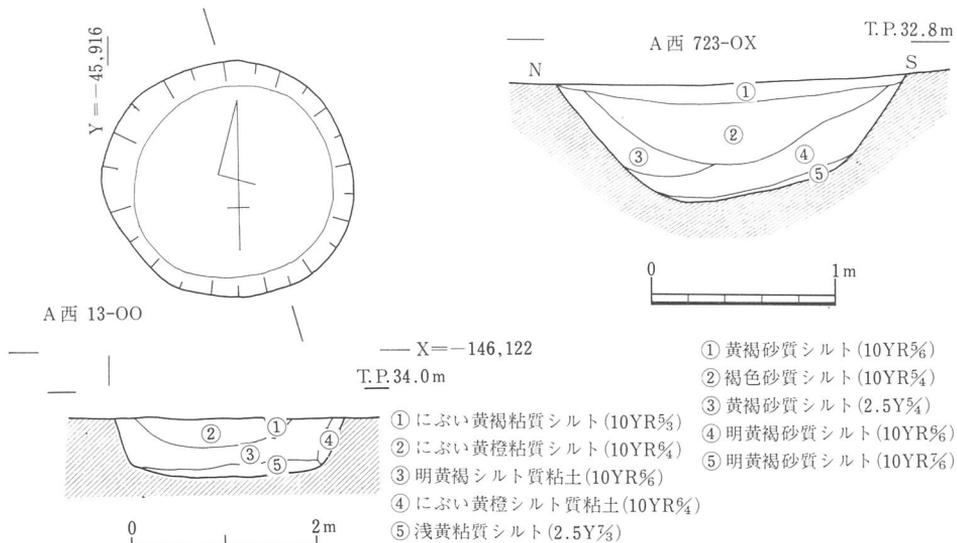
中央部西寄り、A西-762-OBの北側で検出された平面円形の素掘りの井戸である。直径1.0m、深さ0.9m以上を測る。埋土は、後の整地のため人為的に埋められたもので、遺物は出土しない。しかし、整地の時期から近世以降の所産と考えられる。なお、本井戸も耕作に伴う野井戸と推定される。

(岡本)

A西-752-OW (第25図)

中央部西端で検出された平面円形の素掘りの井戸と考えられるが、西半部は調査区外のため不明。直径1.2m、深さ0.5m以上を測る。埋土は、近世以降の整地に伴って人為的に埋められたもので、遺物は出土しない。なお、本井戸も耕作に伴う野井戸と考えられる。

(岡本)



第57図 A西113-00平面断面図及びA西723-0X断面図

A西-753-O W (第25図)

中央部西寄り、A西-752-O Wの東側で検出された平面円形の素掘りの井戸である。直径0.9m、深さ0.8m以上を測る。埋土は後世の整地のおり、人為的に埋められたもので、遺物は出土しない。A西-723-O Xと重複し、それより新しい。本井戸も耕作に伴う野井戸と考えられる。(岡本)

d. その他の遺構

A西-172-O X (第25図)

東西9.5m以上を測る大きな不定形プランの土壇であるが、底面の状態を見ると本来は複数の遺構の密集したものと判断できる。完形の瓦質播鉢1点を正位置で検出しているが、これもその周囲が方形に凹んでおり、本来は方形土壇であったと考えられるものである。(宮野)

A西-723-O X (第25・57図)

中央部西寄りで検出した平面楕円形の土壇状の落ち込みである。長径6.3m、短径2.0m、深さ0.7mを測り、底面舟底状を呈する。埋土は5層に分層できるが、最下層のみが自然堆積で、他は人為的に埋められたものである。遺物は近世の陶磁器片が出土し、本遺構の時期を示唆する。A西-753-O Wと重複し、それより古い。本遺構の性格としては、耕作に伴う水利施設と考えるのが最も妥当であろう。(岡本)

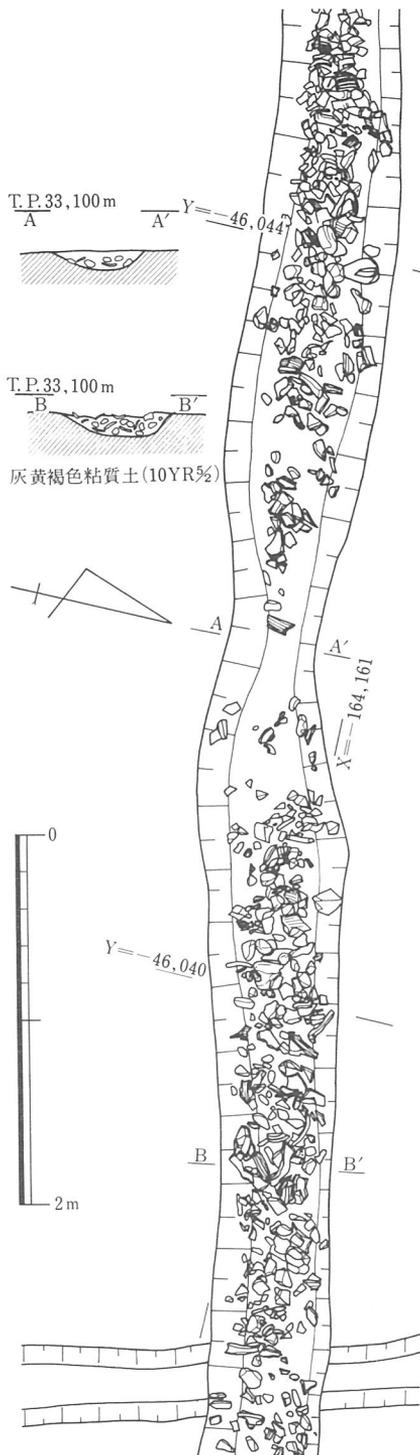
3. B地区

B地区では、鎌倉時代前半(13世紀前半)に成立した掘立柱建物を中心とした集落跡が廃絶して以降は、15世紀後半まで遺構は検出されない。15世紀以降は居住域としての遺構は一切存在せず、水田址が2～3面、現代まで継続される。地域景観の出現は、15世紀以降に求められる。

a. 溝

B-2109-O S (第58図)

B地区中央から西寄りで検出した東西方向にのびる溝である。検出長は約43m、幅50～80cm、深さ10～14cmを測る。溝内埋土は灰黄褐色粘質土で、検出長の西側約11mの間には直径約5cm程度の小石とともに遺物が細かく打砕かれて溝内につめ込まれていた。暗渠であると考えられる。出土遺物は瓦質羽釜、播鉢、甕、鍋、火舎、井筒、瓦質、土師質の小皿、古墳時代の須恵器小破片、瓦器碗小破片、陶磁器、平・丸瓦が出土した。陶磁器の内



第58図 B地区2109-O S遺物出土状況

染付が少量含まれていたが、これらは、この溝の上に堆積していた近世以後の水田層からの混入の可能性が強い。

小溝群 (第59図)

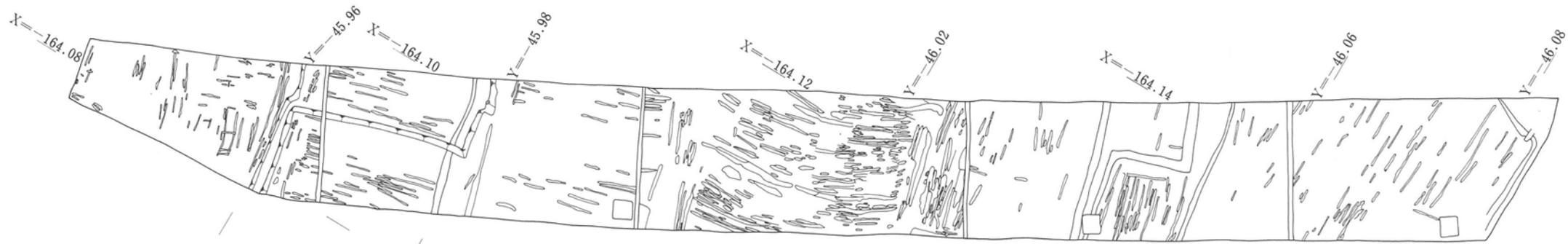
B地区では1・2次調査において、3層c下面、3層d下面で多数の小溝群を検出した。3層c下面の小溝群は幅10~20cm、深さ5cmで、埋土はにぶい黄褐色粘質土である。小溝群の方向は、調査区東側では南北方向、中央部、西側部では東西方向にのびる。各小溝間の間隔も一定ではない。3層下面の小溝群は、幅10~20cm、深さ5~8cmと3層c下面の小溝群と大差はない。埋土は黄褐色粘質土である。小溝群の方向は調査区東側では南北方向、中央では東西方向にのび、当時の水田区画がわかる。

b. 土壌

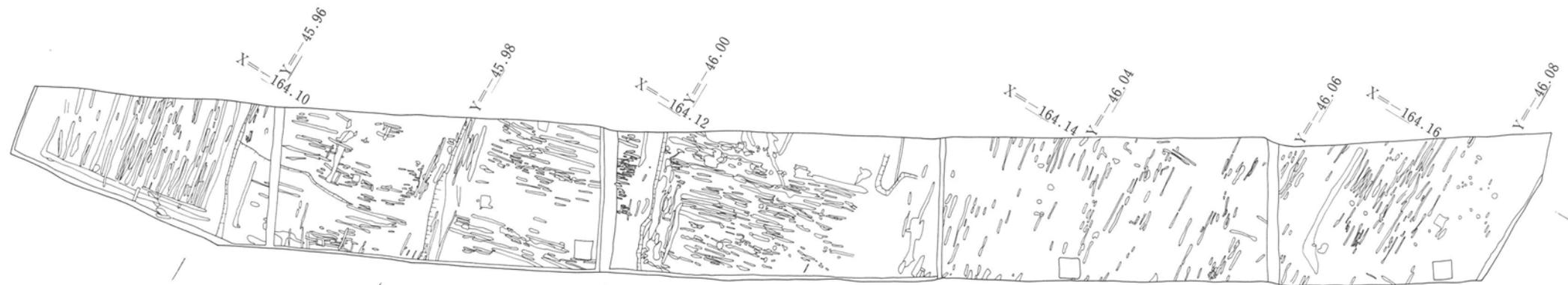
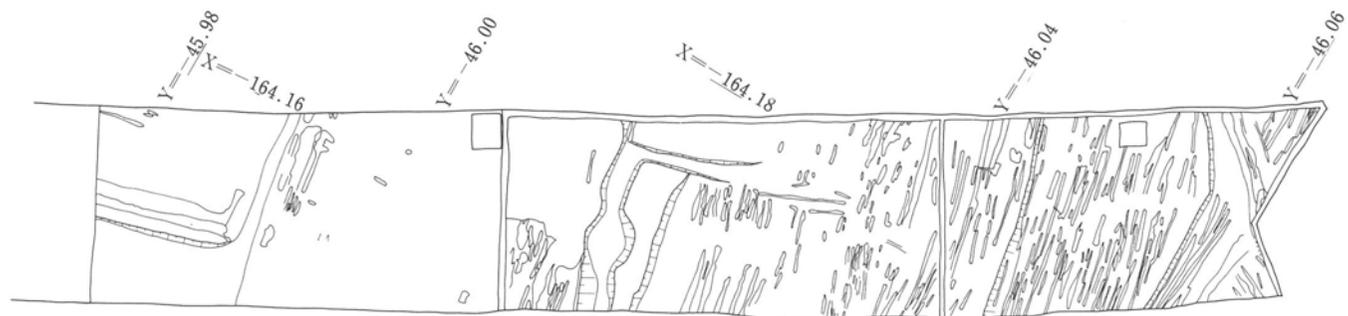
B-2263-O O (第30図)

本調査区西端で、一辺約19m、深さ約1mを測る方形の土壌を検出した。ほぼ水田一枚に該当とする。底面は多数の凹凸によって構成され、埋土は、灰褐色粘質土に地山の土がブロック状に混入していたため、粘土を採掘した土壌と考えられる。同様の土壌は、C地区でも検出されており、また平井遺跡周辺の調査においても検出例がある。

第4層を切り、第3層dが上に堆積するため、時期としては、17世紀以降と考えられる。出土遺物は、中世遺物に混じて伊万里焼などがある。 (小谷)



第3c層下面検出遺構



第3d層下面

第59図 B地区 近世水田址平面図



4. C地区

C地区の主要な遺構は、室町～江戸時代にかけてのものである。15、16世紀にかけては水利施設としての溝が、17世紀以降は、土壙や水田址などがある。

a. 溝

C-47-OS (第20図)

C地区西端で検出した溝である。検出長約14m、幅3.3～5.0m、深さ33cmを測る。D地区351-OSの延長になるものと考えられる。

C-280-OS (第60・61図)

C地区ほぼ中央に現代用水路が南東から北西方向に走る。その南側を平行に走る溝である。検出長約85m、北側の肩は現代の用水路により壊されているものの幅は2.8～3.2m、深さ70～80cmを測る。溝内埋土は大きく4層に分層できる。中層には盛土と考えられる黄褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は瓦質、土師質羽釜、挿鉢、甕、井筒、鉢、土師質蓋、瓦、また少量ではあるが陶磁器も出土した。北西では、平瓦、丸瓦が大量に投棄された状態で出土し、これらの遺物に混り、五輪塔の風輪が出土した。

b. 土壙

B地区で検出されたB-2263-OOと同様の規模、形状、底面の凹凸、埋土などの点からみて、粘土採掘壙と考えられる。

C-48-OO (第20図)

C地区北西で、一辺約22m、深さ約1.2m、底面凹凸を呈する土壙を検出した。埋土は灰褐色粘質土に地山の土がブロック状に混入している。(小谷)

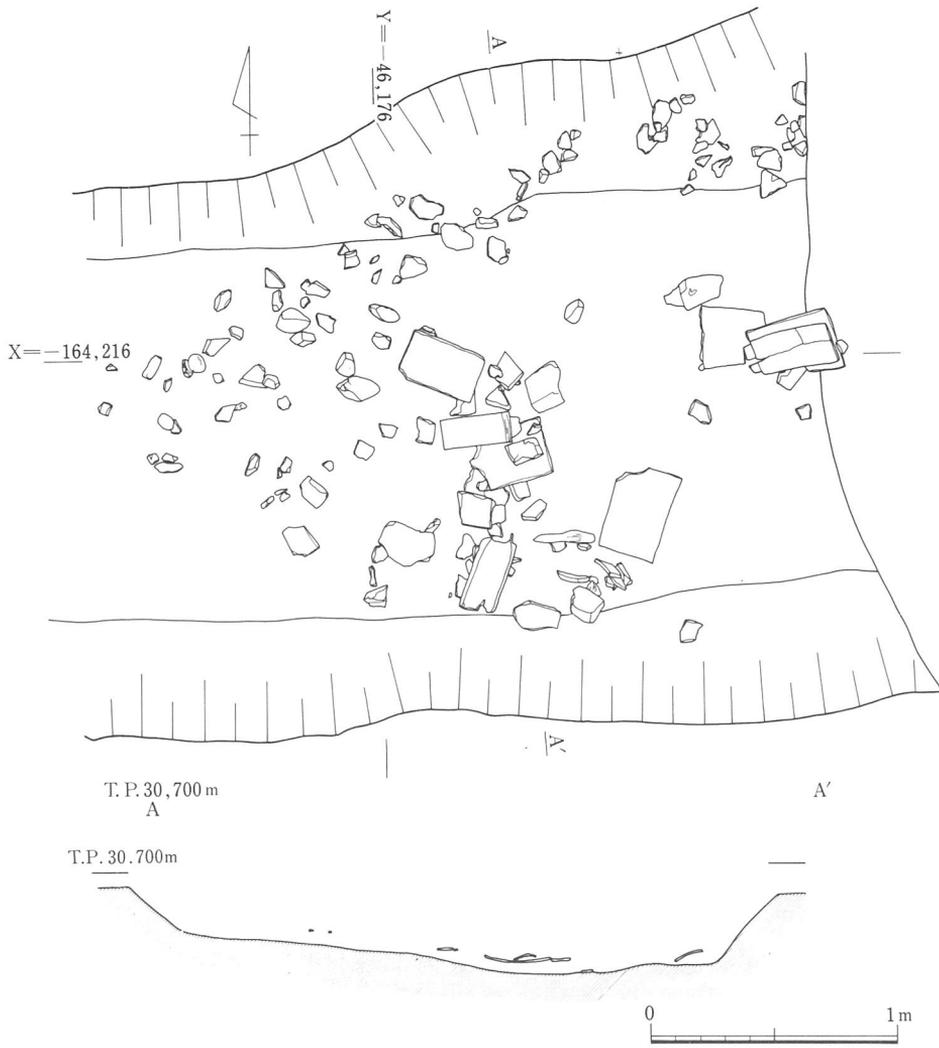
5. D地区

A 水利施設 (1)

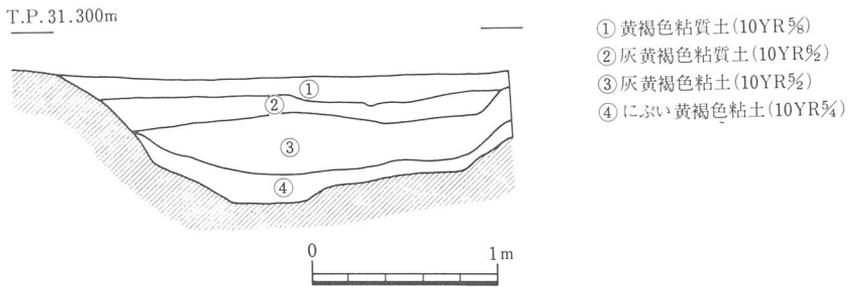
D地区のほぼ中央を南北に縦断する遺構である。原池低地およびⅢ区で検出された部分をD-100-OX、これから分枝し、Ⅱ区で検出されたもののうち、西側をD-03-OS、東側をD-351-OSと呼ぶ(第62図)。D-351-OSはC地区47-OSに連続する。

D-100-OX (谷状遺構) (第63・64図)

幅8.5m、深さ4m前後、断面は歪なV字形を呈する。斜面には連続性に乏しいテラスが数段あり、また下面には径・深さとも数10cmの凹みが6ヶ所にある。東斜面頭が2区平



第60図 C地区 280-O S遺物出土状況平面、断面図



第61図 C地区 280-O S土層断面図

坦面に接していることから、Ⅲ区の検出面は、その後に削平を受けたものであると考えられる。また、原池低地でも後世の削平が著しく、底付近が残存するのみである。

本遺構の埋土は、下部・中部・上部に3分される(第64図)。下部層は前述したように原池低地標準層序のh層の一部を構成する。粘土から砂礫までの堆積物からなり、偽礫を含む。また遺構底の凹みには、砂礫が埋積している。下部層の下半部には水成のラミナ構造が発達するが、上半部へとしだいにラミナ構造が断片的になり、かつ、乱堆積の状況を示す。また、斜面付近の下部層中には最寄りの段丘構成層に由来する偽礫が多く含まれる。したがって、下部層の形成は、流水に伴って砂礫層が堆積し、これに連続して偽礫を混えた土砂が斜面上方より供給された、と考えられる。

下部層からは瓦質の羽釜、挿鉢、瓦等が出土し、特に砂礫層中から多産した。

下部層上面には溝状遺構が検出された。この遺構は中段にテラスを持ち、テラスより上位の斜面には水ゴケ様の植物が群生している。テラスより下位は幅・深さとも0.6m前後であるが、広がり不明である。

中部層は前述したように標準層序のg層の一部を構成する。上述の溝状遺構の埋土である。テラスより下位は砂・礫を含む暗灰色シルト質粘土層である。テラスより上位は遺構中央部でシルト質粘土層であり、側方の西斜面では偽礫を含む砂質シルト層に移化する。中部層の堆積状況からみて、溝状遺構は静水域か、あるいはそれに近い環境下にあったと推定され、閉鎖水域が想定される。したがって、溝状遺構の埋積過程は、テラス下位の粘土層堆積時には、テラス上位は安定な斜面であったが、水位の上昇とともに水没し、粘土層が堆積し、西側方からも土砂が供給されたものと考えられる。中部層からは、中世後半に比定され得る多数の遺物が出土した。

上部層は前述したように標準層序のf/g層であり、主として偽礫からなる。j層下部(前述)と同様に、全体として水成層の構造をもたないこと、偽礫は最寄りの沖積層・段丘構成層に由来することにより、客土であると判断される。ただし、基底部には中部層の2次堆積物が巻上げられ、水成のラミナ構造をもつことから、客土による埋め立て時初期には、中部層中央部上面は水没していたことがうかがわれる。

D-351-OS (第63・64図)

下流部で幅8.0m、深さ4.2m、上流部で幅5.0m、深さ4.2mで、断面U字形～逆台形を呈する。ただし、後述するように、断面形態は著しい変形を受けている。

本遺構の埋土は、下部・中部・上部に3分される(第64図)。下部層は砂礫層、粘土偽



第63图 D地区 水利施設平面図(1)

礫、砂質シルト層、シルト質粘土層からなる堆積層と、斜面崩壊物とである。堆積層中には変形したラミナが認められる。斜面崩壊物は、遺構壁面を構成していた段丘構成層の一部が遺構中央部に滑落したものであり、最大落差は1.2mに達する（第64図には段丘構成層にs～wの記号を付し、斜面崩壊物との関係を示した）。したがって、本来の遺構の断面形態は、現状より幅の狭いU字形を呈していたと考えられる。なお、斜面崩壊物の滑落の誘因が人為か自然現象かは明らかではないが、1510年旧暦8月8日に大阪を襲った摂津河内地震をはじめ、いくつかの地震の発生が16世紀に記録されていることを補足しておく。

中部層は層厚0.1m前後で砂・植物遺体を含む暗灰色粘土質シルト層であり、下部層上面を薄く被覆する。

上部層は下半部の段丘構成層に由来する偽礫層と、上半部の偽礫の形状が判然としない不均質なシルト質砂～砂礫層からなる。層相から、ともに客土と判断される。また、下半部には中部層の2次堆積物が偽礫薄層間にレンズ状に挟まれており、客土による埋め立て時初期には、中部層中央部上面は水没していたことがうかがえる。この状況はD-100-OX上部層基底部と全く同じである。

D-03-OS（第63・65図）

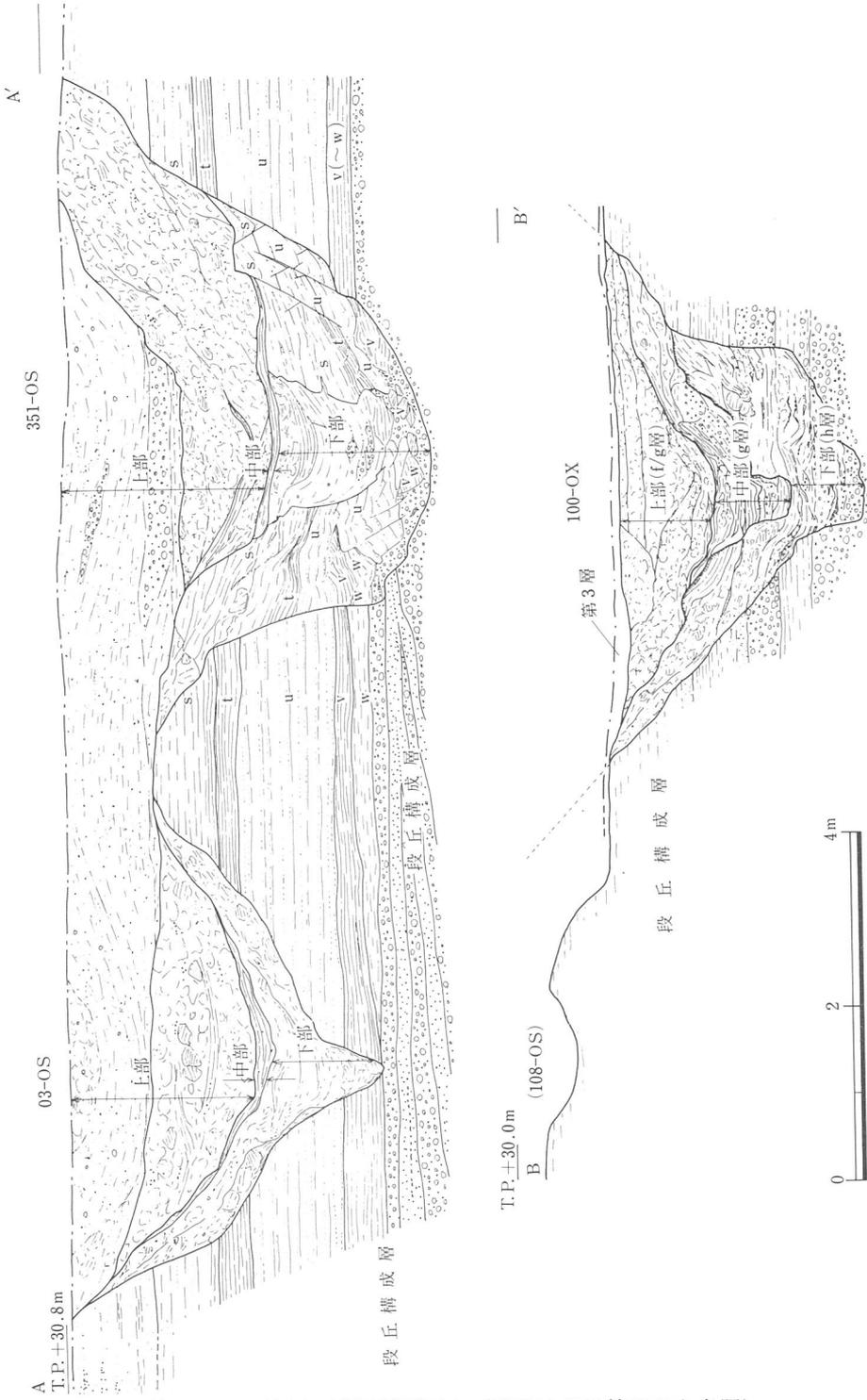
下流部で幅7.0m、深さ3.6m、断面形態は幅の広のU字形の底中央部がV字形に凹んでいる。上流部では小規模となり、幅2.5～3.5m、深さ0.9m、断面形態は肩部が外に広がる逆台形を呈する。

本遺構の埋土は下部・中部・上部層に3分され、各部層はD-351-OSのそれに連続しあるいは対比される。

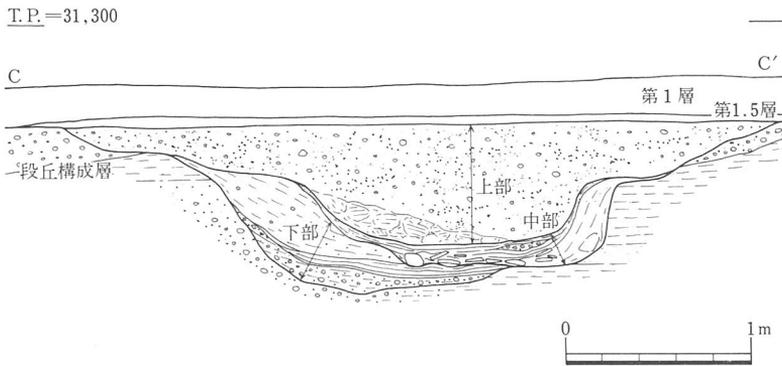
下部層は下流部でV字部分に堆積し、偽礫を含むシルト～粘土層と斜面崩壊物からなる。斜面崩壊物はD-351-OSほど顕著な滑落面をとどめず、偽礫化している。下流部の中部層（層厚20cm以下）と上部層はD-351-OSと同じである。

上流部では下部層は最大層厚約40cmのシルト質砂礫層、灰色粘土薄層、細礫混り黄褐色砂質シルト層からなる水つき堆積層である。中部層は上部層を削剝して堆積している。この削剝は溝の浚渫によるものと考えられる。中部層は最大層厚約20cmの灰褐色砂質シルト層と、砂礫薄層のレンズを挟む暗灰色シルト質粘土層とからなる。上部層は層相から客土と判定される。下半部が偽礫主体であり、上半部が不均質な砂・礫主体であるのは、下流部の状況と変わりがない。

上流部の中部層中には、瓦質羽釜、播鉢、土師質羽釜、甕、瓦など、中世後半に比定さ



第64図 D地区 遺構断面図1 (断面位置は第63図を参照)



第65図 D地区03-O S断面図（断面位置は第66図を参照）

れ得る多量の遺物が包含される。遺物が局所的に密集すること、接合される遺物片が多く、かつ、それぞれが近接して分布していること、中部層の層相からは閉鎖水域の堆積環境が推定され、遺物を移動させるような流水の作用が認め難いことにより、これらの遺物が中部層堆積時に投棄されたものであると考えられる。

小結

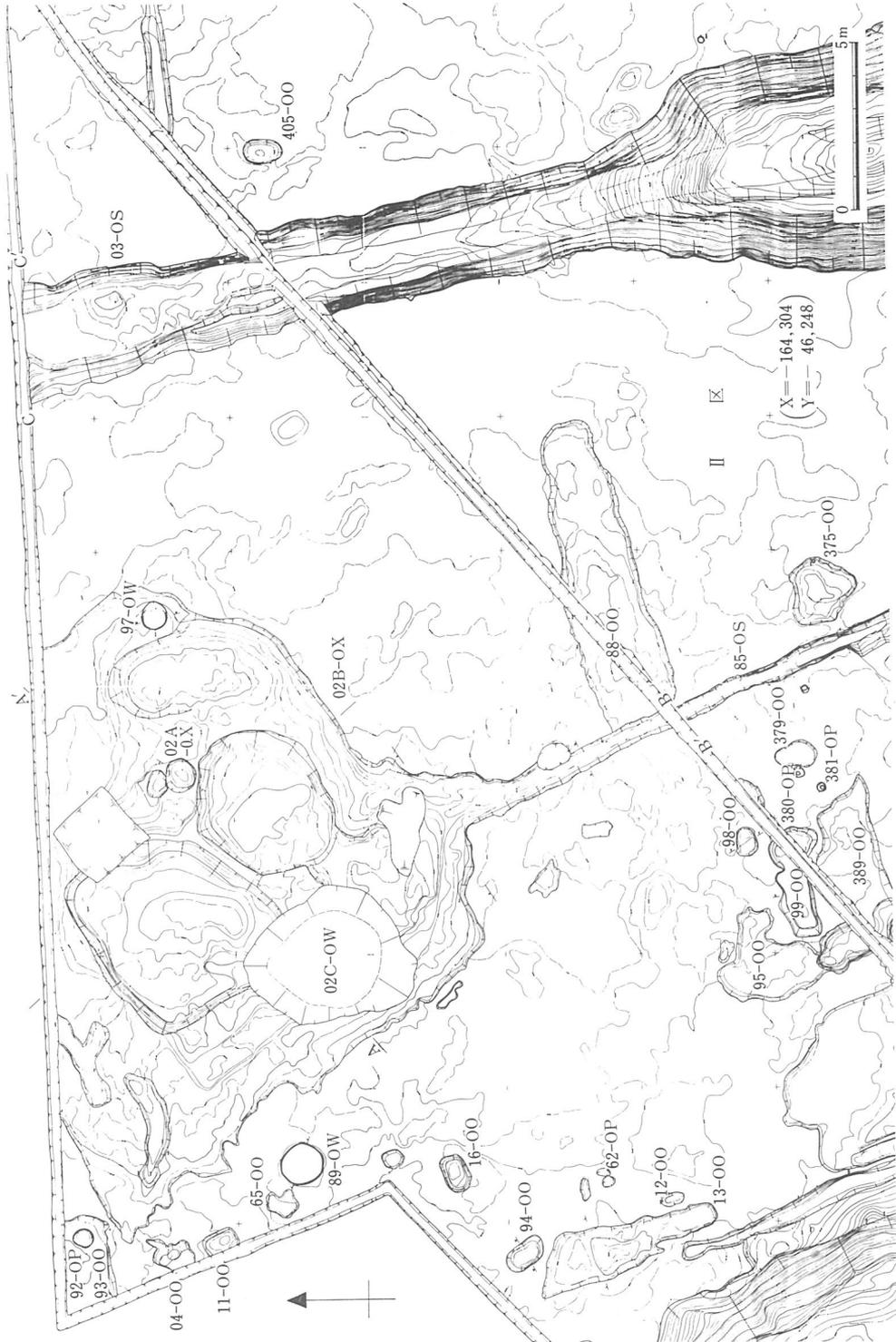
D-100-OXとD-351-OS・03-OSのそれぞれの上部層は同時の客土である。また、それぞれの中部層・下部層は、層序・層相が酷似し、出土遺物の年代観に矛盾がないことから、対比される。ここで、D-100-OS、351-OS、03-OXの埋積過程をまとめると次のようになる。1) 流水を伴う砂礫層等の堆積とこれにひきつづく斜面崩壊、および土砂の供給（下部層；h層）、2) 溝状遺構の掘削（100-OX下部層上面）、あるいは溝の浚渫（03-OW下部層上面）、3) 閉鎖水域における粘土層～シルト層の堆積と水位の上昇・遺物の投棄（中部層；g層）、4) 客土による全面的な埋め立て（上部層；f/g層）である。

なお、中部層中央部上面における勾配は5～7/100であり、また、中部層周縁部の最高位分布地点はD-03-OX上流部にあり、T.P.+30.45mである。この値からはD-100-OXと中央部における中部層堆積時の水深は2.9m以上であったと推定される。III区および原池低地で段丘構成層が著しく削掘されていると推定されている部分に堤がなければ、貯水は不可能である。（趙）

B 水利施設 (2)

D-02C-OW・D-02B-OX（溜池）・D-85-OS（第66・67図）

02B-OXはII区北西部の平井面第3層基底面で検出された。長辺約15m、短辺13～14



第66図 D地区 水利施設平面図(2)

mのほぼ方形の凹地である。その中には、一辺5 m前後の四角い凹みや長軸3～5 mの楕円形の凹みが数ヶ所にある。深さはこれらの凹み内で0.4～0.6m、縁辺部では浅く、0.2 m以下である。

D-02C-OWはひとつの凹みの下位に検出された。長径5 m、短径4 mの歪な楕円形を呈する。深さは4.3m以上あり、下限は不明である。

D-02B-OXの南東辺には、溝D-85-OSがとりついて、南東方向へ延びている。幅は0.5～0.8m、深さは0.2～0.3mである。

D-02B-OX、02C-OW、85-OSの埋土は連続しているので、以下に一括して述べる。

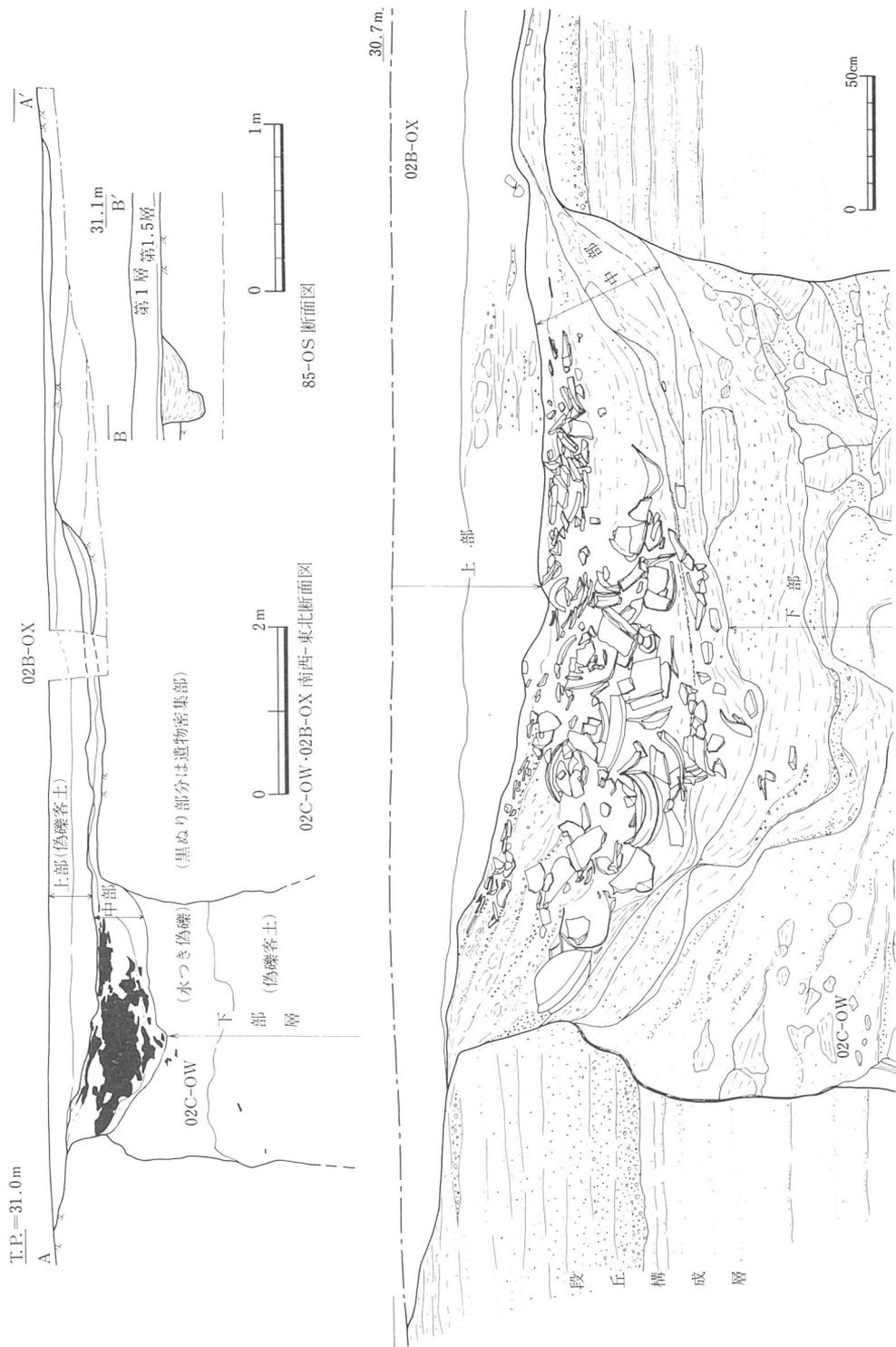
これらの遺構埋土は、下部・中部・上部層に分けられる。下部層はD-02C-OXの大半を埋積する。下半部は径20～30cm程度の比較的大きな亜角～亜円の偽礫と、主として細粒砂の基質からなる偽礫層である。上半部は偽礫を含む不均質な砂からなり、シルト～粘土薄層を挟む。下部層の構成物は、大半が最寄りの段丘構成層最上部層準に由来し、耕作土と思しき給源不明の不均質な砂質シルトを混える。層相から客土と判断され、遺構壁上方から遺構中央部にむかって供給されている。

ところで、下部層と壁面との間には、中部層と同質の粘土被膜がごく薄くめぐってくる。これは下部層の体積が収縮してできた空隙に粘土が入り込んだものである。したがって、中部層堆積直前には、下部層上半部のラミナを形成した水は一時的に干上がったと考えられる。

中部層は下部層に整合に重なる砂質シルト～粘土主体の水成層である。層厚はD-02C-OWでは厚く約90cm、周辺の凹みでは20cm前後である。D-02C-OWの肩部付近には中央部へ傾斜した砂・礫のラミナや、微細な植物遺体のラミナが認められる。また、中部層はD-85-OSの埋土でもある。

中部層中には多量の遺物が包含される。土師質羽釜、瓦質羽釜、挿鉢、瓦などが多数を占める。また、最大径50cmの割り石をはじめとして、礫も多く含まれる。遺物はほとんど割れているが、完形に近いものも多い。羽釜の大半や挿鉢の一部には煤が付着しており、煮炊きで使用されたものである。

遺物の分布からは3群のまとまりを指摘できる。下位の一群は微細な植物遺体ラミナの低位にある破片群である。中位の一群は完形に近いものを多く含む破片群であり、遺物量は圧倒的多数を占める。上位の一群は中位の一群とは砂質粘土薄層を挟んで分かれる小破



第67図 D地区 遺構断面図2 (断面位置は第66図を参照)

片群である。遺物の多くは平らな面がラミナと平行しており、中部層最上部層準の暗灰色粘土薄層に覆われる。

これらの遺物群には大きな時間間隙を求めることはできない。すなわち、中部層は整合一連の堆積層であり、その間に時間間隙が認められないこと、それぞれ複数の型式の遺物が混在すること（詳細は後述）、であるからである。また、これらの遺物の出土状況からは、D-03-OS出土遺物と同様の理由により、投棄されたものであると考えられる。したがって、中部層の包含遺物は、ごく短時間のうちに、複数回に渡って投棄されたものと考えられる。

上部層は主として段丘構成層に由来する径1～10cm程度の偽礫からなり、下半部には砂礫薄層や波状にゆがんだ粘土・シルト薄層を挟んでいる。層相から客土と判定され、D-100-OX等と同様に、客土はD-02B-OX中部層上面が水没していた状態で行われたと考えられる。

D-02C-OW、02B-OX、85-OSの埋積過程は次のように考えられる。

D-02C-OWは全容が明らかではないが、検出した形状から、とりあえず井戸（OW）と考えておく。D-02C-OXが埋め立てられて、D-02B-OXがつけられた。D-02Cの埋土（下部層）とD-02B-OXの埋土（中部層）が整合一連であること、下部層が段丘構成層最上部層準に由来し、その分布がD-02B-OXの深度に対応することからは、D-02C-OWの埋積と、D-02B-OXの掘削とが、同時に行われたと考えられることができる。すなわち、02B-OXを掘削した土砂で02C-OWが埋め立てられたと考えることができる。この時にD-85-OSも掘られたのであろう。

D-02C-OWの埋積中には水の作用があった（下部層上半部）。しかし、埋積直後には、一時的にしろ干上がっている。

D-02B-OXに粘土を主体とする中部層が堆積した。中部層の層相・分布・厚さ、および排水路と考えられるD-85-OSの分布高度からみて、D-02B-OXは平均水位がT.P.+30.7m以上、水深0.7m以上の溜池であったと考えられる。この水位は、D-02B-OXの検出面高を上廻っており、発掘時の検出面は後世にかなり削平を受けたものであると判断される。中部層堆積時には、複数に渡って遺物の投棄が行われている。

その後、D-02B-OXは埋め立てられた（上部層）。後述するように、埋め立ての過程か、あるいはその後に土壌が掘られ、土器が埋納されている（D-02A-OX）。

D-04-OO、11-OO（第66・77図）

D-02B-0Xの周囲には平井面3層基底面に土壌・ピット状の凹み、井戸（後述）が多数分布する（第66図）。土壌・ピット状の凹みは大きささまざまであるが、深さは数cmから20cm程度で全般に浅い。前述したように、この検出面は後世の削平を受けているため、本来の遺構形態は不明である。時期を判定できる遺物がほとんど出土しなかったため、確実な年代観を与える資料は少ないが、その中において、D-04-00、11-00は土師器、瓦質土器、瓦、陶器等が出土し、中世後半に比定し得る。また、D-04-00、11-00をはじめとする土壌・ピット状の凹みの埋土は、D-02B-0Xの中部層に類似した砂質シルト層であり、水つき状の堆積物であることから、02B-0Xとほぼ同時期の遺構かと思われる。ただし、D-88-00がD-02B-0Xと一連の遺構であるD-85-0Sに覆われるので、これらの遺構が全て同時存在したと推定するには無理がある。（趙）

C. 水利施設 (3)

D-82-OX（溜池）（第68・69図）

Ⅵ区第3層・第5層基底面で検出された約13m×12m+の方形に巡ると推定される凹地である。深さは0.7～0.8mあり、底面はほぼ平坦である。またⅤ区では、本遺構に水路がとりつき、東側へ下っている。

本遺構の埋土は上部・下部に分けられる。下部層は下位の細礫含有粗粒砂～細粒砂層（層厚20cm以下）と上位の暗灰色砂質シルト～粘土層（層厚10cm以下）とからなり、底面を薄く広く覆っている。粘土層中から瓦質の羽釜片が出土した。上部層は偽礫層を挟む不均質な砂礫層である。水成層の構造をもたないこと、砂・礫が不均質に混在すること、偽礫層が断続することから、客土と判断される。中世後半に比定され得る遺物を包含する。

一方、水路部分に下部層は分布せず、上部層だけが埋積する。水路部分の上部層には一部にラミナが認められる。

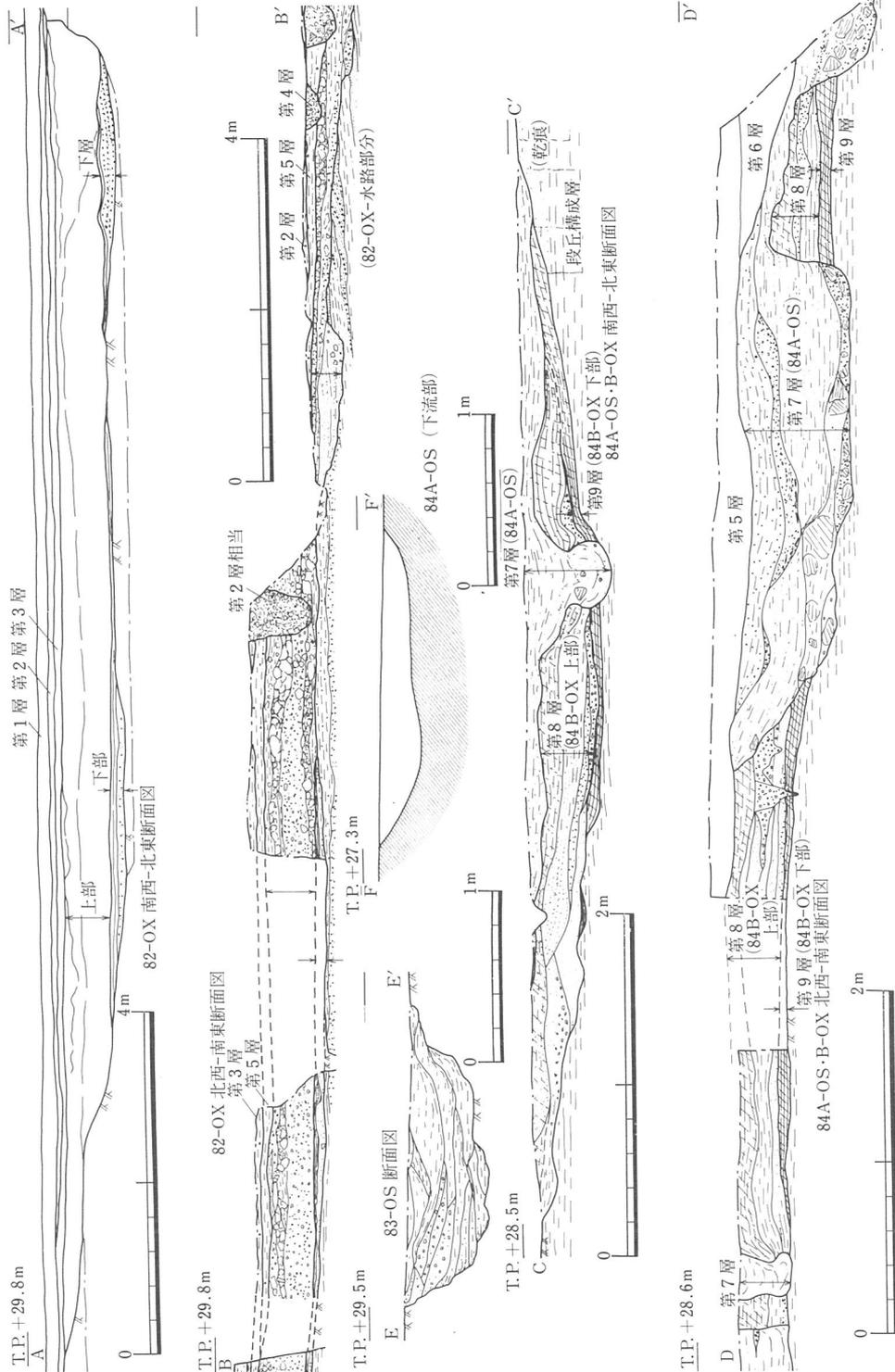
遺構の分布・埋土の堆積状況からは、本遺構の埋積過程は次のように考えられる。

本遺構の下部層は静水域か、あるいはそれに近い環境下で堆積した地層であり、D-02B-0Xと同様に溜池であったと考えられる。したがって、遺構東側は、Ⅴ区平坦面形成時に削平されてはいるが、本来は北・南側と同様に壁面（堤）があったものと推定される。

一方、水路の底とD-82-OXの底とは連続している。この状況ではD-82-OXに水を溜めることはできず、水路を流れ下ってしまうことになる。したがって水路底とD-82-OX底とが連続したのは下部層堆積後であると考えられる。そこで、水路の形成は、D-82-OXの水を排出することを目的とし、上部層による客土を前提とした作業であった、



第68図 D地区 水利施設平面図 (3)



第69図 D地区 遺構断面図3 (断面位置は第68図を参照)

と推論され得る。

D-83-O S (第68・69図)

VI・V区の平井面第2層基底面で検出された溝であり、D-82-OXの南側を西から東へ下っている。幅は1.0～2.0m、深さは0.3～0.6mある。

本遺構の埋土は砂質シルトと砂礫からなり、前者は主として溝の北半分を、後者は南半分をそれぞれ埋積する。水成のラミナ構造が認められる。両層相とその分布は遺構周囲の段丘構成層の層相と調和する。すなわち、段丘構成層は遺構付近とその北側には砂質シルト～シルト質砂層が分布し、南側には砂礫層が分布する。したがって、本遺構は周囲の段丘構成層に由来する土砂によって、南・北両側から埋積されたものと考えられる。

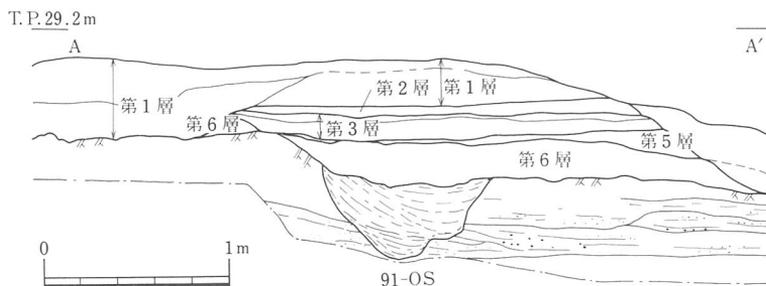
後述するように、V区・IV区の平端面は、平井面第5層形成時に形成されている。本遺構の年代観を与える遺物は出土してはいないが、本遺構がV区・IV区平端面より古い遺構であること、埋土状況がD-82-OXの水路のそれと類似することから、とりあえず、中世後半の遺構と考えておく。

なお、D-82-OX、83-OSの延長上にあたる調査地西方には、現在も小さな溜池があり(第2図)、遺構との関連が予想される。

D-91-O S (第62・70図)

III区の平井面第6層基底面で検出された溝状遺構である。幅は最大2.8m、深さ0.3m前後で、断面U字形を呈す。II・III区間斜面に平行してほぼ南北方向に分布する。検出長は約15mあり、南端は原池低地へ開口し、北端はIII区半ばで尖滅する。

本遺構の埋土は浅黄色砂質シルト層であり、下部は砂礫質であり、上部は粘土質となる。水成のラミナ構造が認められ、埋積物が主として東側から供給されたことを示している。埋土中からは瓦質土器、土師器、瓦等の破片が少量出土した。



第70図 D地区91-O S断面図(断面位置は第62図を参照)

本遺構は平井面第6層基底面で検出されたが、出土遺物が分帯におけるⅣ帯に属することから、本遺構と上位の第6層との境界は、第6層の細分を意味するものと考えられる。また、本遺構は後世に平坦化されたⅢ区平坦面で検出されたが、埋積物が東側から供給されていることから、当時はⅡ・Ⅲ区間斜面の下端にそって分布していた可能性が考えられる。第62図には当時の斜面を推定して復元した。(趙)

D. 水利施設(4)

D-01-OX(溜池)(第71・73図)

D-01-OXはⅠ区北東部の3層基底面で検出された凹地であり、調査地外南・東側へ広がる。検出長は東西12m+、南北8m+である。本遺構は遺構内西側の溝状部分と、東側の2段のテラス状部分とからなる。深さは溝状部分で最大2.2m、テラス下段で1.1m、同上段で0.3mである。

本遺構の埋土は、最下部・下部・中部・上部・最上部層に区分される。

最下部層はテラス下段の平坦面上に分布する水成の灰色粘土層(層厚20~40cm)であり、上半部が砂質である。土師器小皿の完形品が出土した。

下部層はテラス部分の最下部層上面を覆う水成層であり、下位より粗粒砂薄層(層厚4cm)、灰色粘土薄層(層厚3~4cm)からなる。

中部層はテラス部分で層厚30cm前後、溝状部分では最下部層を削剝して層厚は1.8mある。溝状部分では下半部が砂・礫混りの水成のシルト層であり、偽礫を含む。この層準からは中世後半に比定され得る土師器羽釜、瓦、漆器等が出土した。中部層下半部に漸移する同上半部は、シルト・砂を混える偽礫層である。偽礫は主として段丘構成層に由来するが、本遺構最下部・下部に由来するものも含まれる。

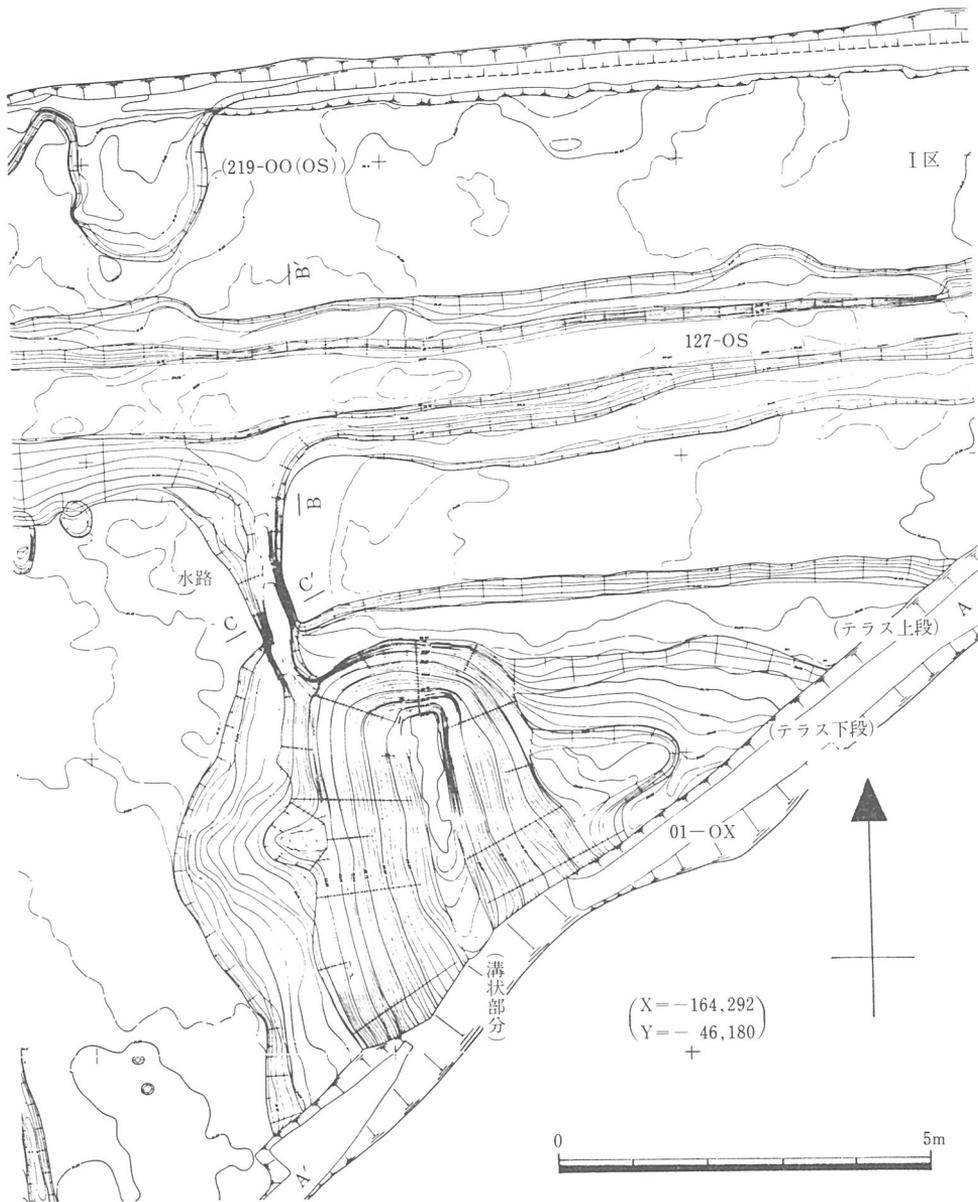
上部層は中部層を覆い、かつテラス上段の段丘構成層の平坦面を直接覆う礫含有砂質シルト層(平均層厚15cm)であり、上面に畑(350-OZ、後述)が検出された作土層である。

最上部層は上部層を覆う偽礫層(層厚20~30cm)である。

上部層および最上部層は分帯におけるⅢ帯に属する地層である。

D-127-OS(第62・71・73図)

D-01-OXとは水路で結ばれた東西方向の溝状遺構である。検出長は48mあり、西端は閉じ、東端は南へ方向を変えつつ調査地外へ延びる。幅は1.7~2.8m、深さ0.5~0.6mである。



第71図 D地区水利施設平面図(4)

本遺構の埋土は3分され、水路を経由してD-01-OXの埋土と対比される。すなわちD-01-OXの最下部・下部・中部層が埋積する。

最下部層は水成の砂質シルト～粘土層であり、粘土薄層を挟み、基底部に砂礫を伴うことがある。水路も最下部層によって埋積されており、ここでは少量の偽礫を含む。

下部層は最下部層を削剝して分布する砂質シルト～粘土層であり、砂礫薄層を挟む。

中部層は偽礫の形状は判然としないが、中礫・細礫混りの不均質な粗粒砂質シルト層である。中世後半に比定され得る遺物が包含される。遺物量こそ少ないが、出土状況はD-03-OSのそれと同じである。

小結

D-01-OX最下部層の層相は、ほとんど流水の働きのない閉鎖水域での堆積を推定させる。ただし、本来分布していたと考えられる溝状部分での状況は不明である。これに対して、D-127-OSの最下部層の層相は、緩慢な流水の作用を推定させる。

D-127-OSの下部層は最下部を削削している。これは最下部層堆積後にD-127-OSの浚渫、あるいは改修が行われたことを示すものと考えられる。

浚渫後の凹みに下部層が堆積している。D-01-OX、127-OSの両下部層は層相が酷似し、ともに閉鎖水域に堆積したと推定される。D-01-OXの溝状部分の形成は、下部層の堆積状況および中部層中の偽礫の由来からみて、下部層堆積後と考えられる。

溝状部分の中部層下半部には、水路側から傾斜するラミナが顕著に認められる。水路側からの激しい流水の働きを推定させ、D-127-OSの排水を想定させる。この状況はD-82-OXとその水路との関係（前出）に類似する。

D-01-OX中部層上半部、およびD-127-OS中部層は層相から客土と判定される。中部層による埋積後、D-01-OXは拡張され（テラス上段）、作土層である上部層が形成された。上部層はさらに偽礫からなる最上部層によって埋め立てられている。

以上をまとめると、D-01-OX、127-OSの埋積過程は、1) 静水域～緩慢な流水に伴う水成層の堆積（最下部層）、2) D-127-OSの浚渫、3) 閉鎖水域における粘土・シルト質の堆積（下部層）、4) D-01-OX溝状部分の掘削とD-127-OSの排水（中部層下半部）、5) これにひきつづく客土による埋め立て（中部層）、6) D-01-OXの拡張と耕作（上部層）7) 耕作面への客土（最上部層）、と考えられる。

なお、D-127-OSの断面（第73図）から明らかなように、I区の平坦面はその後にかなりの削平を受けている。

D-116-OX（溜池）（第62図）

I区北東端の1.5層基底面で検出された凹地であり、調査地外に広がるため、遺構の全容は明らかでない。

本遺構の埋土は上部・下部層に2分される。下部層は粘土～砂質シルト層であり、層厚は約20cmである。上部層は不均質な砂質粘土、粘土質シルト、砂礫からなり、層厚は40cm

である。中世後半に比定され得る遺物が包含される。

本遺構は他の水利施設と同様に、溜池として利用された後、客土により埋め立てられたと考えられる。 (趙)

E. 水利施設 (5)

溝 D-131-OS・148-OS (第62・72・73図)

I 区の平井面第3層で検出された2条の溝であり、ともに東西方向からL字に折れ曲がり、南北方向へ延びる。

D-131-OSは検出長が東西約17m、南北約9mで、西端は尖滅し、南端は調査地外へ延びる。幅は0.2~0.8m、深さは0.1~0.2mである。埋土は下半部が偽礫を伴う砂礫であり、上半部が不均質なシルト質砂礫からなる。

D-148-OSは131-OSの南・西にあり、検出長が東西約12m、南北約10m+で、西端は131-OSと同様に尖滅し、南端は方向を南東へ振りつつ、D-276-OS(後述)に削剝される。幅は0.2~0.8m、深さは0.1~0.2mである。131-OSとは東西方向で0.1~0.8m、南北方向で5~6m隔っている。埋土は数cm大の偽礫を多く含む不均質なシルト質砂であり、炭化物を含む。

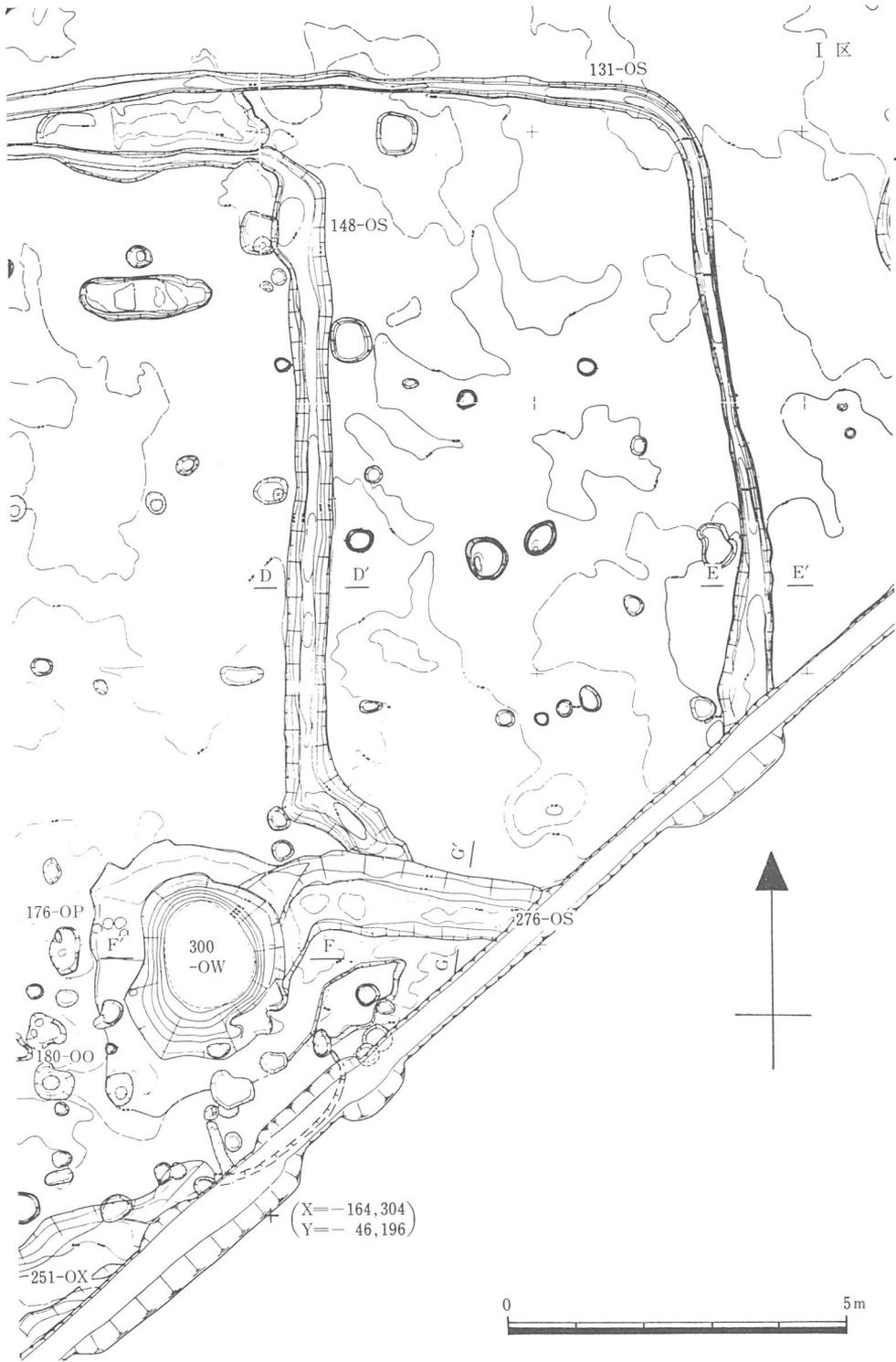
両遺構からは中世後半に比定し得る遺物が少量出土したのみで、両者の新旧関係は不明である。また、148-OSは鎌倉時代の掘立柱建物1-OBと一見調和的ではあるが、01-OBの柱穴のひとつ150-OPに所属不明の149-OPが重なり、さらに149-OPを148-OSが削剝していることから、148-OSと01-OBとの直接の関係はない。

D-300-OW・276-OS (第72・73図)

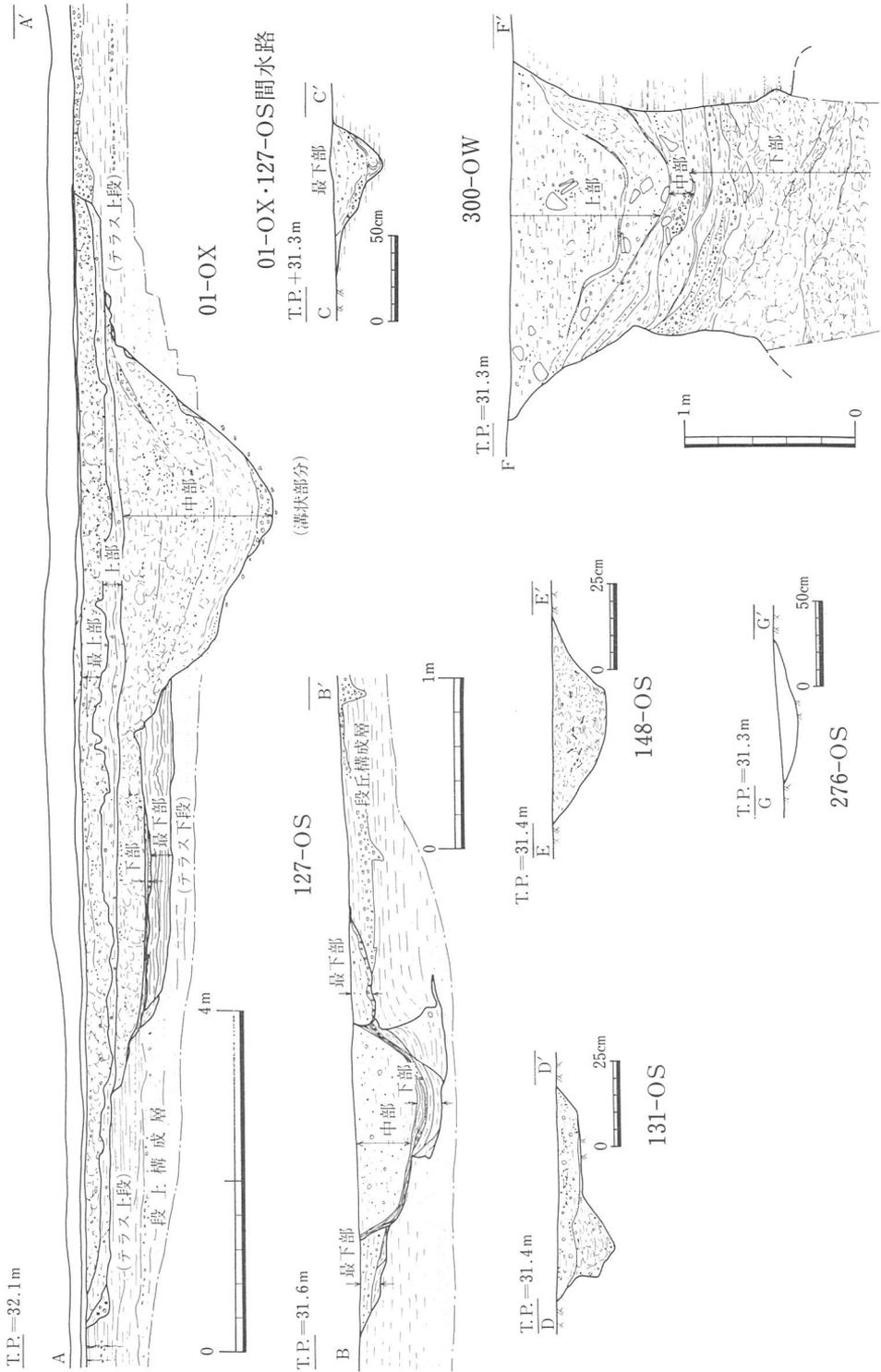
D-148-OSの南部の平井面第3層基底面で検出された井戸とこれに付属する溝である。

D-300-OWは長径2.7m、短径2.1mの歪な楕円形の平面形を持ち、深さは3.2m+で下限は不明である。深度0.7~1.5mで狭くなり、径1.2~1.4mの楕円柱形を示すが、それ以下ではオーバーハングして壁面を検出し得ていない。遺構の形態からみて井戸と考えられる。

本遺構の埋土は層相により3分される。また、下部層はさらに2細分される。ただし、他の遺構埋土の区分ほど明瞭な境界はもたない。下部層下半部は段丘構成層に由来するシルト質砂・シルト・粘土偽礫と、給源不明の耕作土と思しき暗灰色砂質シルトの偽礫、およびシルト・砂・礫の基質からなる。偽礫径は最大20cmで大礫大以上がめだつ。下部層上半部は偽礫を含み、砂質シルト・砂礫・耕作土(上述)・中礫からなる。遺構壁斜面にそっ



第72図 D地区 水利施設平面図 (5)



第73図 D地区 遺構断面図4 (断面位置は第71・72図を参照)

てラミナ構造が認められ、細粒砂薄層、粘土薄層を挟む水つき状堆積物である。下部層の堆積状況はD-02C-OX（前出）のそれに類似し、客土と考えられる。

中部層は水成の砂質シルト層からなり、細礫、中礫、瓦を含む。また、細粒砂薄層を挟む。遺構中部層での層厚は約15cmである。

上部層は不均質な砂質シルト層であり、瓦、細礫、中礫、中礫大の偽礫を含む。また、細粒砂薄層を挟んでいる。客土と考えられる。

D-276-OSはD-300-OWの東にとりつく溝である。幅0.9~1.2m、深さ0.1mで断面は時計皿形である。埋土はD-300-OWの上部層と同じ礫含有砂質シルト層である。

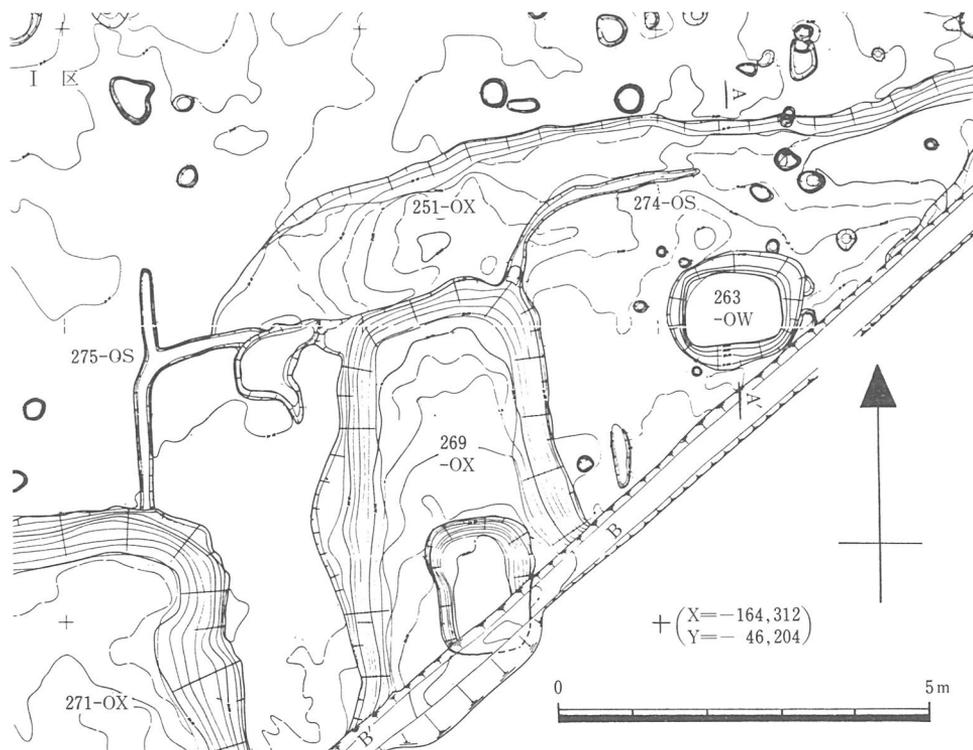
D-300-OWの周囲、およびD-276-OSの南側には、5cm内外の浅い段が幅40~80cmで巡っている。埋土はD-276-OSと同じであり、両遺構は一連のものと考えられる。

（趙）

F. 水利施設 (6)

D-251-OX (凹地) (第62・74・76図)

I区平井面第3層基底面で検出された浅い凹地である。D-300-OW（前出）の南西



第74図 D地区水利施設平面図(6)

側にあり、北縁はほぼ東西方向の段（検出長14m+）で、西縁は後述するD-269-OXの西辺（検出長7m+）で区画される。南東側は調査地外へ広がるが、I区東南壁断面では、D-276-OS（前出）南側の浅い凹地と連続することが確かめられる（第12図）。深さは5～20cmであり、後述する遺構を除いて、底はほぼ平坦である。埋土は不均質な礫含有砂質シルトである。

D-263-OW（第74・76図）

D-251-OXの基底面で検出された井戸らしい遺構である。平面形は長辺1.8m、短辺1.5～1.6mで隅丸の長方形を呈し、深さ0.9m強である。壁面中位に段があり、その上位は斜面、その下位はほぼ垂直に落ちる。また、底面は平坦であり、底面形は長辺1.3m、短辺1.0mの隅丸長方形を呈する。

埋土は段丘構成層に由来する粘土・粘土質砂礫の偽礫（径1～2cm）、溜池底堆積物に類似した未固線の粘土偽礫（径3～5cm）、および砂・礫の基質からなる。埋土は細分されない。埋土中からは、中世後半に比定され得る少量の遺物が出土した。

D-263-OWの周囲には直径15cm前後で深さ5～11cmの小さなピットが6ヶ所で検出された（第74図）。D-263-OWに付属するピットの可能性がある。

D-269-OX（溜池）、D-274-OS・275-OS（第74・76図）

D-251-OXの下面で検出された上下2段に重なる長方形の凹地である。上の凹地は長辺6m+、短辺3m前後あり、調査地外南側に広がる。深さは0.4～0.5mで短軸の断面形態は幅広の逆台形である。

また、北東隅、北西隅には小溝（D-274-OS・275-OS）がとりついている。ともに幅約0.2m、深さ0.1m未満である。北東隅にとりつく274-OSは251-OX北縁にそって東へ延び、263-OW付近で尖滅する。北西隅にとりつく275-OSは、西進したのちT字形となり、一端が後述する271-OXに接続する。

一方、下の小さな凹地は、長辺1.8m、短辺1.3mの隅丸長方形を呈する。深さは約0.3mであり、断面形態は上の凹地と同様である。

本遺構の埋土は下部・上部層に2分される。下部層は水成の暗灰色礫含有砂質粘土層で層厚は35cm以下である。主として下の凹地を埋積し、上の凹地の底面を薄く被覆する。上部層は段丘構成層の由来する偽礫、大礫、炭化物、焼土と砂礫～粘土の基質からなる。その上半部は偽礫の含有量が減少し、D-251-OXの埋土に漸移する。上部層は層相から客土と判断される。瓦、土師器片等が出土し、中世後半の年代観を与えることができる。

なお、前述したD-263-OWの埋め立ては、少なくともD-269-OX上部層よりは古く、下部層堆積時以前である。(趙)

G. 水利施設 (7)

D-271-OX・117B-OX (凹地)、D-249-OX・272-OX・278-OX (溜池)

これらの遺構はいずれもI区南西部平井面第3層基底面で検出された(第75・76図)。

D-271-OXはD-269-OX(前出)の西側で検出された凹地である。東西約6m、南北7m+で調査地外南側へ広がる。深さは0.3m前後であり、底面は平坦である。

D-249-OXは271-OXの北西隅を共有する南北に細長い凹地である。南北約10m、東西2~3mで、深さは0.7m、断面は幅広のU字形を呈する。

D-117B-OXは、D-271-OXの西側にある浅い凹地状の平坦面である。南側は調査地外へ広がり、西側をI/II区間斜面に削割されているため全容は明らかではない。平坦面上には花崗岩割石数点、瓦溜等が検出された。また、D-117B-OX基底面では鎌倉時代に比定し得る遺物を出土したピット群2(前出)が検出されている。

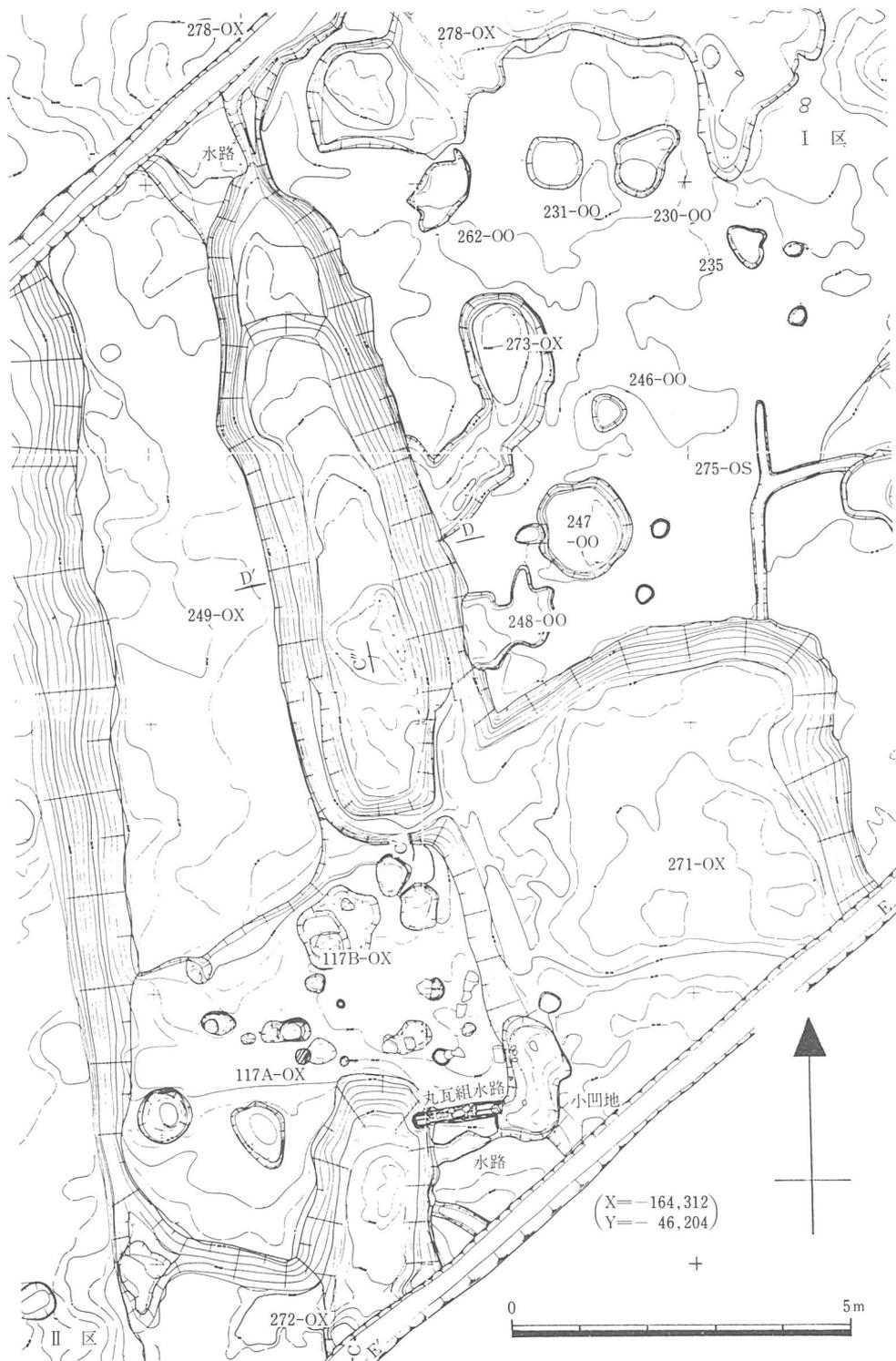
D-272-OXはD-117B-OXの下面で検出された凹地である。長軸4m+、短軸約2m、深さ0.3~0.6m、短軸方向の断面がU字形を呈する。素掘り水路および丸瓦組水路(暗渠?)でD-271-OXの一部と連結している。

D-278-OXはD-249-OXの北側にあり、D-249-OXとは水路で結ばれる浅い凹地である。平面形は凹凸が著しいが、南北5~7m、東西11m+の歪な長方形を推定させる。西側はI/II区間斜面に削割される。深さは0.2~0.3mであり、底面は比較的平坦である。

D-271-OX、249-OX、272-OX、117B-OX、278-OXの埋土は、それぞれ相互に共有し、連続して追跡が可能であるので、ここでは一括して述べる。これらの遺構埋土は4分され、下位より下部・中部・上部・最上部層と呼ぶ。

下部層は、D-249-OX、272-OX、278-OXのそれぞれ下位層準の堆積層であり、灰色シルト質粘土~砂質粘土層である。層厚は249-OXで10~20cm、272-OX・278-OXで20~30cmである。

中部層は偽礫層であり、D-249-OX、272-OXの中部層準を占める。D-249-OXでは砂質シルト偽礫と、粘土質シルトの基質からなり、平均層厚は25cmである。D-272-OXでは偽礫・大礫~細礫と、砂質シルトの基質からなり、層厚は15~40cmである。水成のラミナ構造が認められ、下部層上面が著しく変形していることから、水中に供給された偽礫であると判定される。瓦質羽釜、土師器小片、瓦等が出土し、中世後半に比定し得る。



第75図 D地区 水利施設平面図(7)

また、D-272-OX中部層は、水路を挟んでD-271-OX側の小さな凹みにも堆積している。

上部層は偽礫層であり、D-249-OX、272-OXの上部層準、D-117B-OX、271-OXの下部層準を占める。主として段丘構成層に由来する中礫大の偽礫と、細礫混り砂質シルトの基質からなる。層厚は5～40cmでD-271-OXでは薄い。

最上部層は偽礫層であり、D-271-OXの上部層準、D-117B-OXの上部層準を占める。層厚はD-271-OXで厚く最大25cm、D-117B-OXでは薄く15cm以下である。主として段丘構成層に由来する粘土偽礫と、砂質シルトの基質からなる。基底部には5cm未満の砂質シルト薄層を伴うが、全般には水成のラミナ構造は認められない。

各遺構の埋積状況からは、これらの遺構の埋積過程は次のように考えられる。

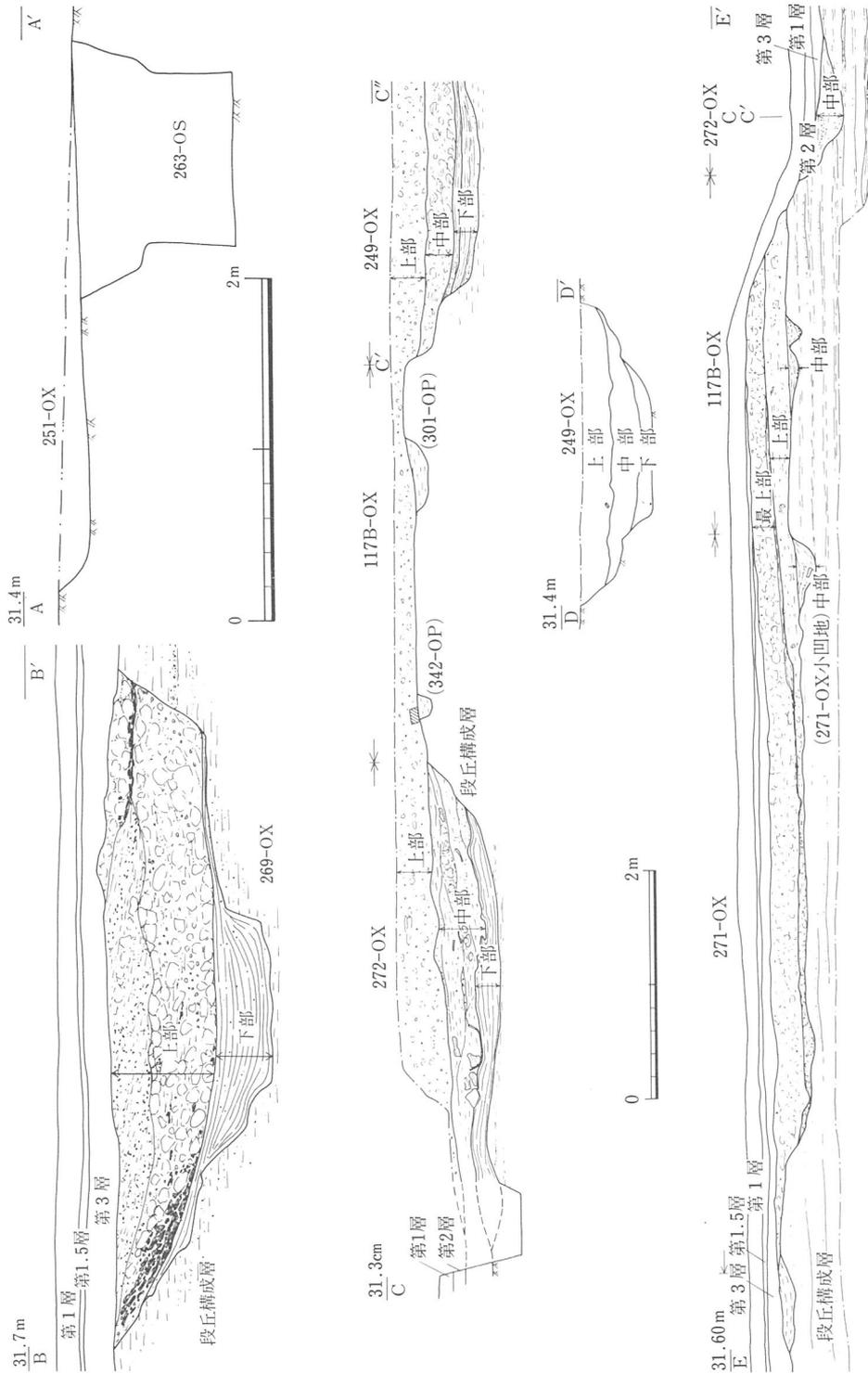
D-249-OX、272-OX、278-OXを最初に埋積する下部層は、層相から閉鎖水域に堆積したと考えられる。つづいて中部層が供給された。D-249-OXでは判然としないが、D-272-OXでは貯水状態にあったところへ中部層の構成物が供給され、埋め立てられている。D-272-OXと水路等を挟んで271側の小凹みにも中部層の構成物が供給された。ところが、D-271-OXの本体には中部層で分布せず、直接上部層によって覆われている。D-272-OX～271-OX内小凹地の中部層が、水つき偽礫層であることから、D-271-OX本体とD-272-OXの共存は考え難い。したがって、D-271-OX本体は、D-272-OXに後出するものと考えられる。また、D-271-OX内の小凹地は、D-271-OXに先立ってD-272-OXと共存した水利施設の名残りであろう。

一方、117B-OXの平坦面は、上部層に覆われること、この上部層はD-272-OXの中部層の削平面上を覆っていることから、D-271-OXと共存したと考えられる。

上部層と最上部層との時間間隔は、ごく短かったと推定される。D-271-OXが水成層の証拠に乏しいこと、最上部層基底部の砂質シルト薄層は、安定な平坦面には分布せず、緩斜面にのみ分布することから、雨水等による一時的な斜面堆積物と考えられることによる。

以上をまとめると、1) D-249-OX、272-OX、278-OXの貯水と下部層の堆積、2) 中部層構成物の供給による埋め立て、3) D-271-OX本体の掘削とD-117B-OXの平坦面形成、4) 遺物の投棄、5) 上部層とこれにひきつづく最上部層の供給による全面的な埋め立て、である。

なお、D-275-OS（前出）は、本遺構群の埋土との層序関係から、最上部層埋積時より前に消滅している。また、D-117B-OXの上部層準である最上部層中には、掘り形をもたない土師器皿埋納羽釜（D-117A-OX、後述）が埋もれていた。（趙）



第76図 D地区 遺構断面図5 (断面位置は第74・75図を参照)

H. その他の井戸

D-112B-OW (第68・77図)

Ⅳ区平井面第6層下面で検出された井戸らしい遺構である。平面形は一辺0.8～1.1mの五角形を呈する。深さは1.7mであり、深度0.5～0.6mで最も狭まり、長径0.9m、短径0.7mの楕円形となる。その下位はややオーバーハングぎみに垂下する。底面は段丘構成層の砂礫に達しており、比較的平坦である。現状で地下水の湧出がある。

遺構埋土は大礫～細礫を含む不均質な砂質シルトであり、下半部は泥質で還元状態にある。年代観を与える遺物は出土しなかった。

D-89-OW (第66・77図)

Ⅱ区平井面第3層基底面で検出された井戸状の遺構である。直径約1.3m、深さ0.6mの円筒形であり、底は平坦である。壁面をつくる段丘構成層は、上位より細礫混り細粒砂質シルト層（層厚約20cm）、シルト層（層厚約20cm）、細粒砂～極細粒砂層（層厚20cm+）であり、現状で地下水の湧出はない。

埋土は中～大礫を混える不均質な砂質シルトであり、水成のラミナ構造は認められない。また、埋土と壁面との間は厚さ3cm未満の砂質シルト薄層が巡っており、埋土の収縮を物語っている。中世後半に比定し得る遺物が少量出土した。

D-97-OW (第66・77図)

Ⅱ区D-02B-OX東縁のD-02B-OX上部層基底面で検出された井戸らしい遺構である。直径約0.8m、深さ1.2mの円筒形であり、底は平坦である。壁面をつくる段丘構成層は、上位よりシルト・細粒砂～極細粒砂互層（層厚約35cm）、細粒砂～中粒砂層（層厚約10cm）、細粒砂～極細粒砂層（層厚約15cm）、極細粒砂質シルト層（層厚約15cm）、シルト～粘土質シルト層（層厚40cm+）であり、現状で地下水の湧出はない。

埋土は壁面の段丘構成層と同質の粘土質シルト～シルト偽礫と、灰色砂質粘土の基質とからなる。年代観を与える遺物は出土していない。

I. その他の遺構

D-112A-OO (第68・78図)

Ⅳ/V区間の斜面部分の平井面第6層下面で検出された羽釜埋納土壌である。土壌は直径70cm前後の歪な円形で、深さは約25cmであるが、検出状況からみて、本来の掘削面はより上位にあったものと考えられる。埋土は非水成の砂質シルト層であり、この付近の第6層と同質である。

出土した羽釜は大小2個体が到立した状態で重なっている。下位の大きい方には外面に煤が付着し、煮炊きに使用されたものである。上位の小さい方には煤の付着した痕跡はない。ともに土師質である。出土状況から、人為的に重ね置かれたと考えられる。

D-117A-OX (第75図)

I区D-117B-OXの上部層準の埋土である最上部層中から出土した。

瓦質羽釜の内部に土師器小皿を納めたもので、瓦質挿鉢で蓋をしていた。羽釜は正位置に据えられており、小皿の枚数は、完形もしくは完形に近いものが14点あるが、その他小片が2点分あり、総計16点が納められていたものと考えられる。羽釜を据えた掘方は判然とせず、確認できなかった。鎮壇等、祭祀に関わるものであろう。

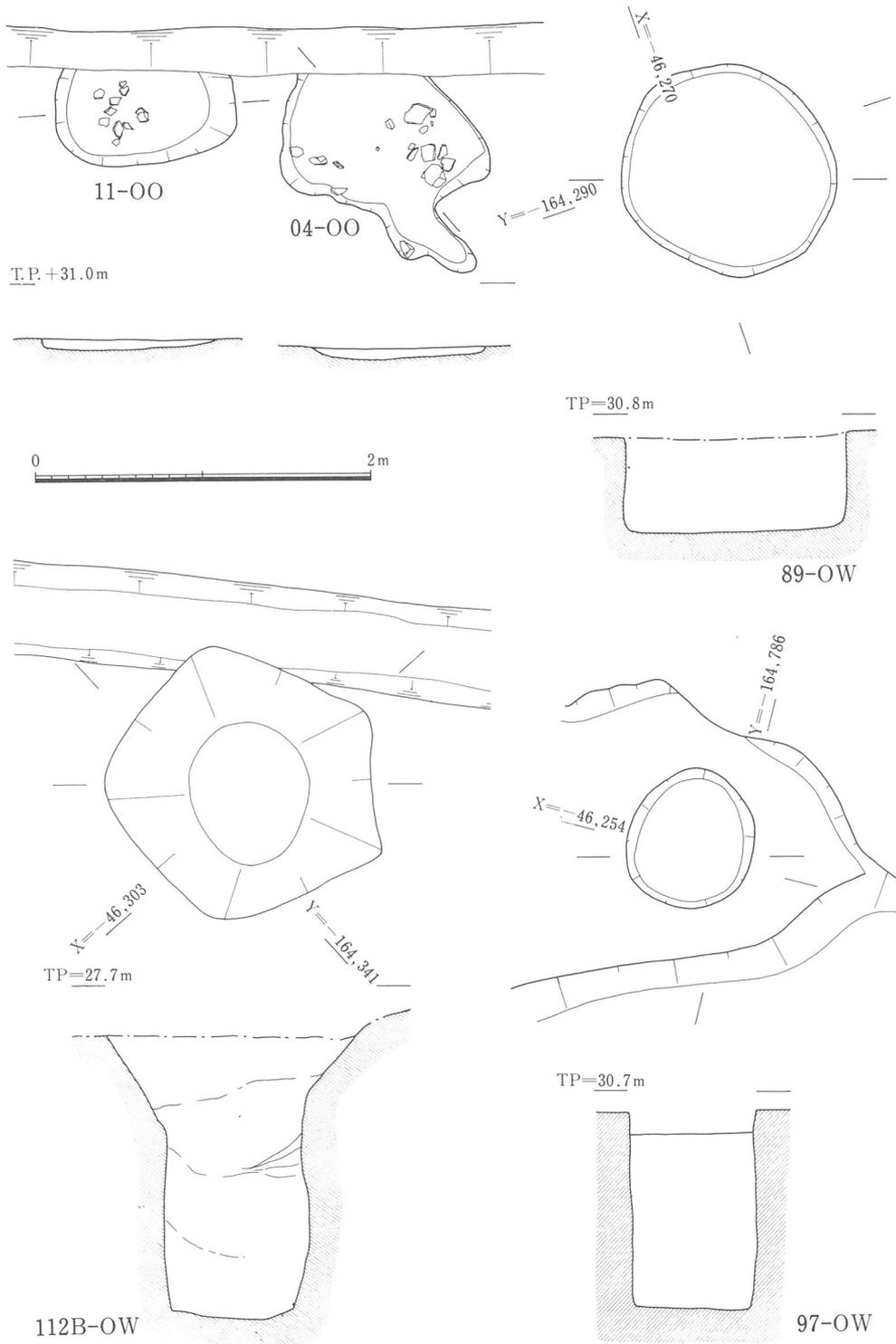
D-02A-OO (第66・78図)

II区平井面第3層基底面でD-02B-OXに重なって検出された土器埋納土壌である。土壌の平面形は直径90~100cmのやや歪な円形であり、深さは最大23cmである。埋土は黄褐色細礫含有粗粒砂質シルトである。D-02B-OX中部層(灰色砂質粘土層)を削剥していることから、D-02B-OX上部層か、それ以上で第3層の下位の層準に対比される。埋納された土器は、上半部が第3層によって削平され、底付近がのこっていた。土師質甕が正位置に据えられ、その中に瓦質挿鉢、羽釜、土師質羽釜等の比較的大きな破片が密に埋納されたものである。

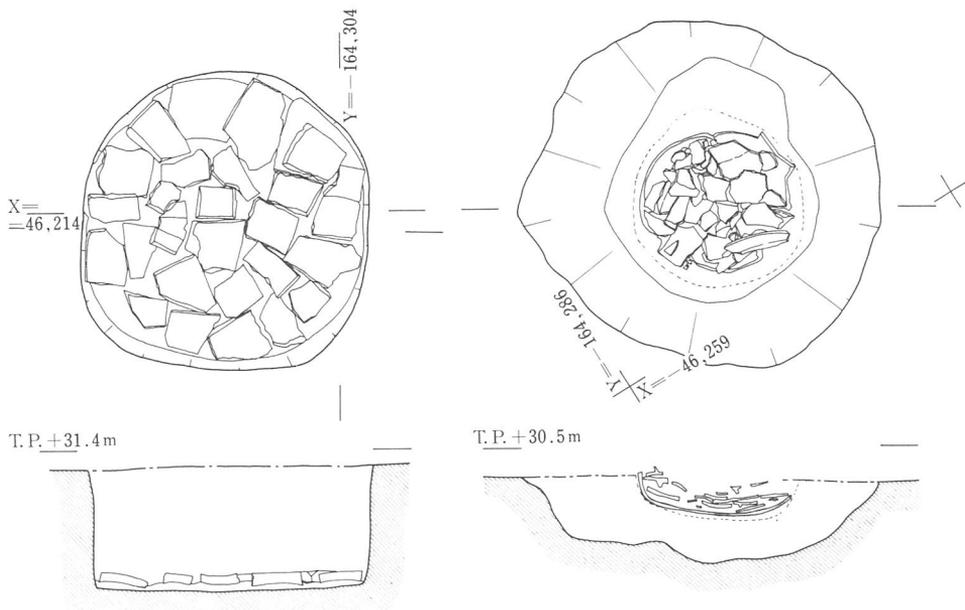
土師器甕の底と埋土との間には、厚さ2cm以下の灰色粘土薄層が巡っている。D-02C-OXやD-89-OW埋土と同様に、この粘土薄層は、埋土が収縮した結果、土器との間に生じた空隙を埋めたものと考えられるので、埋土の供給と土器の埋納は時間間隔を推定することはできない。したがって、埋土の供給と土器の埋納とは一連の作業であると考えられる。

本遺構に類似した遺構は、II区北側の長崎屋の敷地内で堺市教育委員会が実施した調査でも検出されている。堺市教育委員会(1983)⁽¹⁾によれば、「SK024」内に「やや大きさの異なる土師質甕を上下に重ね水平に置き、その内部に瓦質羽釜片を積み込んでいる。……(中略)……甕のまわりには独自の掘方は認められず、まわりの礫・土師片と共に埋め戻された?のであろうか。」という。

本遺構の性格は明らかにし得ないが、比較的大きな土器の中に小型の土器を埋納した例が元興寺から報告されている。伊藤(1965)⁽²⁾によれば墓地から見つかった火消壺形の土器の中の灯明皿、小型羽釜、小型壺、土鈴が納入されており、蔵骨容器であるという。この

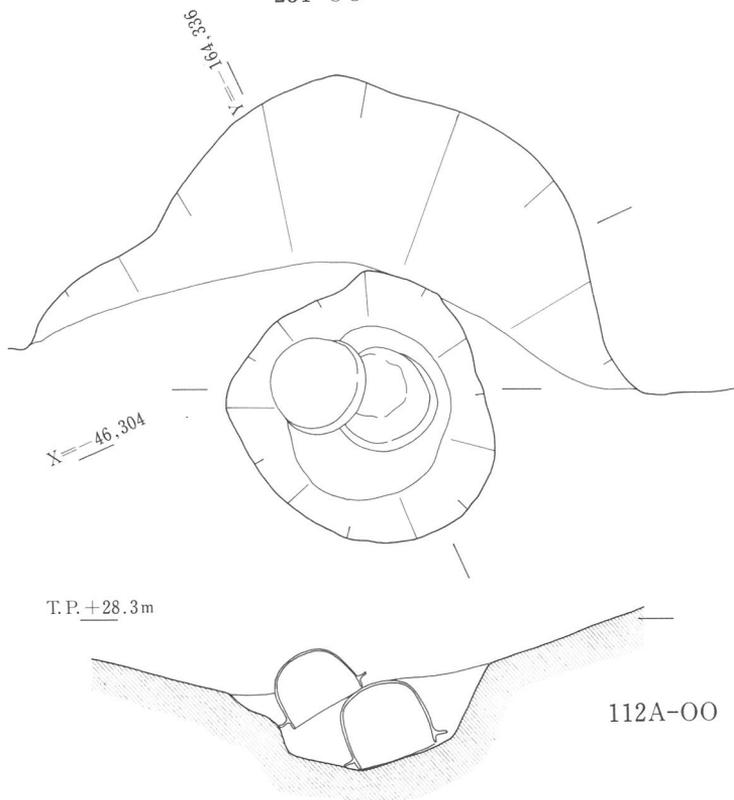


第77图 D地区 遺構平面、断面図



231-00

02A-00



T.P. +28.3m

112A-00

第78图 D地区 遺構平面、断面図

—OX下部層である。

層序・層相にもとづいて、D地区の中世後半（Ⅳ帯）に属する水利施設等の対比試案を第2表に示す。出土遺物の詳細な検討が不十分であり、また、粘土層の堆積速度等の堆積学的な検討が不十分であるので、結論を急ぐものでもない。しかも、対比された地層には本来、地層形成に関わった時間を内在しており、この対比試案が、遺構相互の厳密な同時性を（可能性は別として）主張するものでもない。しかしながら、この対比試案から導き出される結論、すなわち、少なくともg層形成期に淵と呼ばれる水利施設が急増し、f/g層形成期にはそれらが尽く埋め立てられた蓋然性は、大局的には肯定されると考えられる。（趙）

K. Ⅲ帯畑・水田

D-347-OZ（第79図）

原池低地f層上面で検出された畑である。偽礫層であるe層に覆われ保存されたものである。

検出された14筋の畝と畝間（畝底・畝合）はほぼ東西方向であり、Ⅲ区／原池低地間の段丘崖に平行する。上面はT.P.+27.5～27.6mである。段丘崖寄りでは上位のd層に削平されて、e層が埋まった畝間だけが検出されている。保存のよい原池寄りでは、畝・畝間とも幅60cm前後、畝高は約10cmである。原池低地中央部では畝・畝間とも検出されなかったが、作土層（f層）の分布から、この畑は東西42m以上、南北20m以上の広がりをもっていたと推定される。

D-348-OZ（第79図）

Ⅲ区西部の平井面第5層上面で検出された水田である。偽礫層である第4層に覆われ保存されたものである。

水田は現代用水路、およびⅢ区／原池低地間の段丘崖に沿うL字形の凹地内に分布する。2条の畦畔によって3筆に区分され、北側より南側へ順次低くなる。

北側の一筆は南北4m＋、東西2m＋の広さがあり、耕作面の平均標高はT.P.+28.1mである。上面には足跡と思しき小さな凹みが多数検出された。南限を区切る畦畔は、幅約50cm、高さ約10cmで断面が饅頭形である。また畦畔東側の段との間には、幅約30cmの水口がつくられている。

中央の一筆は南北9m＋、東西6m＋の広さがあり、耕作面の平均標高はT.P.+27.9mである。南限を区切る畦畔は幅約20cm、高さ約5cmで、断面が台形である。

南側の一筆は南北7m＋、東西23m＋の広さがあり、耕作面の平均標高はT.P.＋27.8mである。

D-347-OZ、ほか（第79図）

V区平井面第5層上面で検出された畑である。畝部分は第3層によって削平されているが、偽礫層である第4層が埋める畝間が保存されたものである。

畝間はV区の延びの方向に一致する4筋と、その南側でこれにほぼ直交する3筋が検出された。IV/V区間斜面では削割されている。残存する畝間は幅50～70cm、深さ15～40cmである。検出された畝間は最大長でも約9mであるが、第5層はV区に広く分布することから、この畑はV区全域に広がっていたと推定される。

IV区では、IVの延びの方向と平行に、平井面第5層下面で幅0.4～2.0m、深さ数cmの浅い溝状遺構が検出されたが、第5層上面は第3層に削平されており、遺構は検出されなかった。また、VI区でも、第5層上面は第3層に削平されており、遺構は検出されなかった。しかしながら、IV区・VI区第5層が、畑が検出されたV区の第5層や水田が検出されたIII区第5層と同質であり、作土層と考えられることにより、IV区・VI区にも、第5層を耕作土とする耕地が広がっていたと推定される。

D-350-OZ（第73・79図）

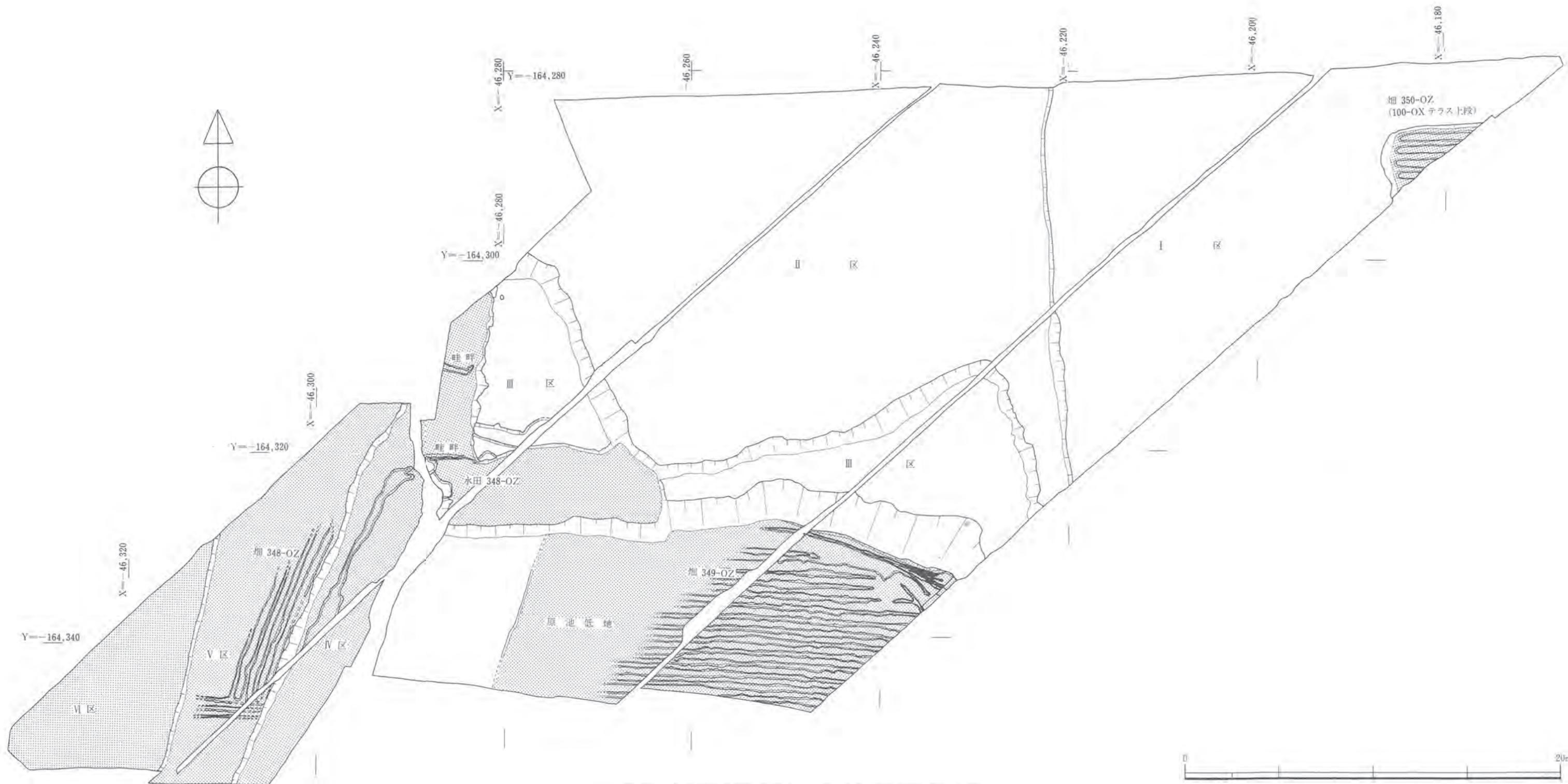
I区D-01-OXの上部層上面で検出された畑であり、01-OXのテラス上段上に分布する。偽礫層である01-OXの最上部層に覆われて保存されたものである。前述したように、01-OX上部層は平井面第5層に、最上部層は第4層に対比される。概査であるために正確な遺構の状況は記載し得ないが、少なくとも4筋の畝と畝間が、01-OXの北縁に平行して分布していた。

（趙）

小結

D地区の平井面III～VI地区および原池低地で検出され、または推定される耕地の景観は棚田や段々畑を想定させる（第79図）。この時期（III帯形成期）に入って、段丘崖斜面の耕作化への開発が盛んになり、現状に近い地形面区画が形成されたことを物語るものであろう。

ただし、段丘面上にあたるI・II区では、小凹地にD-350-OZが分布するように、未だ大小の地形面区画が存在していたと推定される。現状のI・II区が形成されるのは、平井面第3層が、いずれの地形面にも断続的にはあるが広く分布することからみて、第3層形成時以降のII帯形成期であったと結論される。



第79図 D地区 遺構平面図4 (III帯; 江戸時代前半、畑・水田)



第80図 D地区 遺構平面図5 (II帯; 江戸時代後半以降)

なお、上記の水田と畑は、同層準の作土層上面で検出されていることから、二毛作が行われた可能性が高い。今後、諸分析がすすめば、畑耕土からも水田の要素が抽出されるであろう。(趙)

L. II帯検出遺構

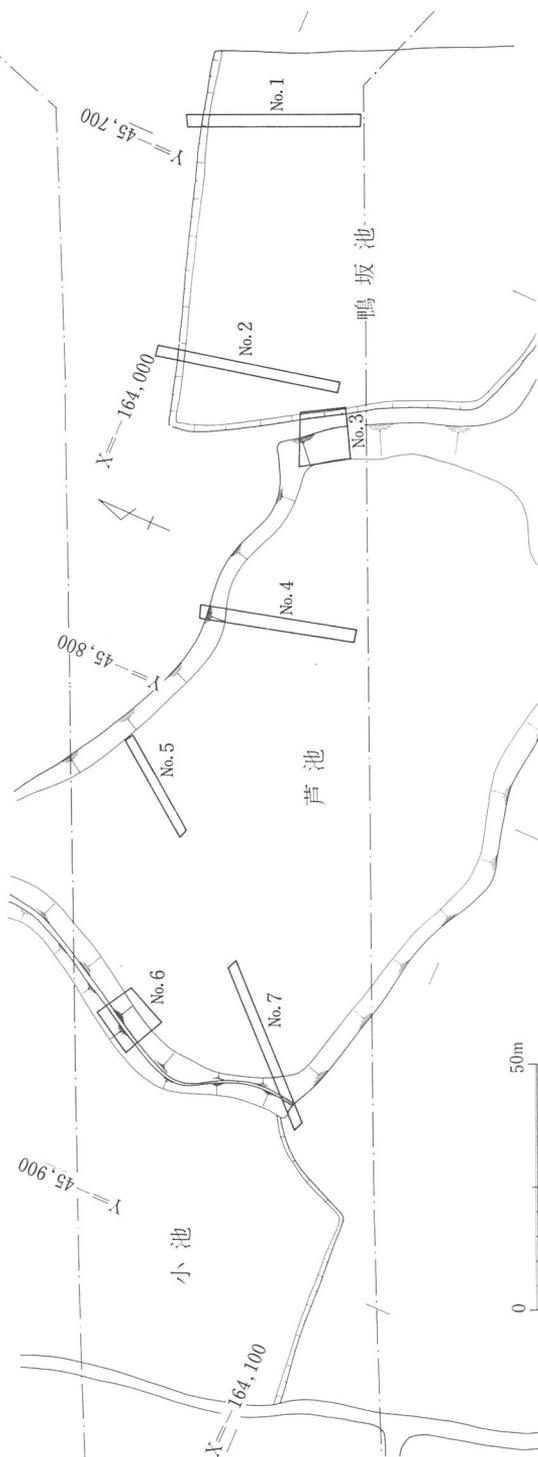
第80図に、II帯で検出された遺構を示す。

原池低地のものは、C層下面で検出された東西方向の犁溝群と、これに重なる南北方向の小溝群である。IV区・V区のもの、平井面第2層下面の犁溝群であり、いずれも両区の伸びの方向に平行する。また、III区では、D-348-OZが分布した凹地は埋積されて平坦になり、第3層下面で現状に近い区画となっている。

4区北端の第1.5層基底面にはコの字状に曲がる溝D-87-OSが検出されている。幅約2m、深さ0.6~1.2mのこの溝からは、近代に比定し得る陶磁器類、瓦等が出土した。現代用水路の前身であろう。(趙)

6. A池地区

A池地区は、池の築造過程を把握するため、堤部分(NO.5、NO.6トレンチ)と池部分(NO.1~4トレンチ)を設定し、調査した。堤部分の調査からは、築造が3回にわたる事、堤当初の築造は、出土遺物から15~16世紀代にあると推定される。(渋谷)



第81図 A池地区トレンチ配置図

註 1. 堺市教育委員会 (1983) 「小阪遺跡発掘調査報告」, 堺市文化財調査報告書, 第12集, 100-166 p.
 2. 伊藤久嗣 (1965) 「収蔵庫建設に伴う発掘調査」, 元興寺極楽坊編, 元興寺極楽坊総合収蔵庫 (第1収蔵庫) 建設報告書, 4-15 p.

第5章 遺物

第1節 概要

平井遺跡からは、各時期の遺構・遺物が検出されたが、質、量共に良好なのは、13世紀と15、16世紀にかけての遺物である。

旧石器は、遺構に伴って出土したものはなく、A東地区とB、C地区の中近世包含層より出土した。量的には少ない。

弥生時代中期後半の土器、石器は、D地区原池低地の古墳時代包含層より出土する。量的には少ない。この時期の遺物は、この地区以外の地点では一切出土しない。

古墳時代中～後期にかけての遺物は、B、C地区の自然流路にとまなうものや原池低地の包含層中より出土する。また、B、C地区全域に分布する中～近世包含層からは、古墳時代後期の遺物が出土する。窯体片などの出土例も多い。

奈良時代から平安時代前期にかけての遺物量は極めて少なく、B、C地区にわずかに分布するのみである。遺構にとまなうものはない。

平安時代中期、10世紀代の遺物は、B、C地区の遺構にともなって出土する。特定地点に遺物の分布は限定される。

11～13世紀にかけては、平井遺跡の最も盛期にあたる時期で、A西地区からB、C地区にかけて遺構にとまなう遺物が分布する。11、12世紀は、原池低地の包含層、j、k層より、12世紀後半から13世紀にかけては、A西地区より西B、C、D各地区で出土する。とりわけ、B地区1028-00の瓦器窯に伴って出土した資料は、遺構の性格上、一級資料といえる。

15、16世紀の遺物は、B、C、D各地区の溝や淵などの水利施設に一括投棄されたものが存在する。質、量共に豊富で、B地区2109-0SやD地区02B-0Xなどの一括資料がある。泉州地域において、15、16世紀の一括資料は少なく、編年資料として極めて良好なものである。

17世紀以降の遺物は、A東、A西、B、C、D各地区一帯に広く分布する水田址にともなって出土する。遺構の性格上、各時期のものが混在しており、良好な資料は存在しない。

第2節 旧石器～奈良時代

1. 旧石器～弥生時代

今回の調査で、旧石器を含む石器類が出土した。量的には少ない。遺構にともなうものはなく、全て中近世の包含層から出土した。弥生時代の土器、石器は、D地区原池湿地m層より出土したもので量的にも少ない。

旧石器（第82図）

旧石器には、ナイフ、翼状剥片、石核がある。

ナイフ（1～3） 3は、残存長4.6cm、幅2.5cm、重さ3.5gを測る。全体に欠損、転磨しており、不良である。横長剥片或いは、翼状剥片を素材としており、主要剥離面から荒い背部調整を施すことにより、ナイフ型石器に仕上げている。1は、長さ4.1cm、幅1.8cm、重さ2.35g、2は、残存長3.4cm、幅1.8cmを各々測る。1は素材剥片の末端部分を基部、背部加工してナイフに仕上げている。2は、素材剥片が折損もしくは、折りとった後、背部加工および基部加工を施してナイフに仕上げている。全て石材は、サヌカイトである。

翼状剥片（4、5） 4は、残存長6cm、幅2.3cm、重さ9.26g、5は、長さ8.5cm、幅3.3cm、重さ33.61gを測る。4は、打面の形状は、複数枚の剥離痕により形成された山形であり、打面下半部に打面縁調整が認められる。剥片剥離は、石理に順目でおこなわれている。5は、打面は大きな2枚の剥離面により山形であり、打面は、大きな2枚の剥離面により山形であり、打面縁調整用のものが認められる。背面には、本剥片が剥離された石核の打面が残存しており、当剥片が剥片剥離の初期の段階に剥取されたことがうかがえる。剥片剥離は、石理に反順目でおこなわれている。全て石材は、サヌカイトである。

石核（6・7） 長さ8.4cm、幅4.5cm、重さ76.04gを測る。剥片素材の石核である。背面に複数の大きな剥離痕が認められることから交互剥離によった剥片を石核に用いている。打面は、山形に調整され、頂部を打点として剥離がおこなわれている。異なる剥離痕があることから、剥離作業面が移動した可能性がある。剥離された剥片は、反順目である。

7は、長さ4.8cm、最大幅1.4cm測る石核である。背面に大きな複数の剥離面が観察できる。

石器（第83図）

石器には、石鏃、フレーク、クサビ形石器、ハンマー、剥片石核、スクレイパーがある。

石鏃（8～10） 石鏃には、平基無茎式石鏃(9)と有茎式石鏃(10)と凹基無茎式石鏃(8)があ

る。9は、残存長2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ3.41gを測る。基部両端には、連続した細部調整により刃部をつくり、やや丸味をもつ縦長の形状を呈す。10は、残存長3.8cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm、重さ3.45gを測る。茎は欠損しているものの基部両端には連続した細部調整により刃部をつくる。8は、残存長1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ1.0gを測る。先端は欠矢している。基部のわたくりは大きい。石材は、サヌカイトである。

フレーク(13) 長さ5.5cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm、重さ6.75gを測る。背面は大きな2枚の剝離面から成り、綾上部には細かな剝離が認められる。石材は、サヌカイトである。

クサビ形石器(12) 長さ5.0cm、幅3.6cm、厚さ0.9cm、重さ22.27gを測る。綾の部分が敲打によりつぶれている。素材となったものには、自然面および剝離痕が観察される。敲打のつぶれと風化の度合がちがう。

剝片石核(14) 長さ7.2cm、幅4.1cm、厚さ1.4cm、重さ36.85gを測る。剝片素材の石核である。背面に2枚の大きな剝離痕が観察される。剝離作業は、2方向に設定されている。いずれも明瞭な打面調整を行わず、小形の横長剝片を搾取している。

スクレイパー (15~18) 縦長の剝片を用いたもの(15)と横長の剝片を用いたもの(16~18)がある。15は、自然面の平坦面を打面にし、剝離されている。背面には自然面を切る二枚の大きな剝離面が観察される。調整は、主要剝離面左側縁に、両面からの細部調整を施す。16~18は、打面と平行する側縁に両面からの細部調整を施す。17は、斜側縁に細かな剝離が観察される。

弥生土器、石器 (第84図)

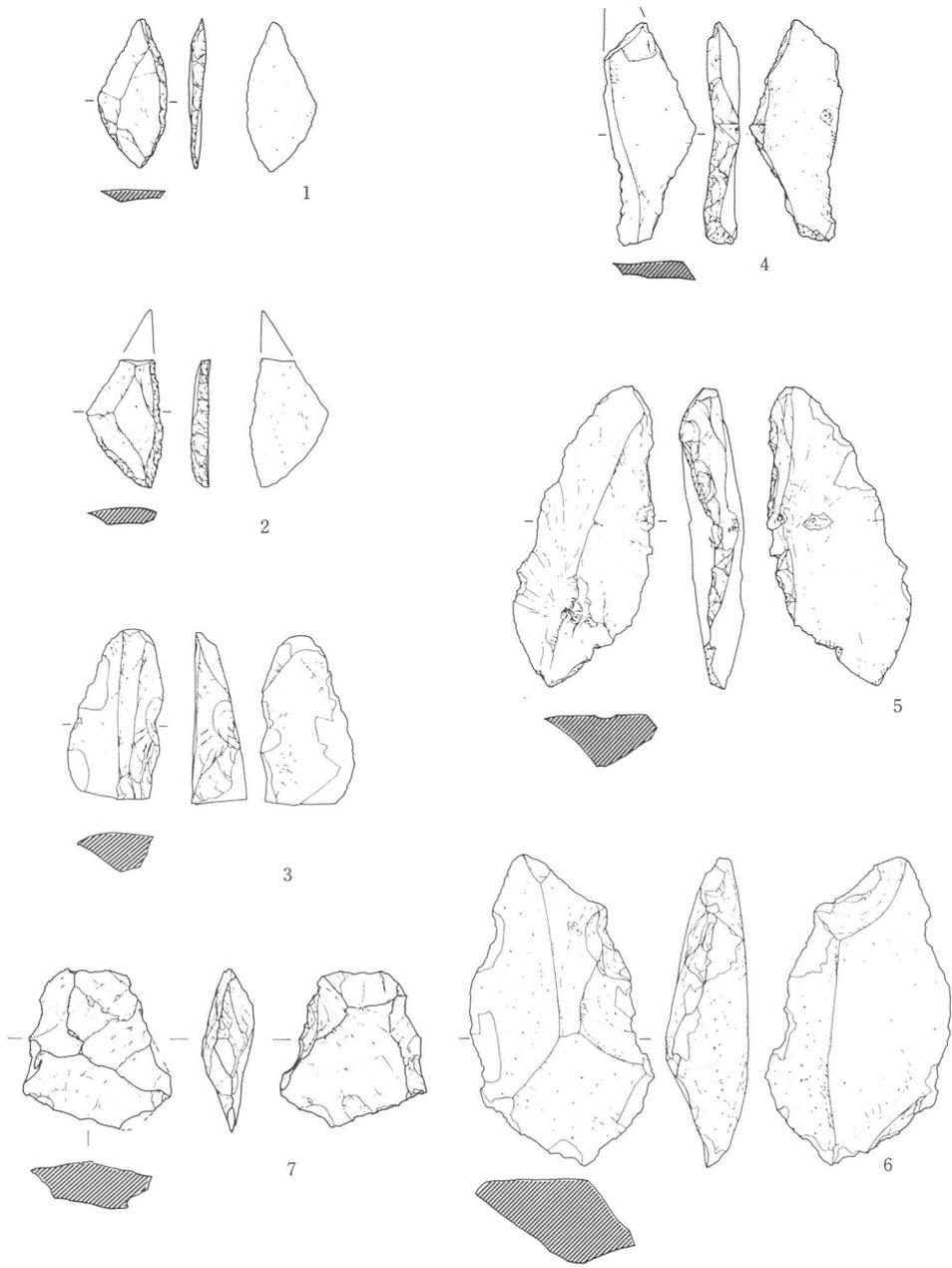
地区m層からは、弥生土器、石包丁が出土した。

弥生土器 弥生土器には、壺、甕がある。弥生時代中期後半の時期と考えられる。

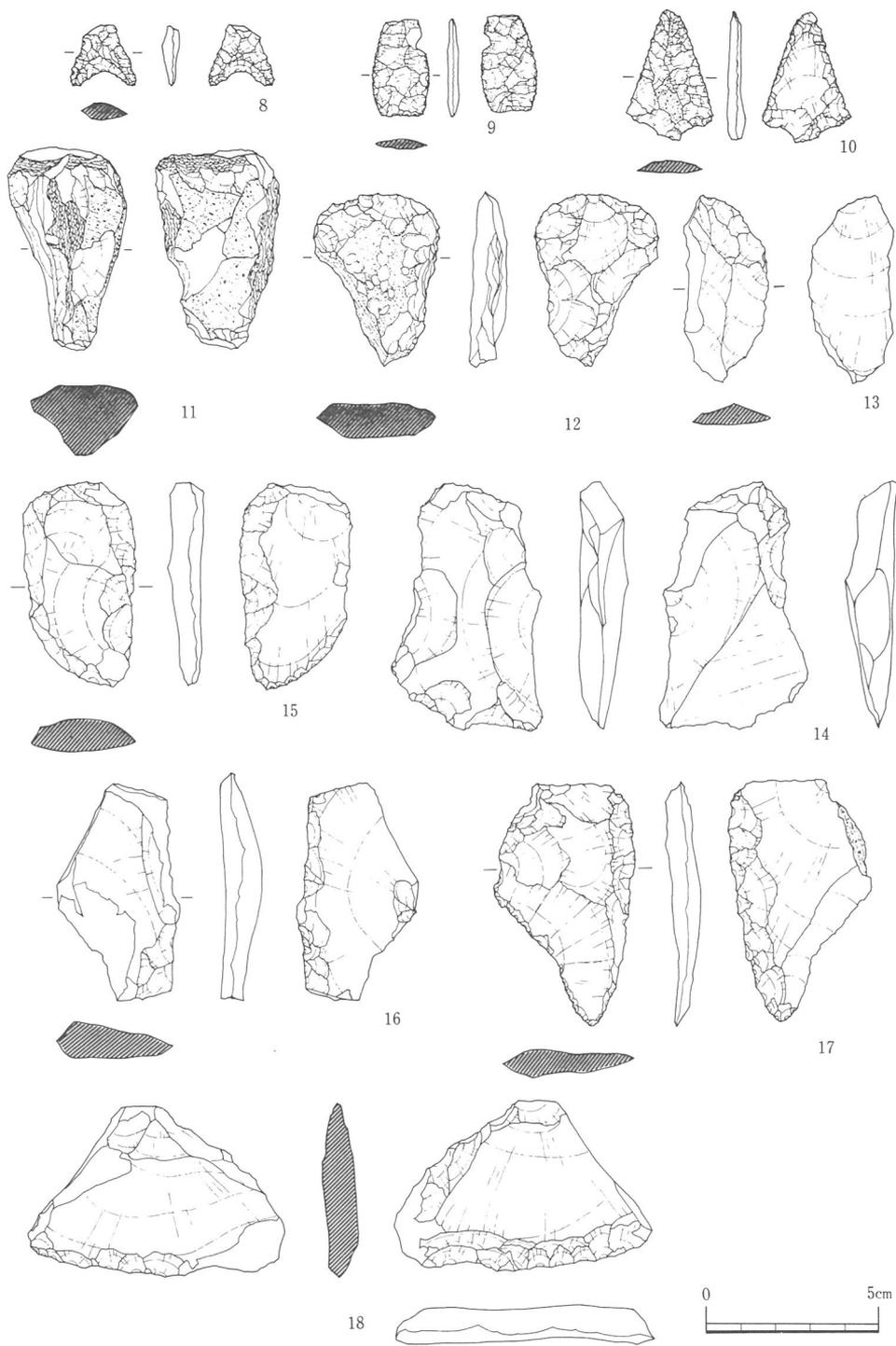
壺(19) 口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は外反して上外方にのび、口縁部はほぼ直立し、端部は拡張され凹面を成す。口縁部外面には凹線文が3条巡る。口縁部内面は荒いハケ調整の後ナデ調整を施す。外面はナデ調整である。

甕 (20) 肩の張りの少ない体部から「く」字形に屈折し、上外方にのびる短い口縁部がつく。口縁端部は上下に拡張され、外傾する凹面を成す。体部外面は縦方向の細かなハケ調整、内面は縦、横方向の荒いハケ調整を施す。口縁部は内外面ともナデ調整である。

石包丁 (21~22) 両方共に2分の1程度欠いている。刃部は、外湾刃で片刃のものである。21は残存長7.0cm、幅4.6cm、厚さ0.7cm、22は残存長6.7cm、幅4.5cm、厚さ0.8cmを各々測る。平面形は直線刃半月形態である。中央部背寄りに2つの紐孔が残るが、一つは



第82図 旧石器 遺物実測図



第83图 石器遺物実測図

折断面にかかる。石質は緑色片岩である。

(小谷)

2. 古墳時代後期～奈良時代

古墳時代後期から奈良時代にかけては、遺構にともなったものに、C-76-O S、包含層に、D地区原池低地の包含層、D-1層、k/l層がある。また、B、C地区全域に分布する中近世包含層中からも遺物は出土する。量的には少ない。須恵器が主で、土師器は存在しない。

D-1層 (第84図)

D-1層からは、須恵器が出土した。

須恵器 須恵器には、杯蓋、杯身、把手付碗、甗、壺がある。

杯蓋(4) 口径13.4cm、器高4.6cmを測る。口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段を成す。天井部は比較的丸い。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。

杯身(1、3) 1は、口径11.6cm、器高6.0cmを測る。口縁部は内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は短く、断面三角形を呈す。底部は平らで、内弯気味に口縁部に続く体部を有す。底部外面は不整方向のナデ調整、底部と体部の境に静止ヘラ削りを施す。底部内面は不整方向のナデ調整である。3は、口径13.0cm、器高5.1cmを測る。口縁部は内傾してのびた後、端部付近が短く外反気味に開く。端部は丸く仕上げる。受部はやや上外方へのび、端部は丸く仕上げる。底部は比較的丸味をもつ。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。

把手付碗(4) 口径9.2cm、器高7.8cmを測る。底部は平坦で、内弯気味に上外方へのびる体部に、外反する口縁部がつく。口縁端部は丸く仕上げる。把手は欠損して不明である。体部に凸線が2条巡る。底部内外面とも不整方向のナデ調整、体部から口縁部の内外面は回転ナデ調整を施す。

甗(5) 口頸部は欠損している。体部は偏球形を呈し、体部の最大径は、その二分の一に求められる。体部外面中位には二条の沈線が巡り、その間に刺突文を施す。刺突文上に外方から内方に向って円孔スカシを施す。外面の調整は回転ナデ調整である。

壺(6) 口径12.8cmを測る。肩の張る体部から外反して上外方へのびる口径部を有す。端部は丸く仕上げる。肩部外面はカキ目調整、内面は円弧タタキを施す。

D-k/l層 (第84図)

D-k/l層からは、須恵器が出土した。

須恵器 須恵器には壺がある。

壺(7) 口頸は欠損している。肩部は下外方に張り出し、体部は内弯気味に下内方に下る。底部は比較的丸味をもつ。底部には三方スカシを有す脚が付いていた痕跡を残す。肩部から体部外面は回転ナデ調整を施し、体部外面には刺突文を施す。底部外面は回転ヘラ削りである。

C-76-OS (第84図)

C-76-OSからは、須恵器が出土した。

須恵器 須恵器には杯蓋、杯身がある。

杯蓋(8~9) 8は口径11.4cm、器高4.4cmを測る。口縁部は外反気味に下り、端部は内傾する凹面を成す。天井部は丸い。14は復元口径11.0cm、復元器高3.8cmを測る。口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面を成す。天井部は比較的丸味をもつ。8、9の調整は、天井部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。

杯身(10) 口縁部は欠損している。受部は短く外方にのび、底部は比較的平らである。底部外面はヘラ削り、内面は回転ナデ調整である。

中近世包含層出土遺物 (第85図)

B、C地区の中近世包含層(3a・3b・3c・3d層)には、中近世の遺物に混り、古墳~奈良時代の遺物が多数出土した。包含層出土の古墳~奈良時代の遺物には、須恵器、土師器があるが、土師器は円筒埴輪のみである。

須恵器 須恵器には杯蓋、杯身、高杯、甕、壺、鉢、円筒埴輪がある。

杯蓋(13、16) 4は復元口径13.8cmで、口縁部は下内方に下り、端部は内傾する明瞭な段を成す。口縁部内外面とも回転ナデ調整を施す。10は復元口径10.8cmを測る。口縁部は下外方に下り、端部は丸く、内面にかえりを有す。かえりの端部は丸く仕上げる。天井部は平らである。天井部外面はヘラ削り、内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。

杯身(10、14~15) 10は復元口径10.6cmを測る。口縁部は内傾してのびた後短く外反する。端部は内傾する凹面を成す。受部は上外方のび、端部は丸く仕上げる。14は復元口径11.8cmを測る。口縁部は比較的短く内傾してのび、端部は丸く仕上げる。受部はやや上

外方にのび、端部は丸く仕上げる。15は復元口径13.3cmを測る。口縁部は短く内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は上外方にのび、端部は丸く仕上げる。調整は、底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整、口縁部は、内外面とも回転ナデ調整である。

高杯（11～12） 高杯には無蓋高杯(11)がある。11は脚部を欠損している。平坦な底部から内弯気味に上外方にのび、外反して口縁部に続く。端部は丸く仕上げる。中位には二条の凸線が巡り、その下に波状文を施す。体部には断面耳状の把手を付す。底部外面には回転ヘラ削りを施す。(12は脚部の破片である。基部は比較的太く、下外方にのび、外端面は凸面状を成し、上方に綾を有す。スカシは台形スカシと考えられる。

甕（20～22）

20は復元口径30.8cmで、口頸部は直線的に上外方にのび、外端面は内傾する凸面を成す。口頸部外面には、端部から下1cm前後と4cm前後に各一条の凸線が巡り、その間に波状文を施す。21は復元口径34.8cmで、口頸部は上外方に直線的にのび、端部は上下に肥厚し、ほぼ垂直な面を成す。口頸部外面には、端部から下1cm前後に一条、6～7cm前後に二条、11cm前後に一条の凹線を巡らし、その間に波状文を施す。21は復元口径28.8cmで、口頸部は外反してのび、端部は下方に肥厚する。外端面は、ほぼ垂直な凹面を成す。

壺（17～18） 17は平らな底部に、断面台形を呈する高台が付く。18は平らな底部に、底部端からやや内側に「八」字形に開く高台が付く。

鉢（19） 肩の張らない体部から、口縁部は上外方に短くのび、端部は面を成す。

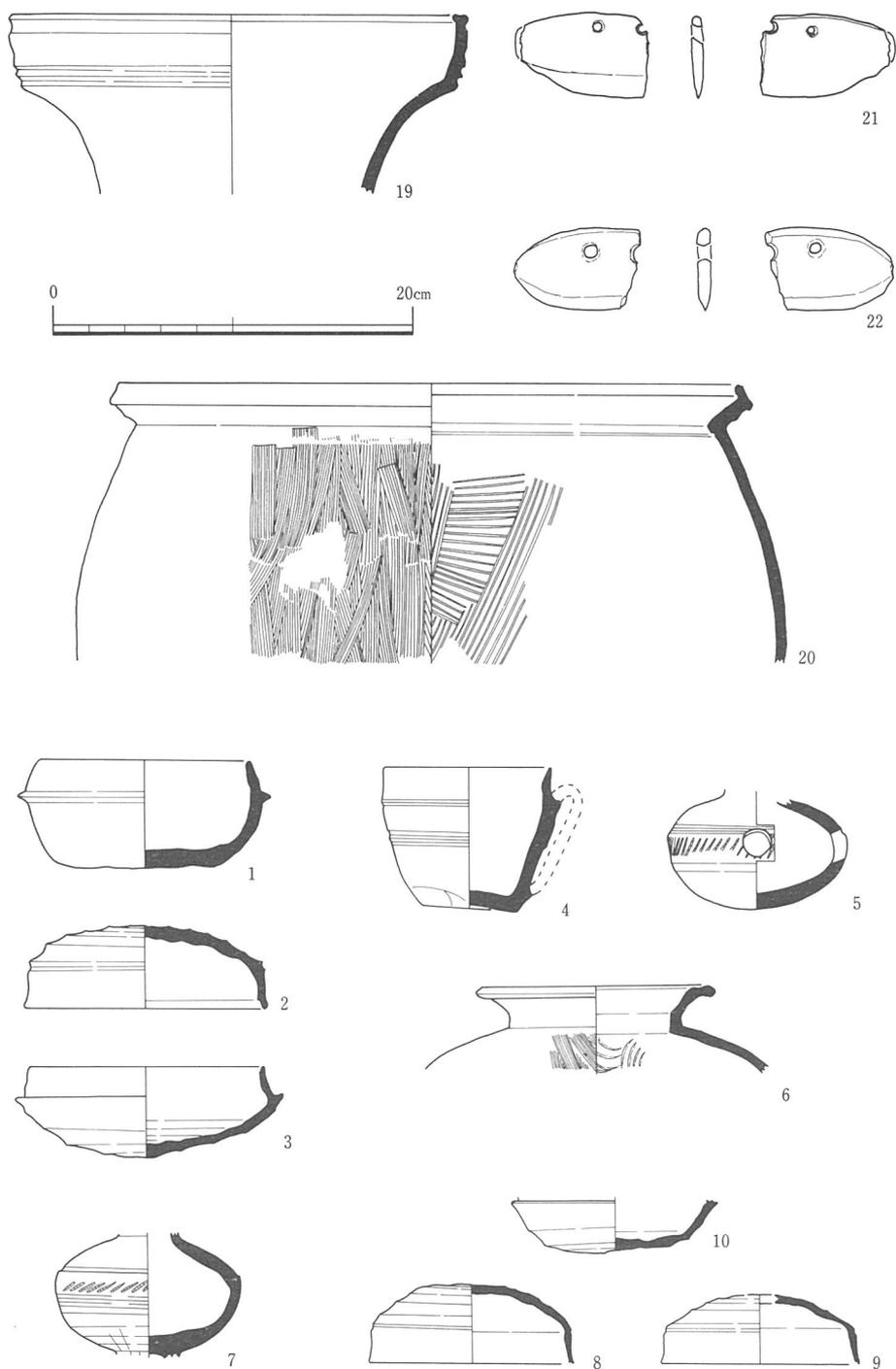
円筒埴輪（23～25） すべて円筒埴輪の小片である。須恵質のもの(23～24)と土師質のもの(25)がある。23は断面三角形のタガを有し、タガの接合部分はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、内面は斜め方向のハケ施す。24は体部外面はタテハケ、内面は斜め方向のハケの後ナデている。25は断面低い台形のタガを有し、タガ部分は凹面を成す。体部外面はタテハケ、タガとその上下はヨコハケを施す。内面はナデである。 (小谷)

第3節 平安時代中期

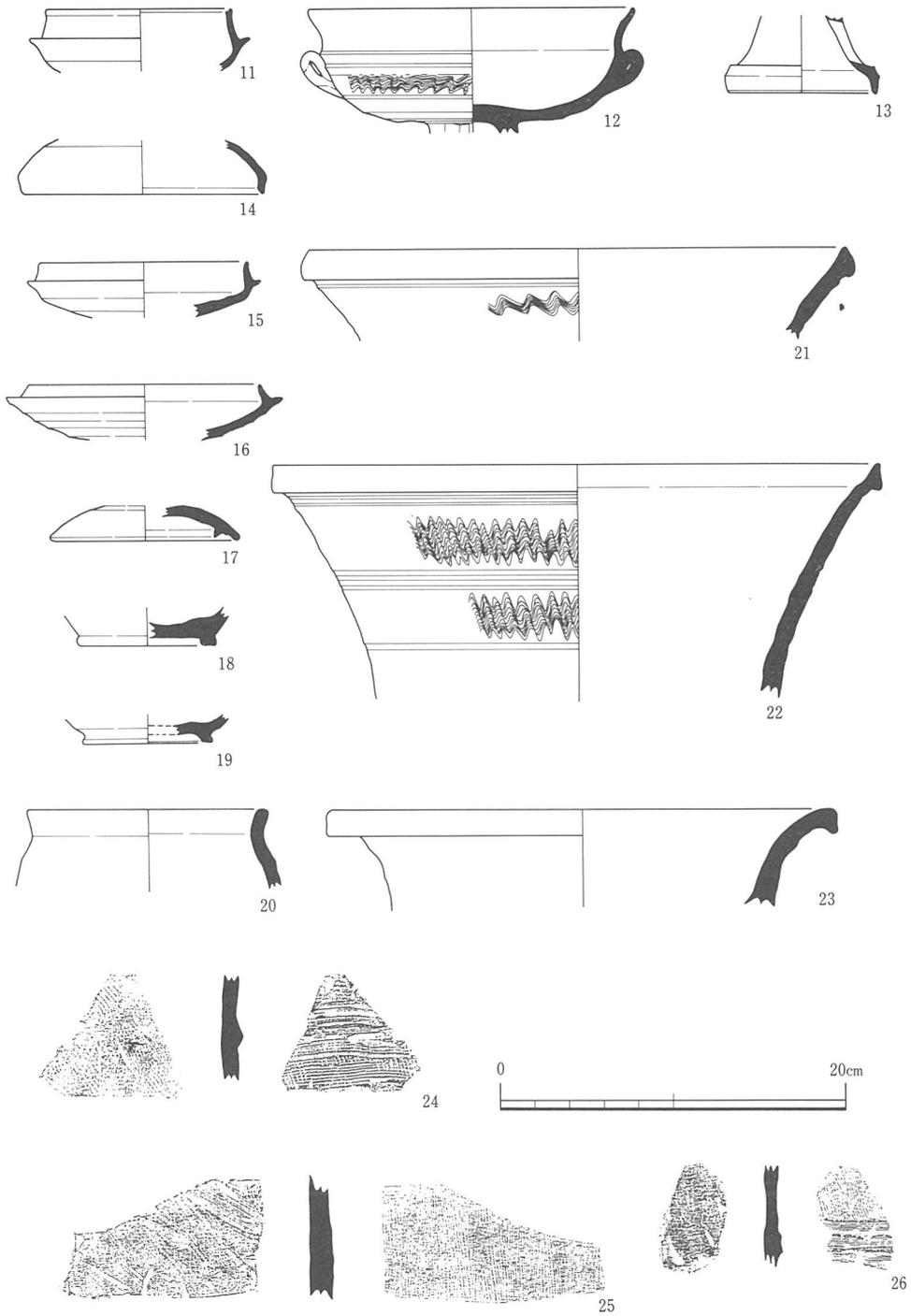
平安時代中期、10世紀の遺物は、量的に少ない。A～D地区の全地区を通じて中～近世にかけての包含層中に混在する量も極めて微量である。

遺構に伴って出土したものに、B、C地区の掘立柱建物や土壌群、また包含層には、C地区、古墳時代流路76-OS上に整地によって堆積したものなどがある。

B-366-OP（第86図）



第84図 D地区 m層、1層、C地区76-O S出土遺物実測図



第85図 B、C地区 古墳時代出土遺物実測図

黒色土器、土師器がある。

黒色土器 黒色土器は、椀がある。

椀 (21、22) 椀は、内面と口縁部外面が黒色化するA類と内外面黒色化するB類がある。側壁ミガキ調整は、乱方向に施す(22)。

土師器 土師器には、皿、羽釜、甕がある。

皿 (20) 皿は、小皿で、口縁端部外面を軽くナデ調整するため、口縁部は内弯する。口縁端部内面に一条の沈線を施す。

羽釜 (24) 直線的に立ち上がる体部に、鏝を水平につける。内外面磨滅のため、調整等、一切不明である。復元口径22cmを測る。

甕 (23) 甕は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口縁部と体部の境界は、ナデ調整によってまるみをおびる。口縁端部は、面をもつ。

B-384-〇〇 (第85図)

黒色土器がある。

黒色土器 黒色土器には、椀がある。

椀 (29) 「ハ」字状にひろく高台を平坦な底部につけ、体部から口縁部にかけては、わずかに内弯しながら立ち上がる。口縁端部は、やや太い沈線を施す。内面調整は、太く粗いヘラ磨き調整を施す。

C-173-〇〇 (第86図)

黒色土器がある。

黒色土器 黒色土器には、椀がある。内外面磨滅する。

椀 (15~19) 椀は、内面と口縁部外面の一部が黒色化するA類(15~18)と内外面が黒色化するB類(19)がある。形態は、2種類ある。「ハ」字形の高台をつけた底部は、やや凹み、体部から口縁部にかけては内弯しながら立ち上がるもの(15~17)で、口径14~14.5cm、器高4.8~5.5cm、高台径6.3~7cmである。他は、平坦な底部に「ハ」字形の高台をつけ、体部から口縁部にかけては、わずかに内弯しながら直線的に立ち上がるもの(18、19)である。口径15~15.4cm、器高6cm、高台径7.8cm前後である。口縁端部には、沈線を施さないもの(16、17)、不明瞭なもの(18)、明瞭なもの(15、19)がある。体部外面調整は、指おさえのもの(16)、軽い削り調整やミガキ調整をおこなうが、指おさえ調整による凹凸が残存するもの(15)、丁寧なヘラミガキ調整をおこなうもの(19)がある。体部内面調整をおこなうもの(19)がある。体部内面調整は、見込みは密に、側壁は放射状にヘラミガキ調整を太くおこな

うもの(15)や間隔を荒くおこなうもの(16)、丁寧におこなうもの(19)がある。胎土は、微量の砂粒を含む。

土師器 土師器には皿がある。

皿(9～14) 皿は、口径により、大、小がある。大皿(14)は、口径15.8cm、器高2.4cmを測り、口縁端部内面に面をもつ。底部は指おさえ調整、口縁部はナデ調整である。胎土に微量の砂粒を含む。小皿(9～13)は、口径9.4cm前後、器高2.3cm前後で、口縁部は、1回ナデ調整する。口縁端部に沈線をもつもの(11)もある。胎土には砂粒を含む。

C-172-00 (第86図)

黒色土器土師器がある。

黒色土器 黒色土器には、碗がある。

碗(5～7) 碗は、全て小破片で、7は二次焼成のため、磨滅が激しい。内面が黒色化するA類である。口縁部をナデ調整し、体部外面は削り調整(5)する。内面ミガキ調整は、丁寧におこなうもの(5)と太く、間隔を粗くおこなうもの(6)がある。

土師器 土師器には皿、甕がある。

皿(1～4) 皿は、口径の大、小により2種類ある。復元口径10.5cm、復元器高2.6cmと口径10.5cm、器高2cm前後(1～4)がある。量的には後者が多い。小皿は、口縁部をナデ調整する。ナデ調整のつよさによって形態は三種類あり、口縁端部を軽くナデ調整する事によって口縁部が内弯するもの(2)、ややきつくナデ調整する事によってわずかに外反するもの(1、3)、きつくナデ調整する事によって外反がきついもの(4)がある。口縁端部に沈線を施すもの(4)と施さないもの(1～3)がある。器壁の厚さは、口縁端部に沈線をもち、口縁部の外反がきついもの(4)が最も薄く、8は最も厚くつくられる。色調は、2系統に分類でき、内外面10Y R8/2、浅黄橙色の一群(2～4)と10Y R4/2灰黄褐色(1)がある。胎土は砂粒を含む。

甕(8) 甕は「く」の字形に外反する口縁部をもつもので、口縁部内外面のナデ調整は、強くおこなう。胎土は砂粒を含み、色調は、2.5Y R6/2灰黄色である。

C-291-00 (第86図)

黒色土器がある。

黒色土器 黒色土器には、碗がある。

碗(27、28) 内外面が黒色化するB類である。口縁端部内面が凹む。内外面丁寧なヘラミガキ調整をおこなう。胎土は良く、微量の砂粒を含む。